

# ミヤケ北遺跡

—主要地方道柏原駒ヶ谷千早赤阪線交差点改良工事に伴う発掘調査—

大阪府教育委員会

# ミヤケ北遺跡

—主要地方道柏原駒ヶ谷千早赤阪線交差点改良工事に伴う発掘調査—

大阪府教育委員会



## 序 文

ミヤケ北遺跡は、南河内郡太子町太子に所在する縄文時代晚期後半の集落遺跡です。柏原駒ヶ谷千早赤阪線交差点改良工事に先立って、平成20年度に行った試掘調査ではじめて見つかり、その後の発掘調査で集落の一端が明らかになった新規発見の遺跡です。

太子町は、古代には「近つ飛鳥」と呼ばれた地域の一画を占めており、官道である竹内街道がとおり、町域の中央部には聖徳太子墓、孝徳天皇陵、小野妹子墓、推古天皇陵といった陵墓などが集中することから、「王陵の谷」ともよばれ、全国的にも注目すべき遺跡が多い所です。そしてそれらは、古墳時代以降のものが主体です。それに対して、ミヤケ北遺跡のある太子町西部は、あまり遺跡の分布しない地域とされてきたのですが、そのような地域での新たな遺跡の確認、しかも太子町では初めての縄文遺跡は予想外のことでした。

今回、住居跡と考えられるピット群や土器棺、府内では珍しい石器製作跡と考えられるサヌカイトの集中部や、複数の土坑などの遺構が発見され、遺物としては縄文土器や狩猟に使った石鏃など多数の石器の他、有溝砥石も出土しました。これらは、縄文集落の全体像を明らかにするとともに、南河内地域の縄文社会の様子を明らかにしていく上で、非常に重要な調査成果を提供することになりました。

最後に、発掘調査の実施にご協力いただきました地元の皆様、ならびに関係機関に深く感謝いたしますとともに、今後とも本府文化財保護行政へのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成24年3月

大阪府教育委員会事務局

文化財保護課長 野口 雅昭

## 例 言

1. 本書は、主要地方道柏原駒ヶ谷千早赤阪線交差点改良工事に伴い実施した南河内郡太子町太子地内に所在するミヤケ北遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、大阪府都市整備部から依頼を受け、大阪府教育委員会が実施した。
3. 現地調査は、調査第二グループ副主査 山田隆一を担当者として、平成21年度に1次調査を、平成22年度に2・3次調査を実施した。また、整理作業は平成21・22・23年度に、調査管理グループ主査 三宅正浩、副主査 藤田道子を担当者として実施した。
4. 本調査の調査番号は、平成21年度の1次調査が「09008」、平成22年度の2次調査が「10009」、3次調査が「10074」である。
5. 調査の写真測量は、2次調査を株式会社エムズ、3次調査を株式会社南紀航測センターに委託した。撮影フィルムは、同社で保管している。
6. 出土した遺物の写真撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
7. 発掘調査および整理作業にあたっては、地元自治会、太子町教育委員会、大阪府富田林土木事務所の御協力を得た。
8. 本調査で作成した記録資料と出土遺物は、大阪府教育委員会で保管している。
9. 本文の執筆において、第3章第2～4節の縄文土器は大野 薫が、第3章第5節は館 邦典が行い、その他の執筆および編集は山田が行った。
10. 発掘調査、遺物整理および本書の作成に要した経費は、大阪府都市整備部が負担した。
11. 本書は300部作成し、一冊あたりの単価は1,344円である。

## 凡 例

1. 本書に用いた標高は、東京湾標準潮位（T.P. 値）による。座標値は、世界測地系平面直角座標第VI系によるもので、方位は座標北を示す。
2. 土層の記載に用いた色調は、「新版 標準土色帖（23版）」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）2001. 1 によった。

## 本文目次

序 文

例 言

凡 例

第1章 調査にいたる経緯と経過

　　第1節 調査にいたる経緯 ..... 1

　　第2節 調査の経緯と方法 ..... 2

第2章 位置と環境 ..... 3

第3章 調査成果

　　第1節 層序 ..... 4

　　第2節 1次調査の遺構と遺物 ..... 10

　　第3節 2次調査の遺構と遺物 ..... 18

　　第4節 3次調査の遺構と遺物 ..... 34

　　第5節 出土剥片類の検討 ..... 46

第4章まとめ ..... 51

## 挿図目次

第1図 調査地位置図 ..... 1

第2図 調査区位置図 ..... 2

第3図 周辺の遺跡分布図 ..... 3

第4図 土層断面図1（3・1次調査） ..... 5・6

第5図 土層断面図2（2次調査） ..... 7・8

第6図 1次調査遺構平面図 ..... 10

第7図 落込み01出土遺物実測図（1） ..... 11

第8図 落込み01出土遺物実測図（2） ..... 12

第9図 ピット集中部平面・断面図 ..... 14

第10図 土坑01～03・05・06平面・断面図 ..... 15

第11図 土坑他の出土遺物実測図 ..... 15

第12図 包含層出土遺物実測図 ..... 15

第13図 出土石器実測図（1） ..... 16

第14図 出土石器実測図（2） ..... 17

第15図 2次調査遺構平面図 ..... 19・20

第16図	土器棺01平面・断面図、土器棺実測図	21
第17図	北区の遺構平面図	22
第18図	土坑02平面・断面図、出土遺物実測図	23
第19図	土坑03・04平面・断面図	23
第20図	土坑04出土遺物実測図	23
第21図	北区包含層出土遺物実測図	24
第22図	北区出土石器実測図（1）	26
第23図	北区出土石器実測図（2）	27
第24図	南区の遺構平面・断面図	28
第25図	サスカイト集中遺構105出土遺物実測図	29
第26図	サスカイト集中遺構105出土石器実測図（1）	30
第27図	サスカイト集中遺構105出土石器実測図（2）	31
第28図	サスカイト集中遺構105出土石器実測図（3）	32
第29図	南区流路他の出土遺物実測図	33
第30図	ピット01平面・断面図	34
第31図	ピット01出土遺物実測図	34
第32図	3次調査遺構平面図	35・36
第33図	調査区南部のピット断面図	37
第34図	土坑02・03平面・断面図	38
第35図	土坑04・05平面・断面図	38
第36図	包含層出土遺物実測図（1）	39
第37図	包含層出土遺物実測図（2）	40
第38図	包含層出土石器実測図（1）	42
第39図	包含層出土石器実測図（2）	43
第40図	包含層出土石器実測図（3）	44

## 表 目 次

表1	各調査区剥片・石器類出土点数及び面積配分表	46
表2	各調査区出土石器構成表	47
表3	1次・2次（北区）・3次調査区 包含層	48
表4	2次調査南区 包含層及びサスカイト集中遺構105	50
表5	サスカイト集中遺構105集計表	50
表6	縄文土器観察表（1～9）	53～61

## 図版目次

- 図版表紙 ミヤケ北遺跡と二上山（南西から）
- 図版1 1次遺構  
a. 遺構完掘状況（北から）  
b. 落込み01掘削状況（南から）  
c. ピット集中部検出状況（北から）
- 図版2 1次遺構  
a. ピット集中部完掘状況（南西から）  
b. ピット集中部東壁断面（北西から）  
c. ピット集中部中央土坑04断面（東から）
- 図版3 1次遺構  
a. 落込み02掘削状況（南西から）  
b. 土坑01・02掘削状況（北西から）  
c. 土坑05断面（南東から）
- 図版4 2次遺構  
a. 北区遺構完掘状況（北から）  
b. 北区北半遺構完掘状況（南西から）  
c. 北区東部遺構検出状況（北西から）
- 図版5 2次遺構  
a. 土器棺01掘削状況（南東から）  
b. 土器棺01掘削状況（南から）  
c. 土坑02掘削状況（南西から）
- 図版6 2次遺構  
a. 北区流路12掘削状況（南南西から）  
b. 南区南半掘削状況（南南東から）  
c. 南区南半掘削状況（北北東から）
- 図版7 3次遺構  
a. 遺構完掘状況（北から）  
b. 東壁土層断面（北北西から）  
c. 東壁土層断面、第3-1～3層（西から）
- 図版8 3次遺構  
a. 南端ピット群掘削状況（北西から）  
b. 南端ピット群検出状況、左端ピット01（北西から）  
c. ピット01深鉢出土状況（北西から）
- 図版9 3次遺構  
a. 土坑03掘削状況（北西から）  
b. 土坑05掘削状況（北東から）  
c. 土坑01掘削状況（南東から）
- 図版10 1次遺物  
a. 落込み01出土縄文土器  
b. 落込み01出土縄文土器
- 図版11 1次遺物  
a. 落込み01出土縄文土器  
b. 落込み01・包含層出土縄文土器

- 図版12 1次遺物 a. 落込み01・包含層出土縄文土器（外面）  
b. 落込み01・包含層出土縄文土器（内面）
- 図版13 1次遺物 a. 落込み01・包含層出土縄文土器  
b. 遺構・包含層出土縄文土器
- 図版14 1次遺物 a. 包含層出土縄文土器  
b. 落込み01・包含層出土石器
- 図版15 2次遺物 a. 土器棺 b. 土器棺底部 c. 土器棺口縁部
- 図版16 2次遺物 a. 北区土坑04出土縄文土器・包含層出土縄文土器  
b. 北区包含層出土縄文土器
- 図版17 2次遺物 a. 北区包含層出土縄文土器  
b. 北区包含層出土縄文土器
- 図版18 2次遺物 a. 北区包含層出土縄文土器  
b. 南区サヌカイト集中遺構105出土縄文土器
- 図版19 2次遺物 a. 南区流路12出土縄文土器  
b. 南区流路14出土弥生土器  
c. 同 弥生土器底部 d. 同 弥生土器内面  
e. 南区流路12土弥生土器
- 図版20 2次遺物 a. 北区包含層出土石錐 b. 北区包含層出土石錐他
- 図版21 2次遺物 a. 側溝出土有溝砥石  
b. 有溝砥石（表面） c.（測面） d.（裏面）
- 図版22 2次遺物 a. 北区土坑02出土磨石  
b. 北区出土石鋸・粘板岩片
- 図版23 2次遺物 a. 南区サヌカイト集中遺構105出土石核  
b. 南区サヌカイト集中遺構105出土石核他
- 図版24 2次遺物 a. 南区サヌカイト集中遺構105出土石核  
b. 南区サヌカイト集中遺構105出土剥片他
- 図版25 3次遺物 a. ピット01出土縄文土器 b. ピット01出土縄文土器
- 図版26 3次遺物 a. 包含層出土縄文土器 b. 包含層出土縄文土器
- 図版27 3次遺物 a. 包含層出土縄文土器 b. 包含層出土縄文土器
- 図版28 3次遺物 a. 包含層出土縄文土器 b. 包含層出土縄文土器
- 図版29 3次遺物 a. 包含層出土石錐・石錐 b. 包含層出土削器他
- 図版30 3次遺物 a. 包含層出土削器・クサビ形石器  
b. 包含層出土石刀 c. 包含層出土磨製石庖丁
- 図版31 3次遺物 a. 包含層出土敲石・凹石 b. 包含層出土凹石

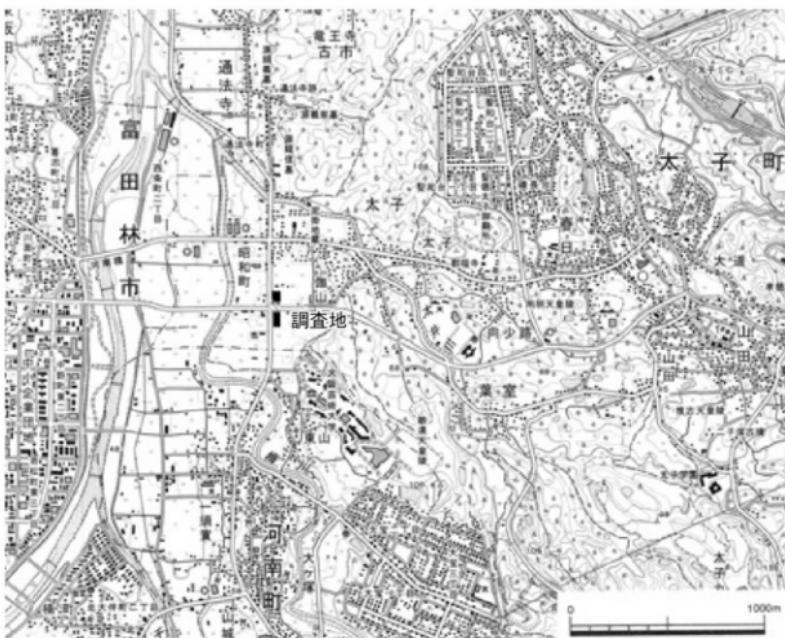
## 第1章 調査にいたる経緯と経過

### 第1節 調査にいたる経緯

今回の発掘調査は、主要地方道柏原駒ヶ谷千早赤阪線交差点改良工事に伴うものであり、調査地は南河内郡太子町太子地内である。現地は、富田林太子線と交差する交通量の激しい部分であるにもかかわらず、道路の幅は狭く、歩道もない状況であった。そこで交差点をはさんで南と北それぞれ約90mにわたり、道路幅を東側に約6~2.5m拡幅し、あわせて新たに歩道も設置することになったものである。

当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが、南方にミヤケ遺跡が隣接しており、事業主体である大阪府富田林土木事務所と大阪府教育委員会文化財保護課は、その取り扱いについて協議を行い、試掘調査を実施することになった。試掘調査は、最初に工事に入る交差点部分の北東隅と南東隅の2ヶ所で実施し、後者で遺構・遺物が確認された。

以上の結果のもとに、大阪府教育委員会が大阪府都市整備部から依頼を受けて、工事予定箇所の内、交差点南東隅部分で本調査を実施することになったものである。



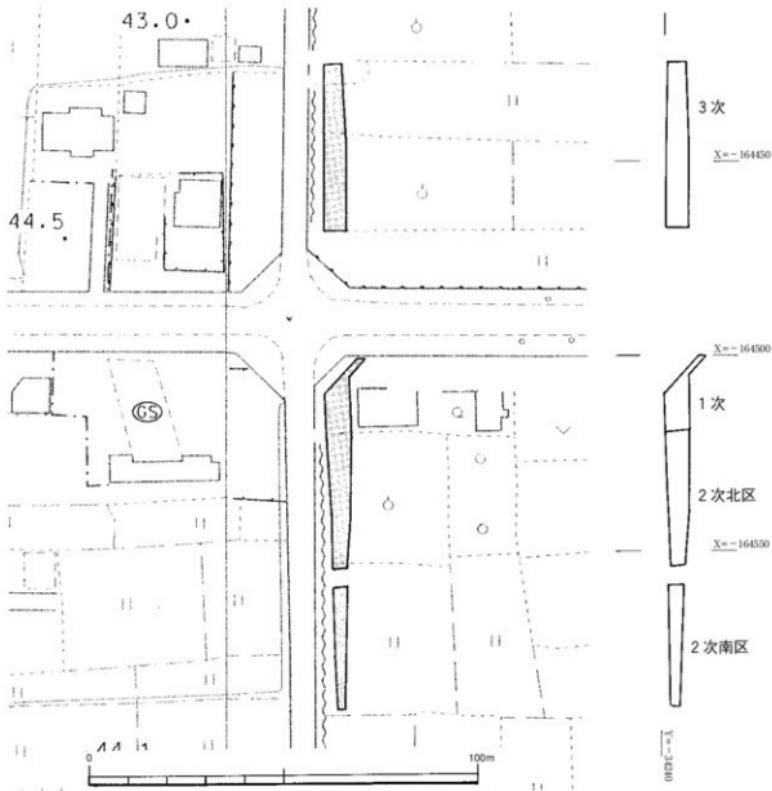
第1図 調査地位置図

## 第2節 調査の経過と方法

今回の調査地は、主要地方道柏原駒ヶ谷千早赤阪線の東側に沿う長さ約165mの間で、その中央部は太子南交差点である。平成21・22年度に、以下のように3工区に分け、工区ごとに文化財調査を実施し、その後に本体工事に移行する工程をくり返した。

現代の耕作土と床土は重機で掘削・除去し、それ以下を人力で掘削・調査した。遺物の取り上げは、各遺構平面図（第6・15・32図）に示した国土座標を基準に設定した5m四方の小区で行った。また、遺構面での人力掘削がほぼ終了した時点で、2・3次調査においては、ヘリコプターによる写真測量を実施した。なお、1～3次調査の調査期間、調査面積は以下の通りである。

- ・1次調査、平成21年6月8日～同年6月30日、77m<sup>2</sup>
- ・2次調査、平成22年6月2日～同年7月15日、270m<sup>2</sup>
- ・3次調査、平成23年1月5日～同年1月31日、240m<sup>2</sup>

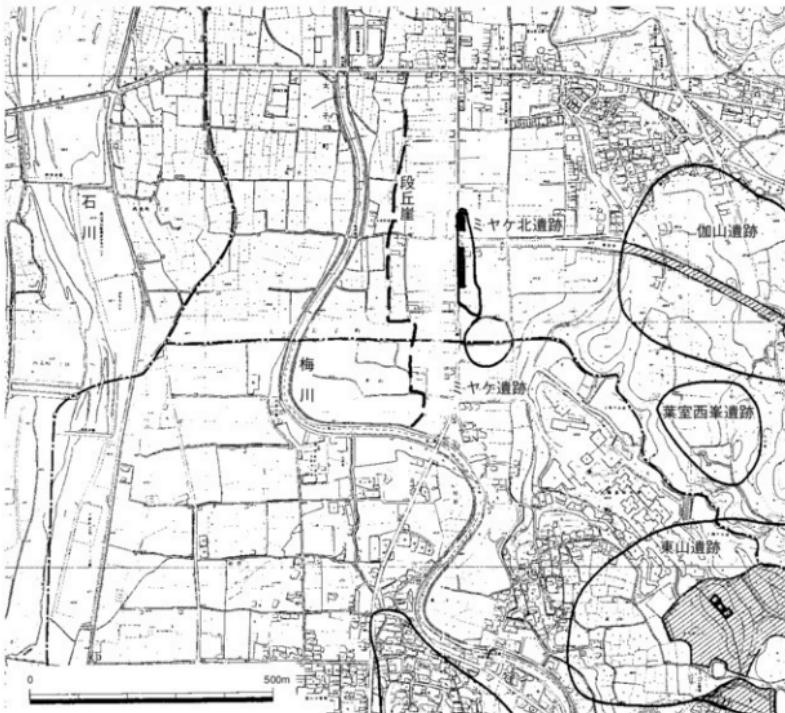


第2図 調査区位置図

## 第2章 位置と環境

ミヤケ北遺跡は、石川に流れ込む支流の一つである梅川右岸に立地する縄文時代晩期の集落遺跡であり、太子町では初めて確認された縄文遺跡である。この地域は、東の金剛山地と西の富田林丘陵に挟まれた狭長な谷底平野であり、「石川谷」と呼ばれている。周辺の遺跡分布は希薄であり、多くは中位段丘上に立地する。葉室西峯遺跡と東山遺跡は、弥生時代後期の高地性集落であり、伽山遺跡では弥生時代と古墳時代の堅穴住居、飛鳥時代の居館、墓等が確認されている。

ミヤケ北遺跡の立地について記載する。本遺跡は地形分類上では、梅川右岸の沖積平野に立地する。しかし現地を観察すれば、梅川に沿って氾濫原があり、ミヤケ北遺跡はそれよりも一段高い段丘面上に立地する。そして両者の間には、高さ2~4mの段丘崖が南北にのびており、第3図に破線で示した。ところでこの段丘は、第4章で記載するように、更新世に形成された段丘ではなく、地理学で「完新世段丘」と呼ばれるものと考えられる。この段丘の成立時期は、明確ではないが、縄文時代晩期より新しいと考えられ、景観復元には注意を要する。



第3図 周辺の遺跡分布図

## 第3章 調査成果

### 第1節 層序

調査では、各次調査区東壁の土層断面図を作成した。各次調査区の層序は、非常に類似しており、形成過程・性格等から4層に大別できる。そこで、層序については、1～3次調査分をまとめて報告することとし、北側から3・1次調査（第4図）、2次調査（第5図）の順に土層断面図を掲載した。なお土層番号は、大別4層は1～3次調査で共通するが、枝番号は調査次ごと（2次調査は北・南区ごと）に付けた。よって調査次が異なれば、枝番号が同じでも層序は異なる。

#### 第1層：現代の耕作に関わる土層、およびそれ以降の盛り土

現代の耕作土（1～1～4層）とその上の盛り土（1～0層）である。耕作土上面の標高は、調査区北部（3次）が43.1～43.2m、調査区中央部（1次）が43.6m、調査区南部の北区が44.0～43.9m、同南区が43.8mである。標高は北に向かって徐々に低くなるのではなく、調査区の中央部から南部の北区が高く、第4層の高まりが反映している。

#### 第2層：流路の堆積、および砂・粗砂・小礫混り土層

微高地間を網目状に流れる複数の自然の流路による堆積であり、南南東から北北西への方向性がある。色調は、黄褐色～褐色を主体とする。ラミナの形成される部分も多い。2次調査北区と南区の間と、3次調査南半で観察され、1次調査の包含層上にもその痕跡が確認できる。なお2次調査において、第2層は北区の第3層を覆い、南区の第3・4層を削る状況を示すのは、後者が蛇行する流路の攻撃面側、前者がその逆にあったことを示している。

本層は遺物をほとんど含まないが、2次調査南区北端の下部の流路14から弥生時代前期～中期初頭程度の鉢、上部の流路12最上層（2～4層）から古墳時代後期の高环片が出土しているので、弥生時代～古墳時代にかけて形成されたと考えておきたい。

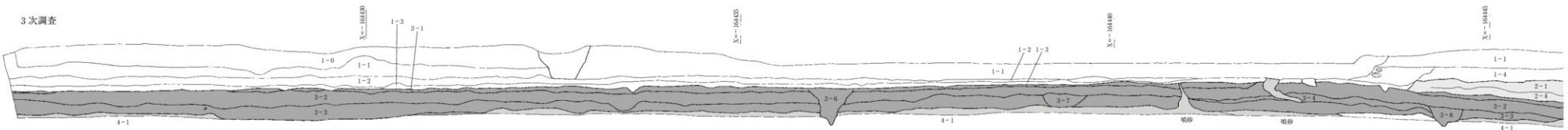
#### 第3層：繩文時代晩期の遺物包含層

本層は3次調査において、明瞭に3層に分層できる。3～1層は遺物包含層の最上部で、色調は黒褐色（7.5YR3/1～3/2）・褐灰色（同4/1）・灰褐色（同4/2）の範囲を呈した粗砂・小礫混り土で、5mm以下の黒色粒を多く含む。3～2層は、にぶい黄褐色（10YR5/3～5/4）を呈する弱粘質土である。3～3層は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、第4層を起源とする多くの粗砂・小礫の混じる土である。3～1層はいわゆる黒色帶で、3～2層との層界は明瞭に識別できる。3～2層と3～3層との層界はやや明瞭、3～3層と4層の層界は極めて不明瞭である。後者が不明瞭なのは、4層が上部に向かい徐々に土壤化の程度が強まり3～3層に移行する状況を示すためである。

1次と2次調査北区の遺構の密集する微高地では3～1層が主体で3～2層はわずかに観察できる程度である。一方、3次調査では3～1～3層の区別が明瞭である。なお3～1層は、3

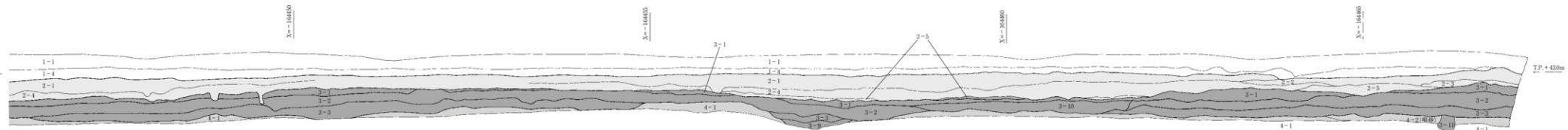
X= -16425

3次調査



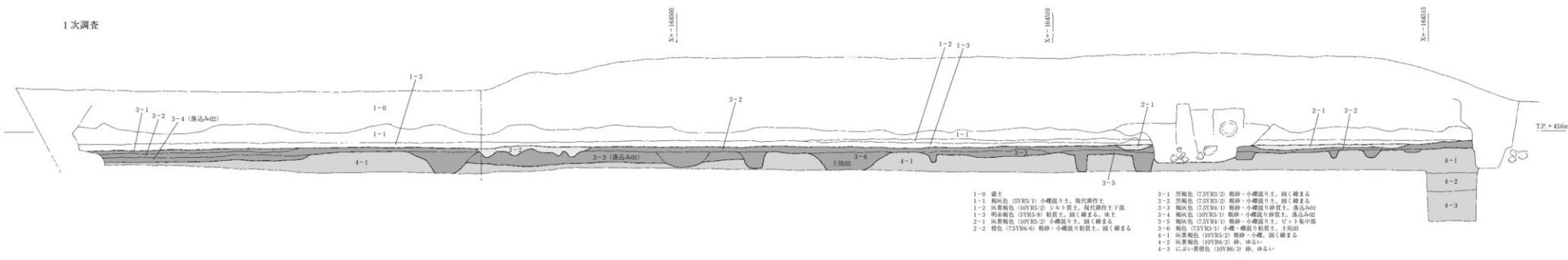
X= -16445

TP + 43.0m

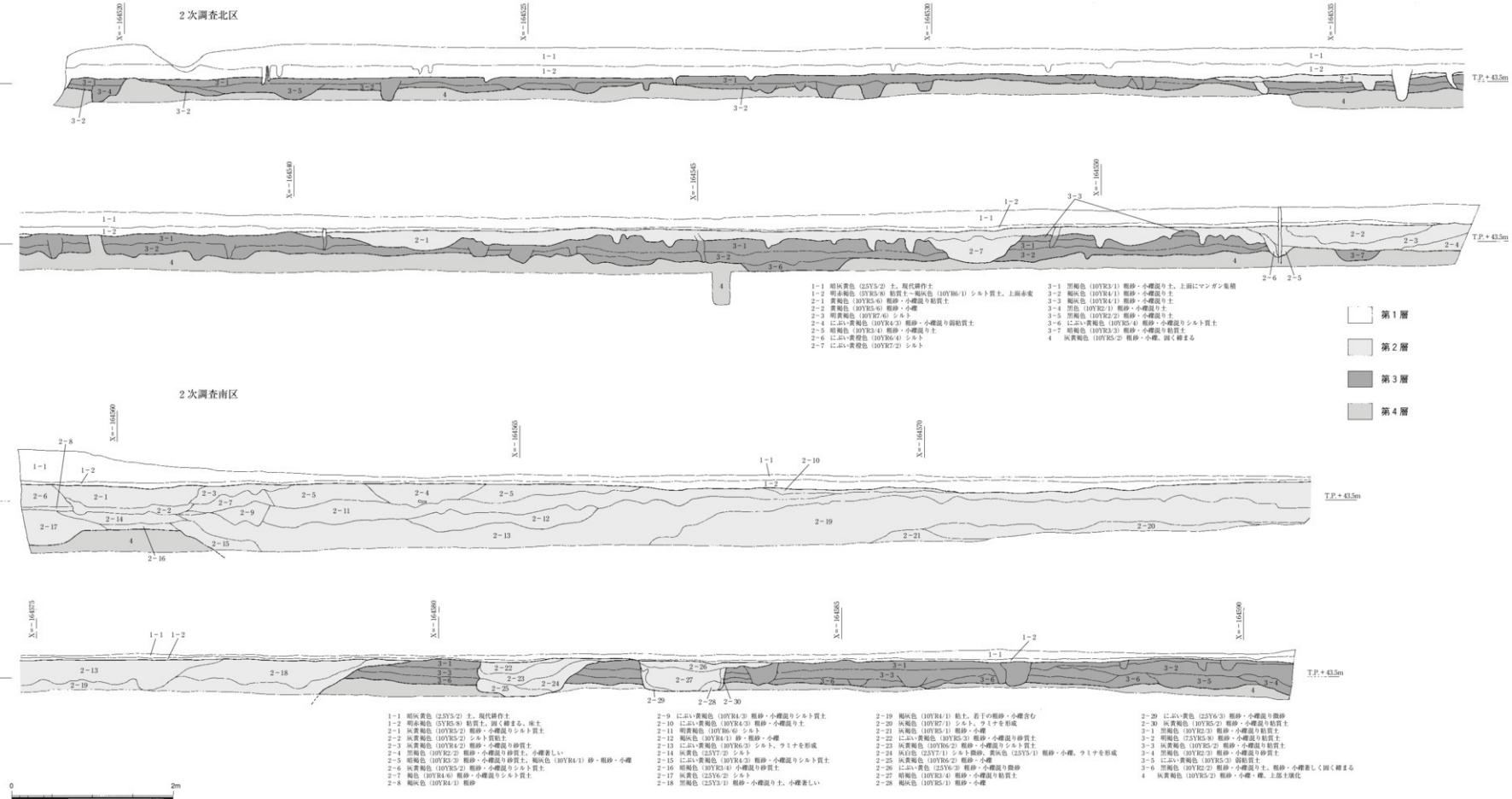


- 第1層
- 第2層
- ▨ 第3層
- ▨ 第4層

1次調査



第4図 土層断面図1 (3・1次調査)



第5図 土層断面図2（2次調査）

次調査で北方に行くほどに不鮮明になり、北5mで痕跡程度となり、やがて消失する。

また本層は、2次調査南区では6層に分層できる。2次3-1層は3次3-1層と類似の黒色帶であり、3-2・3層は、3次調査3-2層と類似の様相を呈する。また最下層の3-6層は、3次調査3-3層と同様に4層を起源とする多くの粗砂・小礫の混じる砂礫土である。

#### 第4層：灰黄褐色系の粗砂・小礫層

表面は硬く縮まる粗砂・小礫層であり、灰黄褐色を呈することが主体である。今回の調査における、縄文時代晚期の遺構検出面であり、本層中からの遺物は出土していない。なお本層は2次調査南区南端で急激に南方に落ちることを確認している。

ところで1次調査では、南端部にトレーナー設定して下層の調査を行った。それによると、硬く縮まる4-1層は層厚30cm程度で、それより下部は灰黄褐色系のまさにルーズな「河砂」と呼ぶべき砂層であり、4-1～3層の層界は不明瞭である。また標高42.4m以下は、湧水が激しいので掘り進めることができなかった。

なお、縄文時代晚期の遺構検出面である第4層の標高と、後に報告する遺構・遺物との関連を北方から概観すると、次のようなものである。

- 1) 3次調査の北半部は標高42.5～42.4mで、遺構は明確ではなく、遺物も少ない。
- 2) 3次調査の南半部は42.2～42.4mで、微高地裾部と考えられ、数基の土坑とピットが確認でき、遺物量は多い。1次調査地点からは1m程度低く、遺物は1次調査居住区の乗る微高地の北側からの流れ込みと考えられる。
- 3) 多数の遺構・遺物の確認できた1次調査区は43.3～43.4m、その遺構面の延長であり、さらに高密度の遺構・遺物の確認された2次調査北区43.5～43.4mである。標高が最も高く、集落の中心エリア、居住域と考えられる。
- 4) 2次調査の中央部に北北西方向に流れる自然流路をはさみ、2次調査南区の標高43.4mに遺構面が確認できた。

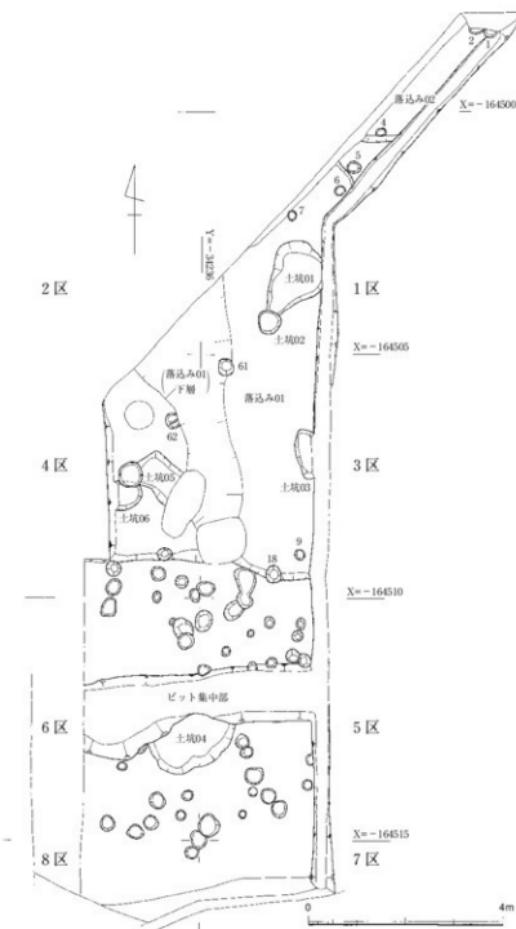
**地震痕跡** 以上の層序とは別に、各次の調査では著しい地震痕跡が確認できた。それは、遺構検出段階で平面的に確認できる地山の傾斜に平行した地割れと地形的に低い西側への落ち込み、その間から噴き上げられた噴砂である。その噴砂は、4-1層より下部から噴き上げられたルーズな「河砂」である。多くの場合は、第3層を破壊する状況で確認できるので、これらは縄文晚期後半以降の地震痕跡であるが、それ以上の地震発生の時期は特定できない。

また縄文晚期以前の地震痕跡も確認でき、3次調査の南端はその極端な事例である（第4図）。ここでは4-1層の上面には、その下部から噴き上げられた砂層が被覆しており、その上面から縄文晚期中ごろ～後半のピットが切り込む状況が確認されている。

## 第2節 1次調査の遺構と遺物

調査地は「太子南」交差点の南東隅であり、調査区の平面形は北東方向に突出部のある不定形な台形で、突出部は長さ約4.0m、幅約1.1m、台形部は幅約6.0m、電柱のために調査しえなかつた北西隅を除外した調査面積は約77m<sup>2</sup>である。

現代の盛土、耕作土、床土を除去すると、縄文晩期の包含層、遺構面である。遺構面の標高は43.3~43.4mで、西方に急激に低くなるので、南南東から北北西に延びる微高地の西側縁辺部に



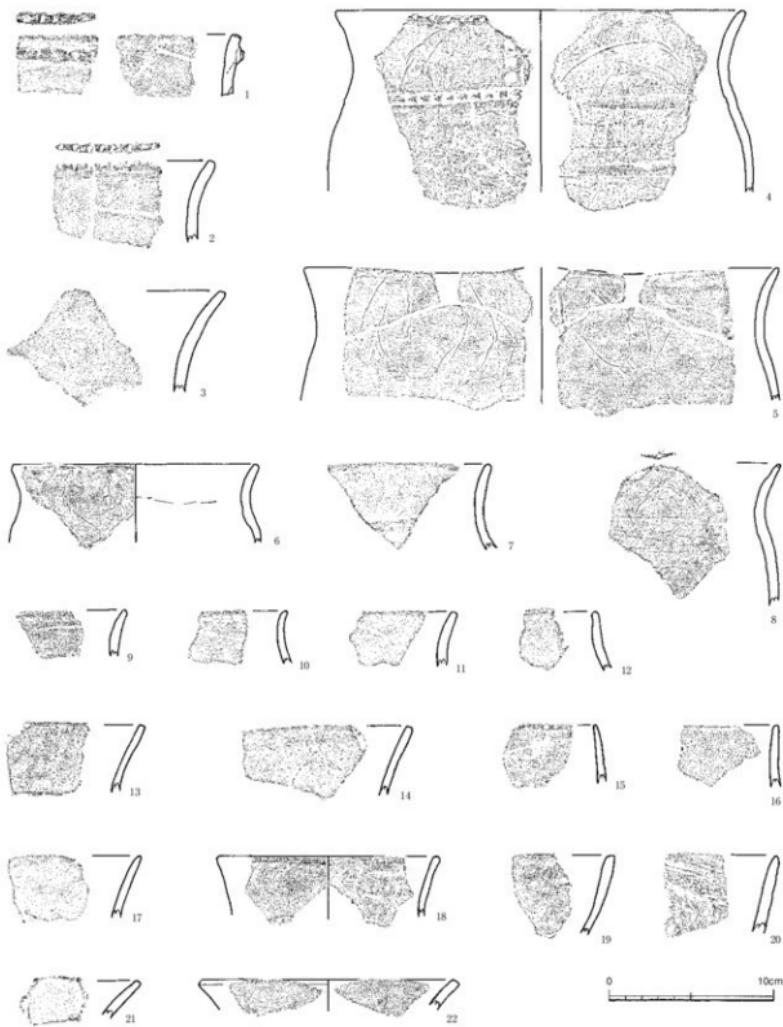
第6図 1次調査遺構平面図

近いと考えられる。遺構面では落込み、ピット集中部、土坑を確認したが、西に向かい遺構は希薄になる。

落込み01（第6図） 包含層掘削の後に、北東突出部を除く調査区北半で確認した。埋土は黒褐色を呈する粗砂・小礫混じり砂質土であり、多数の土器片を含む。掘削の結果、最終的に、調査で設定したY = -34246の軸線に中心を持つ北方に向かう小型の谷地形のラインが現れた。埋土は分層できないが、谷地形と認識できてからの遺物を下層として取り上げた。

土器（第7・8図） 落込み01では上層と下層に分けて遺物を取り上げているが、これは層序に基づくものではなく、任意の分層である。遺物は上層により多く、下層は少ない。以下、おむね器種ごとに述べていく。

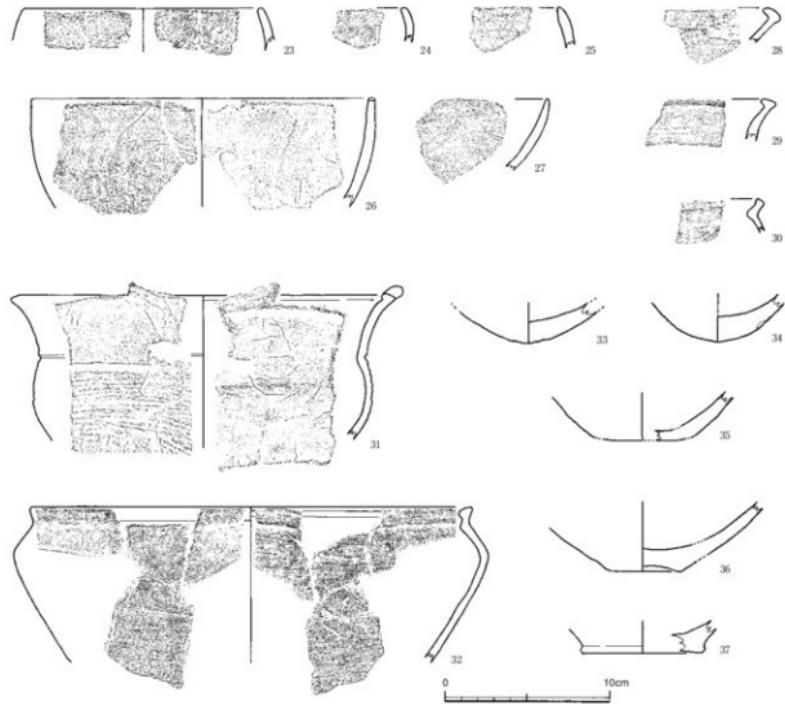
1は刻目突帯文土器深鉢である。口縁端部から若干下が



第7図 落込み01出土遺物実測図（1）

った位置にしっかりした突帯をめぐらせ、D字刻目を施す。口唇部は面取りし、ここにもD字刻目を施している。滋賀里IV式とみられる。落込み01出土土器中で唯一の刻目突帯文土器であり、混入の可能性がある。

2～6・8・12は口頸部が軽く外反する深鉢である。口頸部外内面をナデ、胴部外面をケズリ



第8図 落込み01出土遺物実測図（2）

で仕上げるものが多い。2・4・8は口唇部に刻目を施す。5は小さな波頂部を有するものかもしれない。4は頸胴部界に押し引き状のD字連続刺突文をめぐらせ、その下縁に1条の強いナデを入れている。D字連続刺突文は縦位にも施文されている。中部瀬戸内地方の影響を受けた文様である。6・12は形状・胎土・調整がよく似ており、同一個体の可能性がある。

7・9～11は浅鉢口縁部とみられるものである。遺存部分が少ないので浅鉢と断定できるわけではないが、口縁部内外面をミガキまたはナデで丁寧に仕上げていることから浅鉢とみておきたい。

13～22は浅鉢もしくは浅鉢の口縁部であるが、判断に迷うものが多い。17・19・22は浅鉢であろうが、丁寧な仕上げの13・14・16・17、口頭部が軽く内湾する15なども浅鉢かもしれない。

23～32は浅鉢である。23～27は口縁部が内湾する楕円形の浅鉢で、小破片が多い。口縁部内外面はおおむねナデである。25には口縁部外面に屈折する沈線文が施文されている可能性がある。26は口縁部から胴部まで遺存している。口唇部には細かい刻目を施している。口縁部と胴部の境界は不明確だが、口縁部は丁寧なナデ、胴部はケズリのち軽いナデを施している。内面は板状工具による軽いナデである。27は外面の一部に赤色顔料が認められる。28・29は口頭部が外反する

浅鉢で、口縁端部が内折するものである。28は内折部分がやや長く、外面には赤色顔料が認められる。29は内折部分が玉縁状を呈する。30は内傾する頸部から、口縁部がくの字に屈曲して短く立ち上がる浅鉢である。31は口頸部が大きく外に開く浅鉢である。口縁端部を小さく内折させ、口唇部には突起を貼り付けている。口縁部内外面は丁寧なミガキである。胴部は軽くふくらみをもち、外面は二枚貝条痕、内面は丁寧なナデである。外面頸胴部界には明瞭な段を作っている。篠原式中段階としてよからう。32は肩部が大きく張り出す胴部から、口縁部がくの字に屈曲して短く立ち上がる浅鉢である。口縁端部は内側に玉縁状に肥厚している。内外面全体をミガキで仕上げている。篠原式新段階とみられる。

33～37は底部である。33・34は丸底、35は平底に近い丸底、36は凹底、37は平底である。35は丁寧な調整であることからみても浅鉢底部としてよいものである。

落込み01出土土器で最新のものは滋賀里IV式と考えられる1の突帯文土器であるが、突帯文土器はこの1点に留まり、混入の可能性がある。この突帯文土器を除外して落込み01出土土器を検討すると、31の浅鉢が、胴部に二枚貝条痕を施し、頸胴部界に明瞭な段を作出するなどの特徴から、篠原式中段階のものと位置づけることができる。31以外の土器については、口唇部に刻目を施すものが出現している、深鉢肩部に刺突文が施文されている、明確な二枚貝条痕が認められない、などの特徴からみて、大部分が篠原式新段階のものとみることができよう。

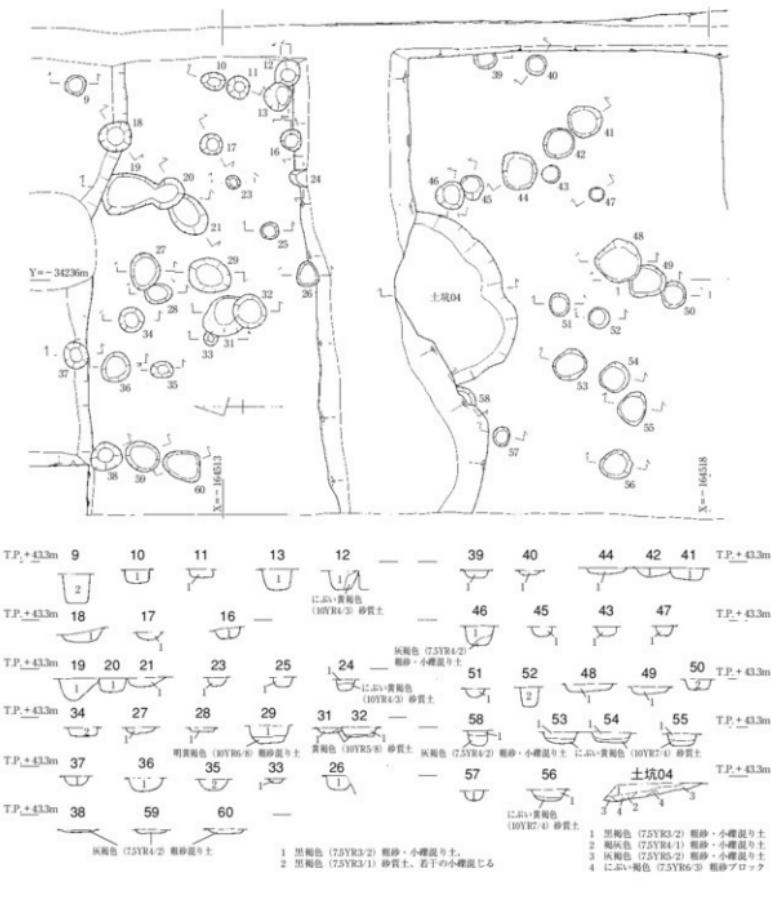
**ピット集中部（第9図）** 調査区中央部で確認した49基のピット群で、中心に土坑04がある。土坑04からの炭や焼土は未確認だが、ピット集中部は住居跡の可能性を想定しておきたい。現在のコンクリート管理設で中央部東西方向に破損を受ける。ピット群が落込み01と重複する部分では、ピットはその埋土上面から確認できるので、落込み01より後出する。ピットは、土坑04を中心に直径6.5mの範囲におさまり、その外には存在しない。中心からいくぶん放射状を呈して分布する。ピットは浅いものが一般的で、柱痕が確認できるものはない。なお土坑04埋土から、底部細片（第11図38）が出土している。

**落込み02（第6図）** 調査区北東端で、包含層掘削後に、土坑あるいは落込みとして確認した。埋土は粗砂・小砾の混じる砂質土で、深さ6cm、遺構内は平坦で、ピット3基を検出した。北端のピット2基の周辺ベース面上で若干の炭細粒の散布が確認できた。なお竪穴住居の可能性も想定したが、調査区の幅1.1mの狭い部分なので、遺構の性格は不明である。埋土から刻目突帯文土器の口縁端部細片が出土した。

**土器（第11図40）** 刻目突帯文土器である。口縁部突帯のみ遺存する。突帯はやや平坦化しており、かつ口唇部外面に貼り付けられていて、長原式と判断してよいと思われる。

**土坑01（第10図）** 不定形な土坑であり、土坑02に切られる関係である。規模は長軸1.5m、短軸1.2m、深さ0.2m、遺構の性格はわからない。

**土坑02（第10図）** 円形の土坑であり、土坑01を切る関係である。規模は直径47～50cmの円形であり、遺構の性格はわからない。埋土から突帯文土器の口縁端部細片が出土した。

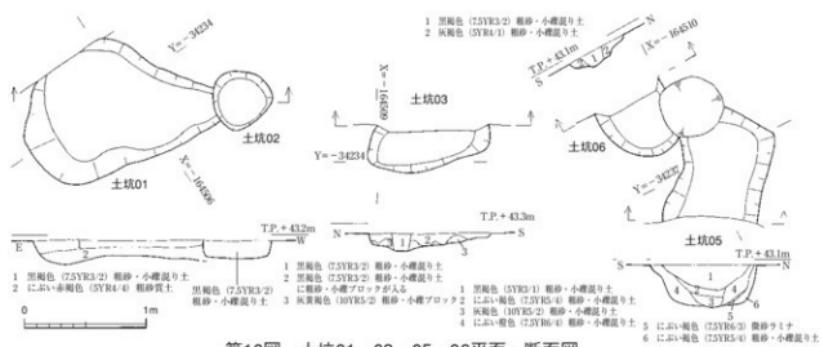


第9図 ピット集中部平面・断面図

**土器（第11図39）** 刻目突帯文土器である。口頸部は軽く内湾しており、口縁端部付近に1条の刻目突帯をめぐらす。刻目突帯の添付位置は口縁端部とも若干下がった位置ともとれる。ここでは長原式としておきたい。

**土坑03（第10図）** 土坑の西部を確認したのみで、調査区外にのびる。土坑の底部に地山起源の砂礫ブロックが多く含まれる。遺構の性格はわからない。

**土坑05（第10図）** 長方形の土坑であり、東部と西部は攪乱で破壊されている。規模は長辺0.9m以上、短辺0.8m、深さ0.35mである。遺構の性格はわからない。



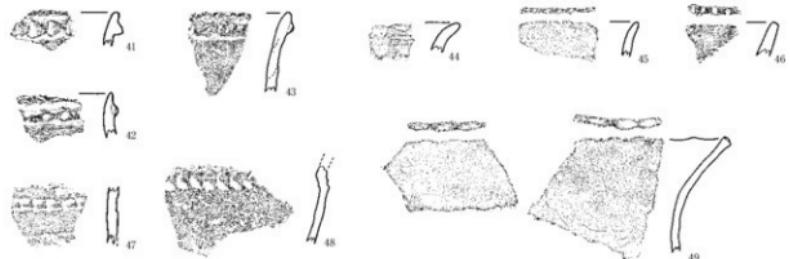
第10図 土坑01~03・05・06平面・断面図

土坑06(第10図) 楕円形の土坑であり、西半は調査範囲外、北部は擾乱で破壊されている。規模は長軸0.6m以上、短軸0.6m、深さ0.14mである。柱穴と考えられる。

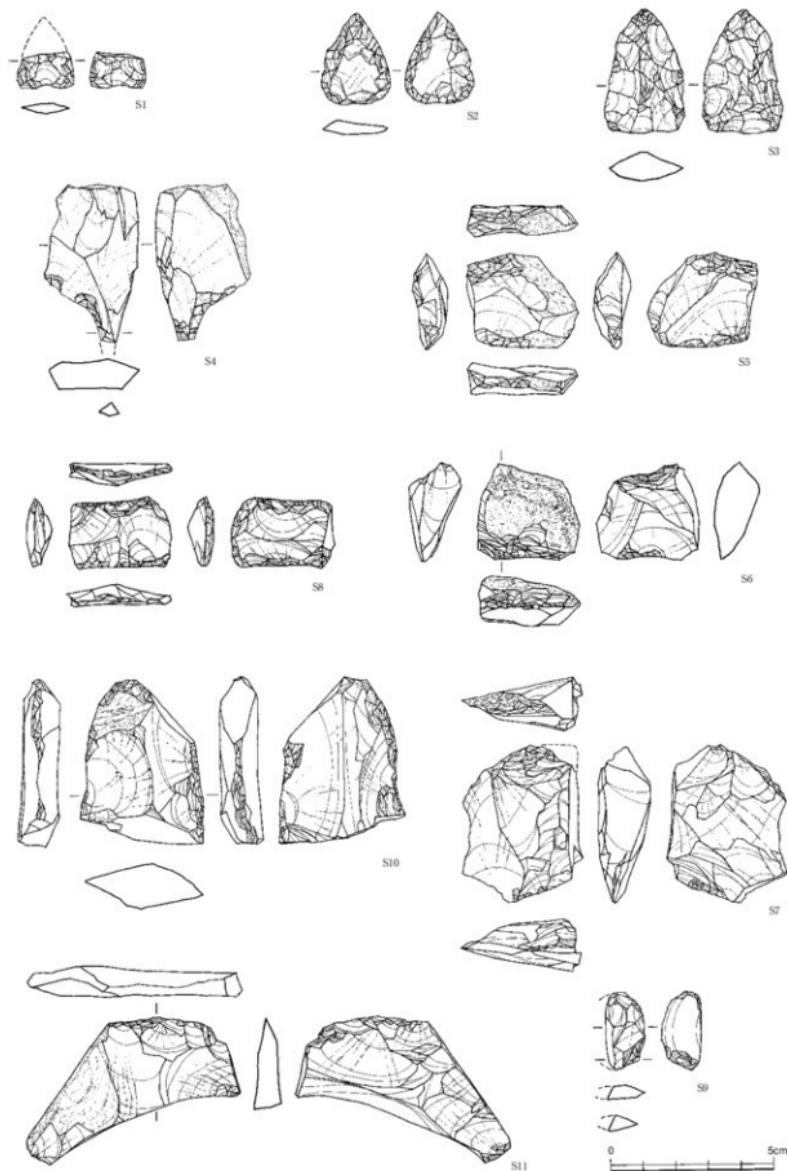
包含層の土器(第12図) 41~43は刻目突帯文土器である。

41~42は突帯が口縁部よりやや下がった位置に貼り付けられ、口唇部刻目を有しない。刻目は41がD字、42がO字である。 第11図 土坑他の出土遺物実測図  
る。船橋式とできよう。43は口唇部に軽い刻目があり、滋賀里IV式としておこう。

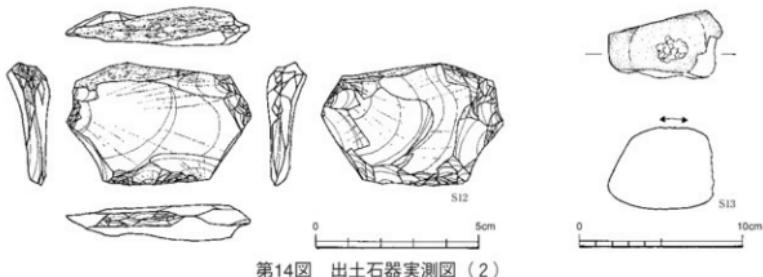
44~46は口縁部に刻目のある口縁部片である。篠原式中段階～新段階のものであろう。44は胎土精良で丁寧な調整であり、浅鉢かもしれない。



第12図 包含層出土遺物実測図



第13図 出土石器実測図（1）



第14図 出土石器実測図（2）

47・48は頸胸部界に文様のある土器である。47は押し引き状のD字連続刺突文を横位に施し、さらに同様の文様が上方に伸びる。第7図4に似る。48はC字連続刺突文を横位に施している。これらは中部瀬戸内の影響を受けたと考えられる文様である。篠原式新段階であろう。

49は口頸部が外反する深鉢で、口唇部を面取りし、O字刻目（押圧）を施す。50は深鉢胴部である。外面は削りののちナデ、内面は二枚貝条痕を施す。篠原式古～中段階と考えられる。

51・52は小型の土器である。51は粘土接合痕が明瞭である。53は丸底の底部である。丁寧な仕上げであり、浅鉢であろう。

石器（第13・14図） サスカイト製の製品、剥片などが多数出土した。製品は石鎌・石錐・クサビ形石器・削器があり、他に石核2点、使用痕のある剥片がある。使用痕のある剥片は12点と最も多數である。ほかに転石の砂岩礫を利用した凹石と、圓化しえないが石棒細片1点（図版14下段、長さ3.3cm、幅1.5cm）があり、磨製石器は皆無である。点数は、第5節によられたい。S1・2・5・10・11は落込み01出土、それ以外は包含層から出土したものである。

S1～3は石鎌である。1は凹基式、上半は折損する。2は円基式、3は平基式である。3は厚みがあり、重量がある。

S4は石錐。錐部が長く伸びるタイプであるが、先端部は欠損する。残存する錐部に使用痕は認められない。つまみ部の上面と両側面に自然面を残す。

S5～7はクサビ形石器。相対する上下の側縁に細かな多くの階段状剥離、エッジの潰れが確認できる。いずれも自然面を残し、厚みと重量がある。

S8～12は削器。8は平面長方形を呈し、三側縁に刃部を作り出す。短辺の刃部は片面調整である。9は円基式石鎌の基部の可能性もあるが、2次調査のS37（第22図41）と同様の小型楕円形の削器と考えられる。片側は折損する。10～12は自然面を残す、不定型な剥片を素材にする。10は二側縁、11と12は一側縁に刃部を作り出す。

S13は砂岩製の凹石。主観的であるが1～3次調査の中では、細粒の砂岩である。礫の中央部のみ残存し、上面に1.2～1.4cmの敲打痕がある。長さ4.1cm以上、幅5.5cm、高さ5.0cm、重さ0.20kg。砂岩礫は隣接する梅川、石川の河原で採取が可能である。

### 第3節 2次調査の遺構と遺物

調査地は「太子南」交差点より南の道路拡幅範囲全域である。調査区は全長71mであるが、幅は北端で6m、南端は2mと南に行くほどにすばまり、調査面積は270m<sup>2</sup>である。なお調査地の中央部にある里道より北を北区、南を南区として記載する。

1次調査と同様に、縄文時代晩期中頃から後半の遺構・遺物が確認できた。遺構は全面に広がるのではなく、北区北半部と南区南半部に縄文晩期の遺構の集中が確認でき、その間は南南東から北北西に流れる自然の流路である。埋土は砂・粗砂・小砾であり、数点の弥生土器片と古墳時代土師器片が出土している。

北区（第15図上段） 1次調査の遺構面と同一のものであり、北端部約15mの範囲に多数の遺構が密集する。この範囲の包含層は厚く、本遺跡の中でも遺物量が最も多い。遺構はピットと土坑が主体であり、土器棺1基のほか、有溝砥石、磨石の出土した土坑もある。隣接する1次調査では、住居跡の可能性があるピットの集中が検出されたので、住居を構成するピットがないかを調べたが、確認することは出来なかった。

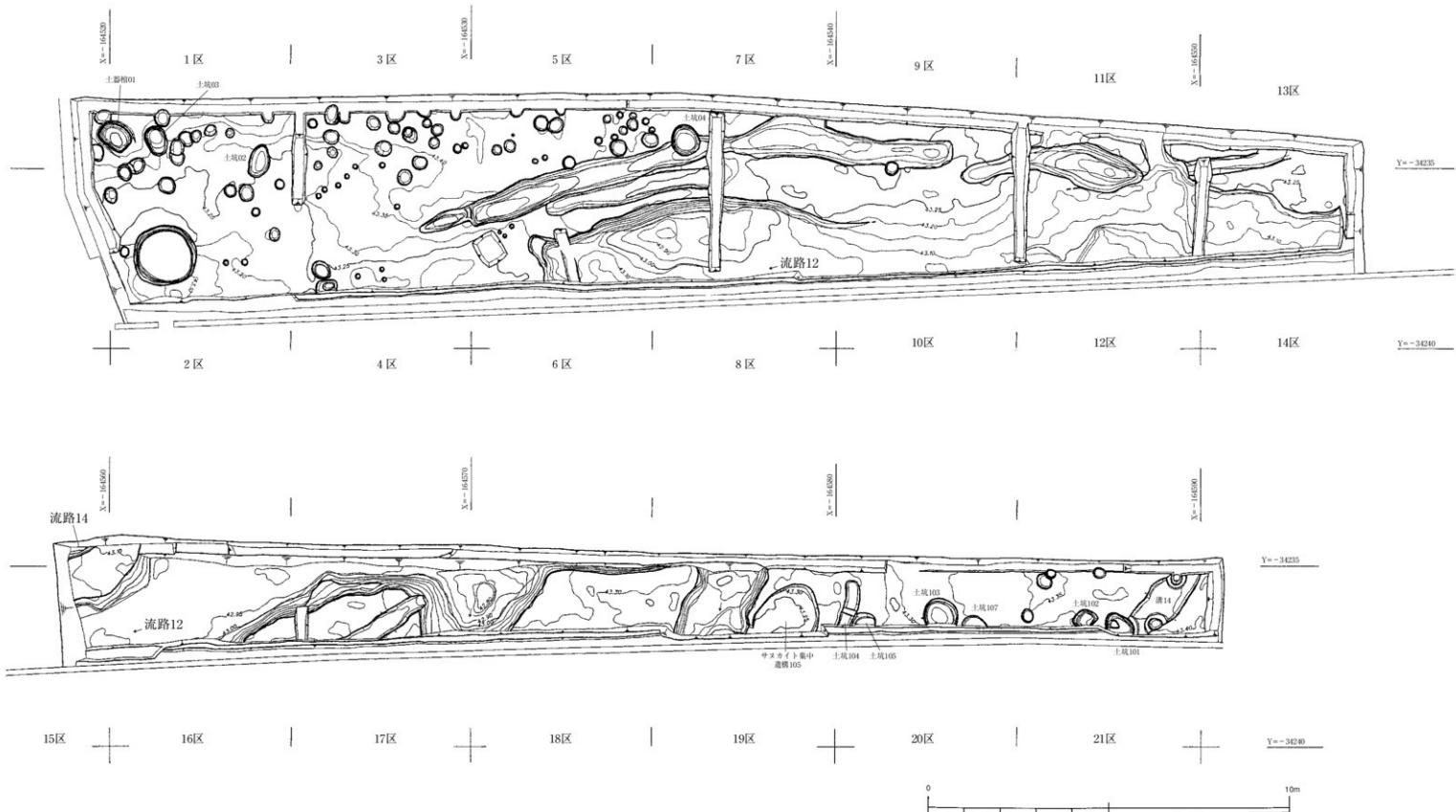
土器棺01（第16図） 楕円形の土坑（墓坑）に、砲弾形の深鉢を斜方向に据え置いたものである。墓坑の規模は、長軸88cm、短軸68cm、深26cmである。棺内埋土の20cmの部分に土器棺の口縁部が落ち込んだ状況で出土した。棺蓋は出土していないが、棺内への土の流れ込み状況から、木蓋等の有機質の蓋が想定できる。すなわち当初、内部は空洞であったであろうが、木蓋等が腐り、深さ20cmまで土が流れ込んだ段階で土器棺の口縁部が落ち込んだと考えられる。土器棺の外面には煤が付着するので、日常的に使用した土器を転用したと考えられる。なお、棺内の埋土は洗浄したが、人骨や副葬品は未確認である。

土器棺の土器（第16図54） 全体が砲弾形を呈する刻目突帯文土器深鉢であるが、頸胴部界で若干の屈曲があり、頸部は直立あるいはごく弱く外反している。底部は丸みを帯びた尖り底である。最大径は口縁部にあり、口縁部径36.0cm、器高43.4cmを測る。

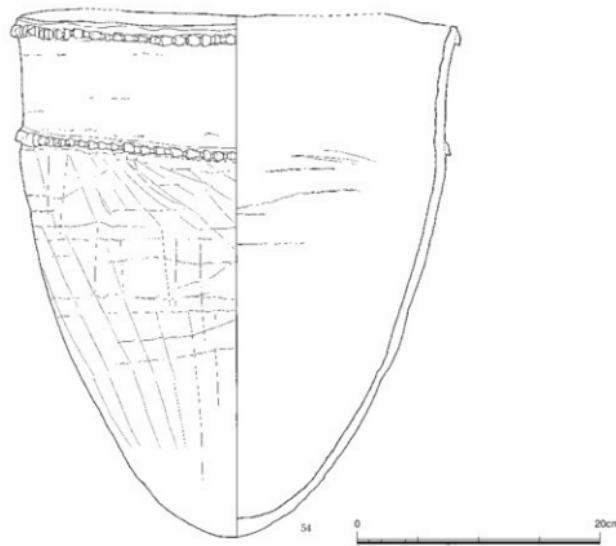
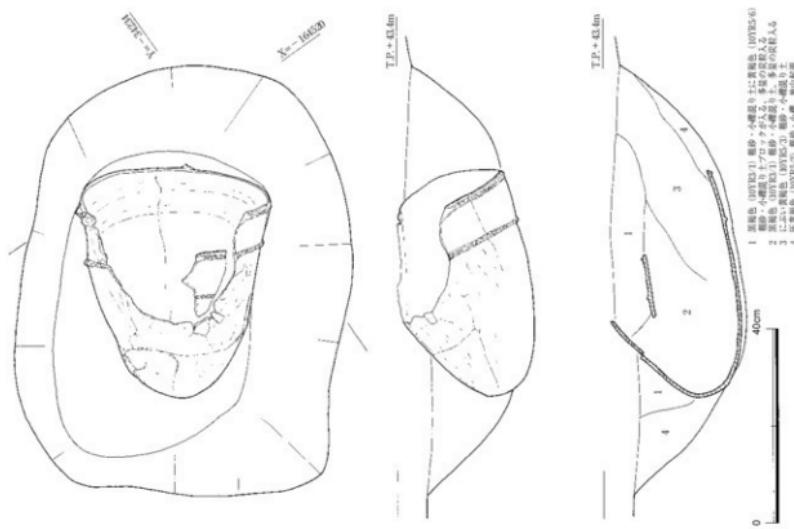
口縁部および頸胴部界に各1条の刻目突帯をめぐらす。口縁部突帯は口縁端部から若干下がった位置に貼り付けられており、突出度は大きく断面形は下向きの三角形である。胴部突帯は頸胴部界に貼り付けられており、こちらも下向きの断面三角形の突帯である。口縁部突帯・胴部突帯とともにD字刻目を密に施している。突帯の上下はナデで仕上げるが、上側がより丁寧であるのに対し、下側は雑であり、突帯の貼り付け痕が明瞭に観察できる。

外面調整は頸部がナデ、胴部が下から上へのケズリである。内面調整はナデであるが、頸部内面は横方向のナデによる凹凸が認められるのに対し、胴部内面は平滑である。また内底面付近には炭化物が付着している。人為的な打ち欠きや穿孔は認められない。船橋式とできよう。

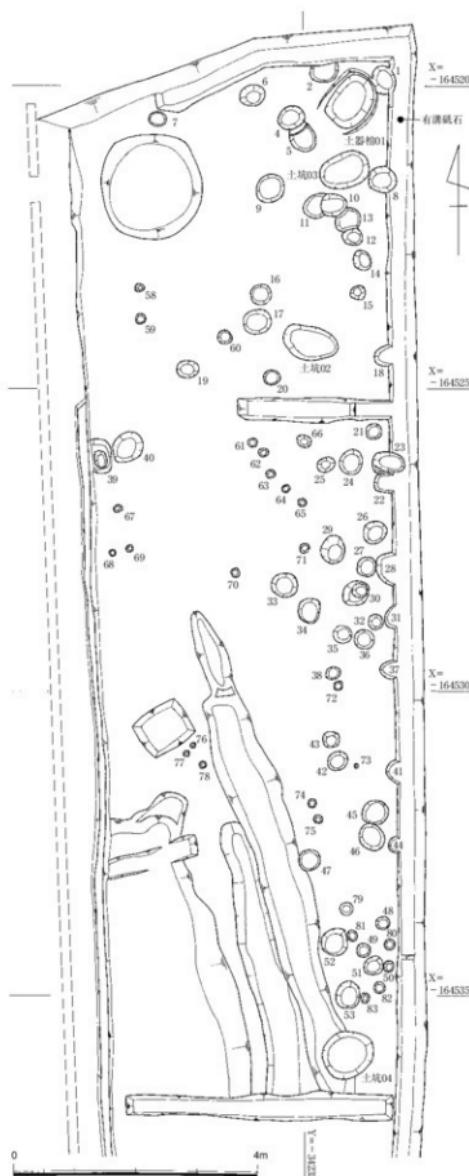
土坑02（第18図） 包含層を掘削し、最終的に地山面で確認した、平面形がいびつな楕円形の土坑である。検出した面での規模は長軸92cm、短軸57cm、深さ17cmである。検出面より約10cm



第15図 2次調査遺構平面図



第16図 土器棺01平面・断面図、土器棺実測図



第17図 北区の遺構平面図

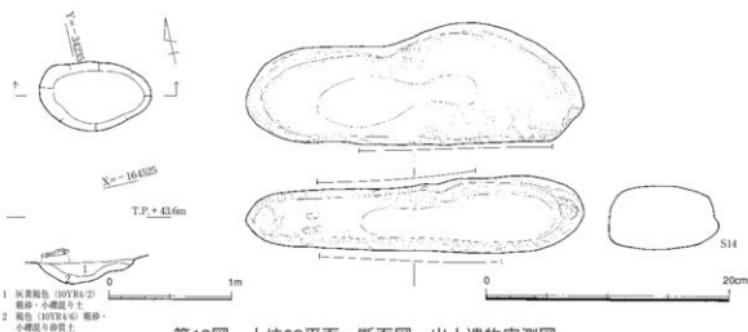
上で磨石が出土しているが、それはこの部分では包含層が厚く、本来の掘り込み面が確認出来なかつた可能性が高いと考えている。磨石は使用面を横にし、横倒しの状況で出土した。他にサスカイト剥片2点、土器片1点が出土した。

**石器（第18図）** 砂岩製の磨石。扁平な楕円形を呈するが、その側面の直線的な部分に磨り痕がある。ただし擦痕は確認できないので、使用的の方向は明らかでない。両横面にも若干の磨り痕が認められる。後者を手持ちの痕跡とすれば、石皿の上に設置し、縱方向あるいは横方向に押し引きして使用したと考えられる。長さ27.7cm、高さ9.8cm、重さ2.28kg。

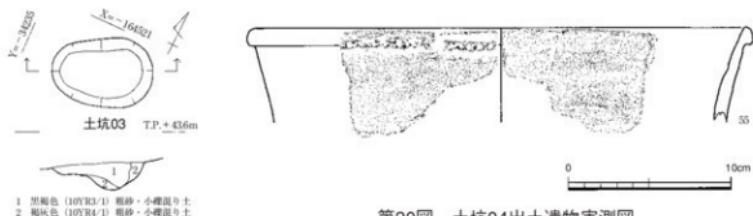
**土坑03（第19図）** 土器棺01の南で確認した、平面形態が卵形の土坑である。土坑内の西半は浅くテラス状になり、東半はさらに深く掘り込まれる。規模は長軸83cm、短軸58cm、深さ22cmである。土器棺幕に隣接した同規模の土坑なので、土器棺を想定して掘削した性格を明らかにすることは出来なかった。

**土坑04（第19図）** 遺構密集域南端で確認した、平面卵形の土坑である。断面形態は東に緩やかに、西に急角度で立ち上がる。規模は長軸85cm、短軸76cm、深さ28cmである。

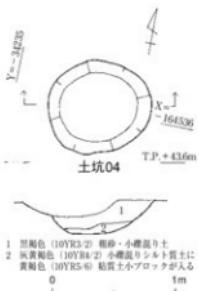
**土器（第20図）** 刻目突帯文土器深鉢で、口縁部から頸部上半が遺存している。口縁部はごく弱く外反しな



第18図 土坑02平面・断面図、出土遺物実測図



第20図 土坑04出土遺物実測図

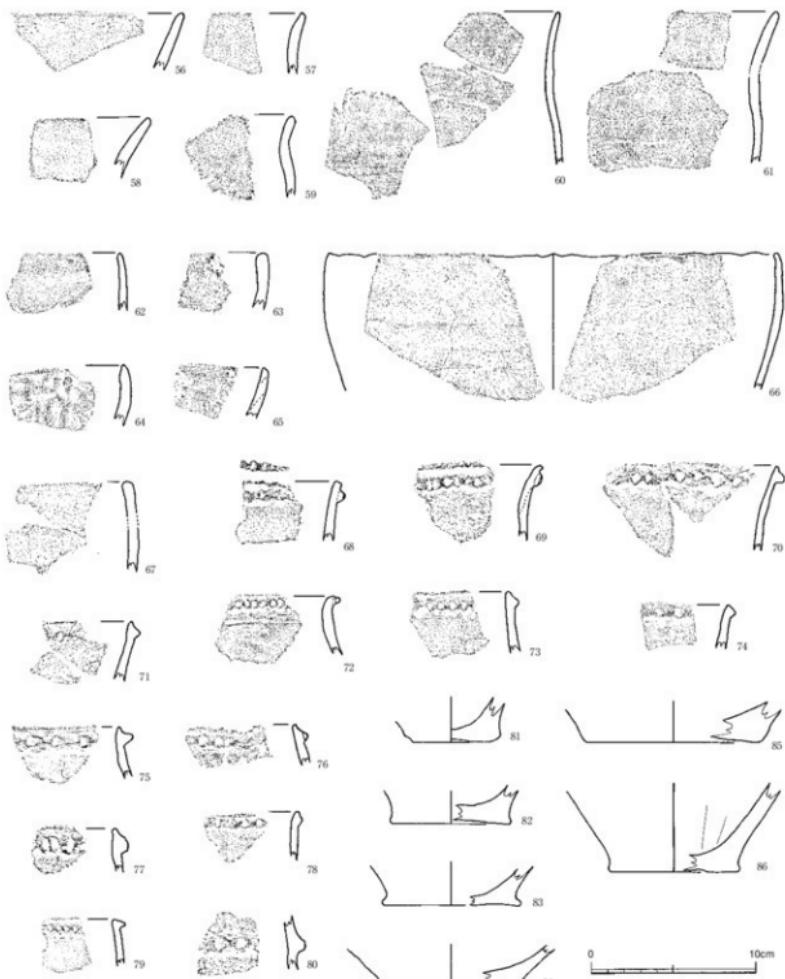


第19図 土坑03・04  
平面・断面図

ごく丁寧である。61は口縁部片と頸胴部片の接合が不確実である。口唇部に小さな突起がある可能性がある。内面および口頭部外面はナデ、胴部外面はケズリを施す。

62～66は突帶を有さない深鉢で、口頭部が内湾気味のものである。62は薄手で内外面の調整が丁寧で、浅鉢の可能性がある。63～65は器壁がやや厚く、外面にケズリが認められることから深鉢とした。66は砲弾形を呈する深鉢で、口唇部には粗雑な刻目を疎らに施す。胴部外面は粘土接合痕が明瞭に観察される。内面は丁寧なナデである。

56・67は浅鉢とみられるものである。56は図示した以上に大きく外に開く可能性があり、浅鉢とした。内面はミガキもしくは丁寧なナデ、外面は丁寧なナデのようだ。67は椀形の浅鉢であろ



第21図 北区包含層出土遺物実測図

う。口唇部まで丁寧に作っている。

68~80は刻目突帯文土器である。68は口唇部を面取りし刻目を施す。口頸部は軽く外反する。口縁部突帯の刻目はやや軽い。滋賀里IV式とできよう。69は口縁部から一部頸胴部界まで遺存する。頸胴部界には突帯をめぐらさない。口唇部に明確な面取りは認められないが、軽い刻目を有する可能性がある。滋賀里IV式~船橋式と考えられる。71・73・75~77は口縁部突帯が口縁端部から若干下がった位置に貼り付けており、船橋式と考えられる。口唇部の遺存状況の悪いものも

あり、口唇部に刻目を有するものもあるかもしれない。73の頸部外面にはごく細い沈線で描かれた鋭い鋸歯状の文様が認められる。70・72・74・78・79は口縁端部外面に突帯が貼り付けられており、長原式と考えられる。80は胴部突帯である。船橋式～長原式としてよからう。

81～86は底部である。83は底部外縁が外側に突出し、全体がミガキもしくは丁寧なナデで仕上げている。浅鉢底部としてよからう。85は晩期土器の底部としてはかなり大きいものである。

石器（第22・23図） 石器、剥片は3次の調査で最も多数が出土した。石鎌、石錐、クサビ形石器、削器、石核、二次加工ある剥片、使用痕ある剥片がある。他に砂岩礫の有溝砥石、磨石、敲石がある。S29・53が土器棺01から出土したが、副葬品とは断定できず、流れ込んだ包含層に属すると考えておきたい。有溝砥石 S54は、東側溝内の北端から1.3～1.5mの間で出土しており、側溝から東にのびる土坑（第5・17図）の遺物である。他は包含層からの出土である。また結晶片岩製の石鋸（図版22中・下段）が流路12掘削後の精査時に出土したが時期の確定は難しい。

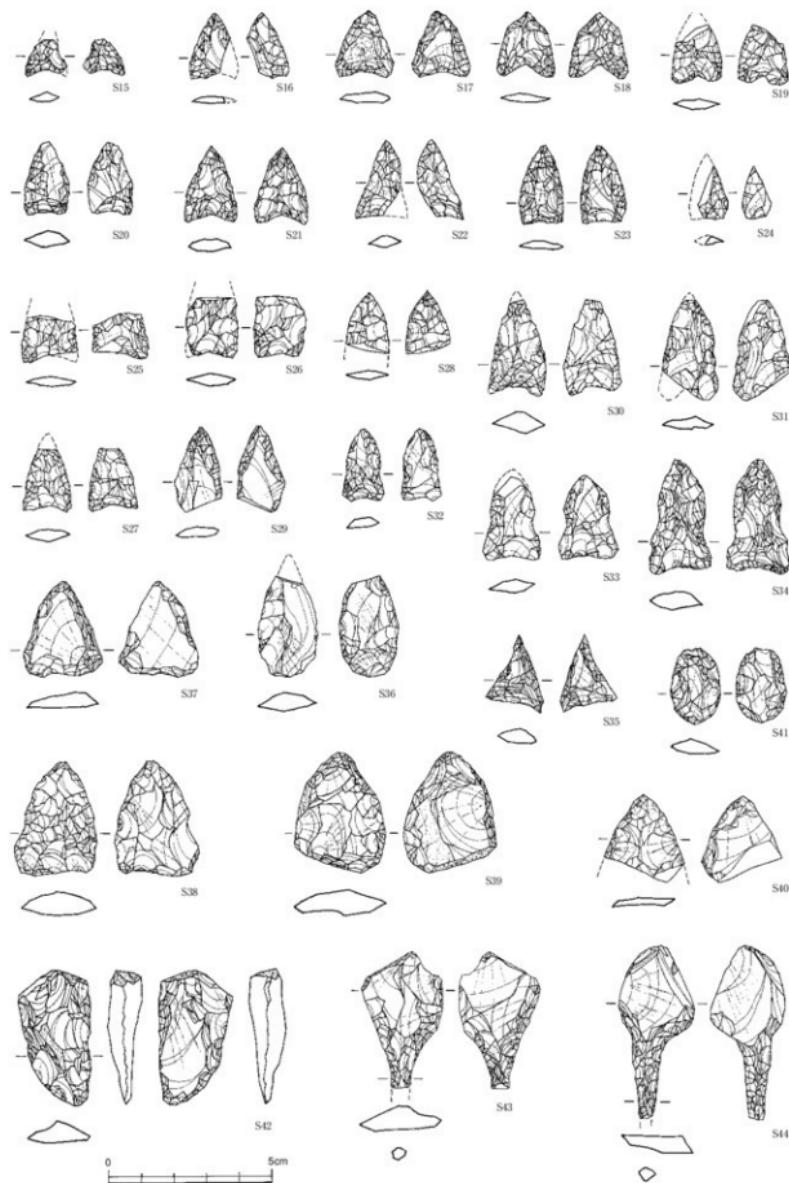
S15～40は石鎌。15～27、30～35は凹基式で、小型品が主体的である。1～3次調査の出土資料で、凹基式石鎌は小型、軽量が一般的で、やや大きな30～35cmは2次調査の3点（30・31・34）のみである。35は異形。小型品にしては厚みがあり、左右非対称である。32～34は側縁を内湾させて五角形を呈するタイプである。なお15先端は欠損で基部右端は調査時破損。16基部右端、19先端、22基部右端、26・27先端、28・29基部、30先端、40基部は欠損。31先端は調査時破損で基部右端は欠損、25先端は欠損で基部右端は調査時破損、基部右端のみの24は調査時破損、33先端は調査時破損である。

S36は円基式、S37～39は平基式である。36の先端は欠損で基部右端は調査時の破損である。37～39は幅広で短い鎌身タイプで、40も同タイプと考えられる。38・39は厚く重量感があり、39基部には自然面を残す。40基部左は欠損で基部右端は調査時の破損である。

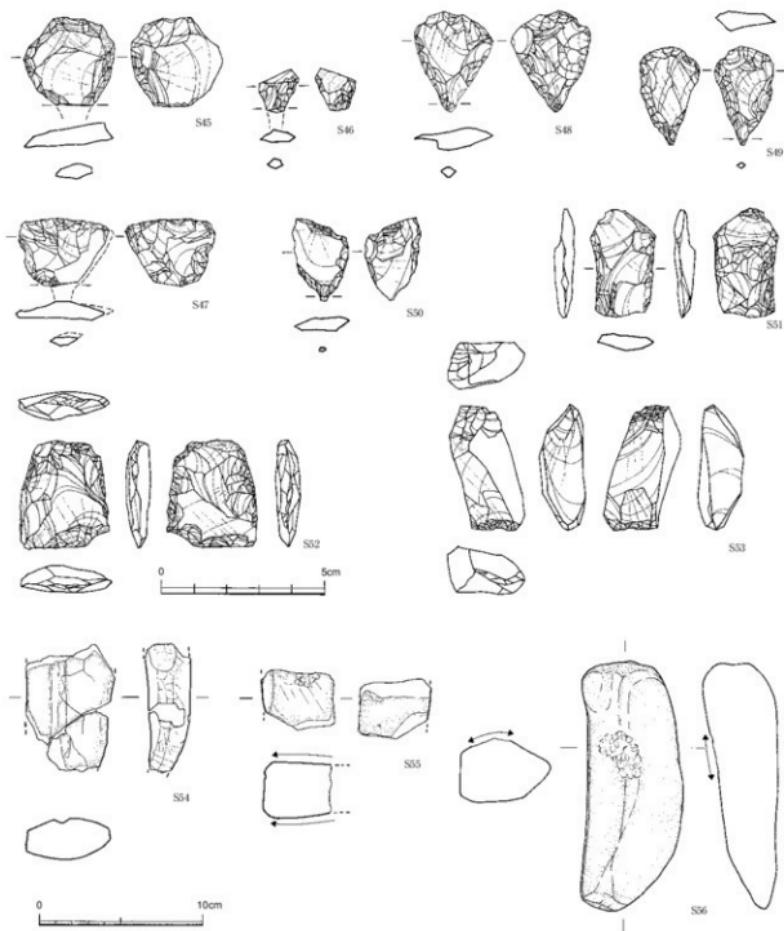
S41・42は削器と考えられる。41は小型楕円形を呈し、周縁に刃部を作りだす。1次調査に類似例（第13図9）がある。42は上端と片面に自然面を残すもので、縦長剥片の二側縁に薄い刃部を形成する。上左端は調査時の破損である。

S43～50は石錐。本遺跡出土資料には二つの形態がある。43～47はつまみ部と錐部の区別が明瞭で、錐部が長く伸びるタイプ。43～45は錐部が欠損する。43・45のつまみ部側面は自然面を残し、44は折れ面である違いはあるが、非常に類似した作り方である。43・44の錐部には若干の摩耗が認められる。46の錐部は調査時の破損であり、つまみ部は欠損と考えられる。47の錐部は欠損、つまみ部右側は調査時の破損である。48～50はつまみ部からわずかに突出する錐部を作り出すタイプ。いずれも完形品で、錐部先端に若干の摩耗が認められる。50のつまみ部側面に自然面を残すが、3次調査の81・82と極めて類似した形態・作り方である。

S51～53はクサビ形石器。相対する上下の側縁に細かな多くの階段状剥離、エッジ部分の潰れが確認できる。51の一側縁には自然面を残す。1次調査9と類似しており削器の可能性もある。52は一側縁に自然面を残し、四側縁ともに使用痕が確認できる。53の両側縁は折れ面である。



第22図 北区出土石器実測図（1）



第23図 北区出土石器実測図（2）

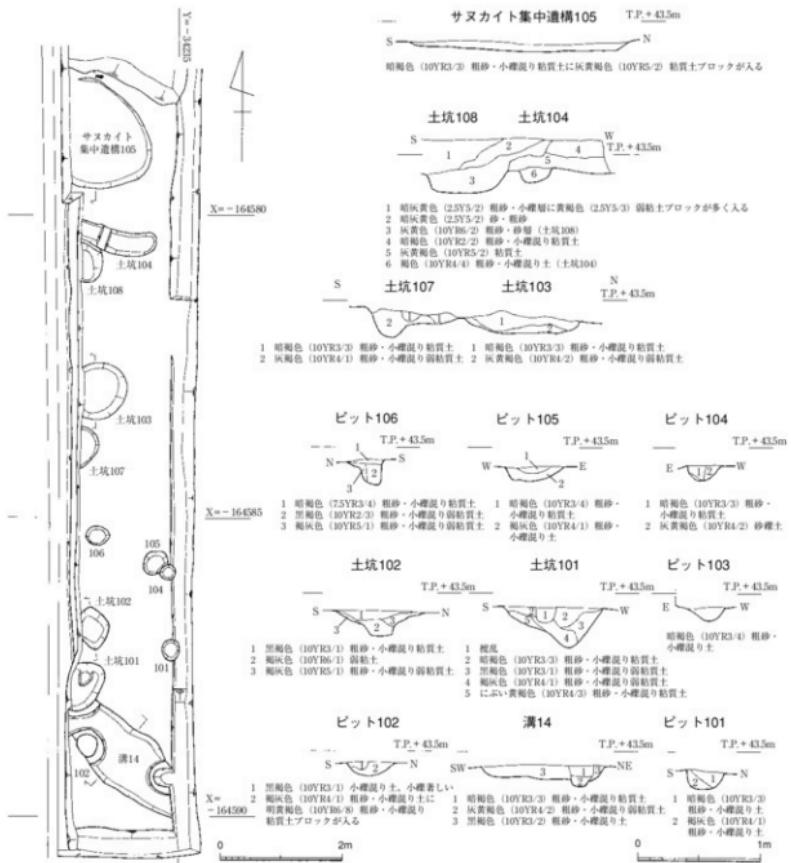
S54は中粒砂岩製の有溝砥石。被熱しており、全体の半分程度と、先端部がわずかに欠損する。底面と両側面は粗い研磨で整形したと考えられる。横断面で表面はレンズ状に盛り上がり、その中央に溝が形成される。溝は幅1cm程度、深さ2mm程度である。長さ7.8cm、幅5.5cm、厚さ2.6cm、重さ0.12kg。

S55は砂岩製の磨石。両面に磨り痕があり、平面図左の上端には弱い敲打痕も確認できる。長さ3.5cm以上、幅4.4cm以上、厚さ3.5cm、重さ0.10kg。

S56は中粒砂岩製の敲石。湾曲する長楕円形礫の表面稜線上に敲打痕がある。長さ15.5cm、幅

6.0cm、厚さ3.7cm、重さ0.54kg。

南区（第15図下段） 南端部の約12mの範囲で、北区と同様の堅く締まった粗砂・小礫の微高地が確認でき、その上面でピット・土坑・溝が検出できた。他にサスカイトが径2m程度の範囲で集中して出土した。製品は含まれず、多数の剥片や石核の他、突帯文土器片も含まれるので、晚期後半の石器製作跡と考えられる。ところで南区の遺構群は、1次・2次北区・3次調査の集落とは、異なる微高地に営まれた居住域である。そしてこの居住域の営まれた微高地も非常に幅が狭いと考えられる。東壁断面で粗砂・小礫の地山が南方に向かい急激に落ちており、さらに南端の東西側溝では西方ほどに深くなり、微高地面が確認していなかったからであり、南西方向に急激に落ちているのである。



第24図 南区の遺構平面・断面図

南端の各種遺構（第24図） ピット6基・土坑6基・溝1条を検出した。多くの遺構は第4層上面で確認したが、ピット108は上層から掘り込まれている。いずれの遺構の出土遺物も縄文土器細片とサスカイト片のみであり、また遺構の性格は不明である。

サスカイト集中遺構105（第24図） 包含層中にサスカイトが集中して出土した部分であり、遺構検出を行ったが、土坑などの輪郭はとらえられなかった。原位置を計測しての取り上げは行っていないが、ブロックとして認定し得ると考えられるので、遺構として報告する。なお集中箇所の土は、土のう袋に回収し、洗浄して遺物の取り上げを行った。

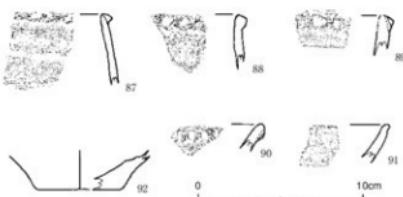
第24図に示した輪郭は、遺構検出段階でのサスカイトの集中する部分である。径1.8~2.0m程度の範囲に集中しており、西半部は調査区外にのびる。土質は灰黄褐色粘質土ブロックの混じる暗褐色粗砂・小礫混り粘質土である。出土遺物は、使用痕のある剥片が数点確認できる以外に製品は含まれず、接合資料3点を含めて多数の剥片や石核であり、その内容から石器製作跡と考えられる。その時期は共伴する数点の突帯文土器片から、長原式である。

土器（第25図） 87~90は划目突帯文土器である。87・88・90はいずれも口縁端部外面に突帯を貼り付け、口頸部は直立ないし軽く内湾している。長原式としてよからう。89は口縁部として図示しているが、上端は粘土接合面で剥離しており、口唇部は遺存していない。あるいは胴部突帯部とも考えられ、その場合は天地逆になると思われる。91は口縁端部で突帯を有さない土器である。浅鉢かもしれない。92は底部である。

石器（第26~28図） S57~60、62~65は石核である。S57は表・裏面と左側面に大きな剥離痕、上面に小さな剥離痕が認められる以外は、自然面を残す。正面は自然面を除去するような剥離痕、裏面は異物を中心とした剥離痕である。剥片の生産はほとんど行わないままに廃棄されたようである。S58は周縁部と裏面は自然面である。正面には周縁の自然面を打面にした中央に向けての剥離痕が残る。S59は裏面に自然面を残し、正面には周辺から中央に向けての剥離痕が残る。S60は上面・左側面・裏面に自然面を残す。正面に上面の平坦な自然面を打面にした縦長剥離痕がある。

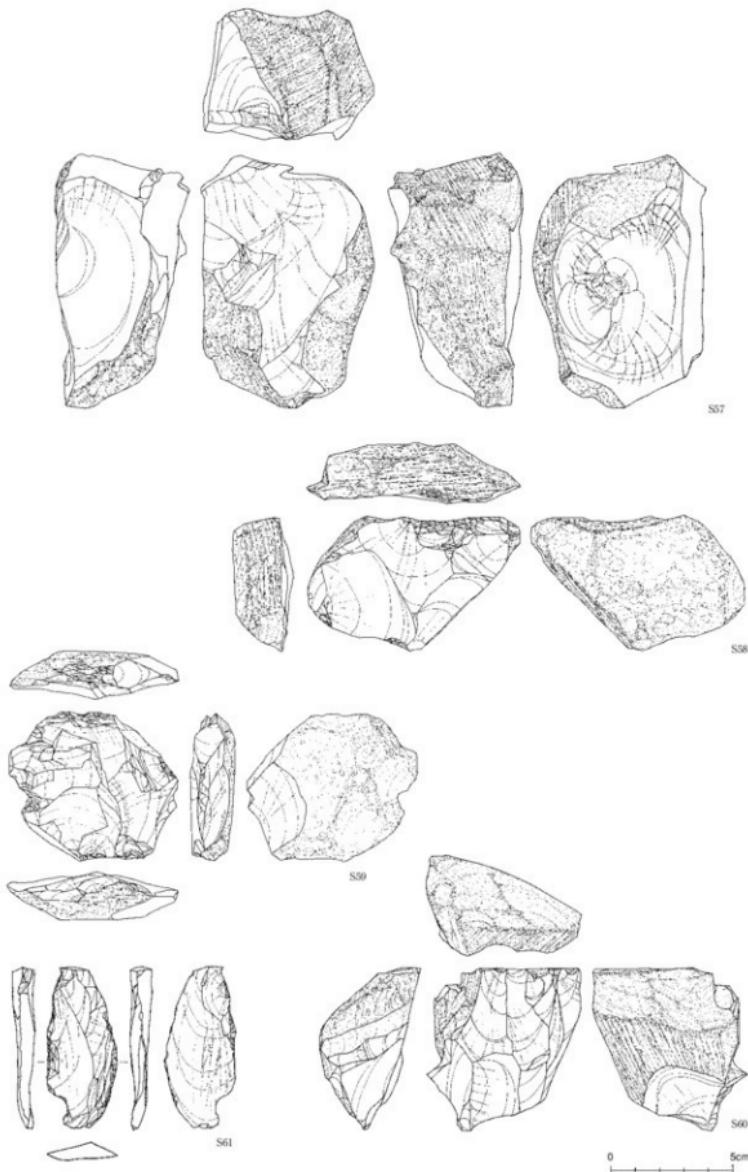
S61は使用痕のある剥片である。自然面を打面にした縦長剥片の周辺部に微細な剥離痕があり、また末端左部に抉りが形成される。背面に縦長の剥離痕二面がある。

S62は上・左側縁に自然面を残す。下面は折れ面である。正面には周辺から中央に向けて剥離痕が残る。裏面は先行する剥離面と上面自然面を打面にした剥離痕がある。S63の裏面は自然面を残し、周辺からの剥離痕がある。正面は剥離痕に覆われるが、上方からの剥離痕が多い。S64は右側面部が折れ面、それ以外の縁辺部には自然面を残す。正面には先行する剥離面の後、周辺からの剥離痕がある。裏面には自然面を除去する剥離痕跡がある。S65の正面は古い剥離痕以外、

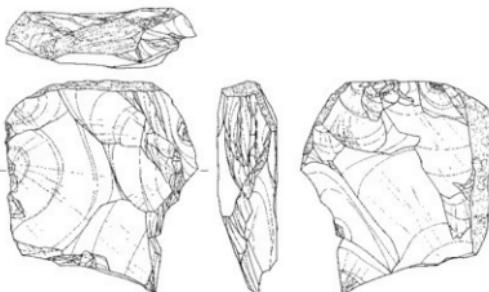


第25図 サスカイト集中遺構105出土遺物実測図

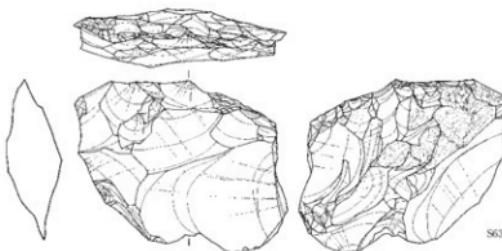
（図説）



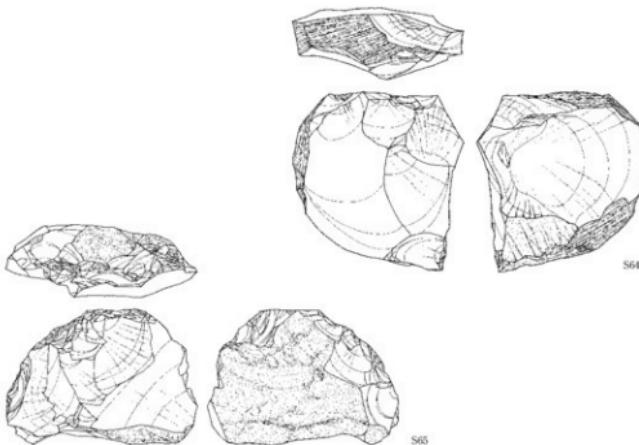
第26図 サヌカイト集中遺構105出土石器実測図（1）



S62



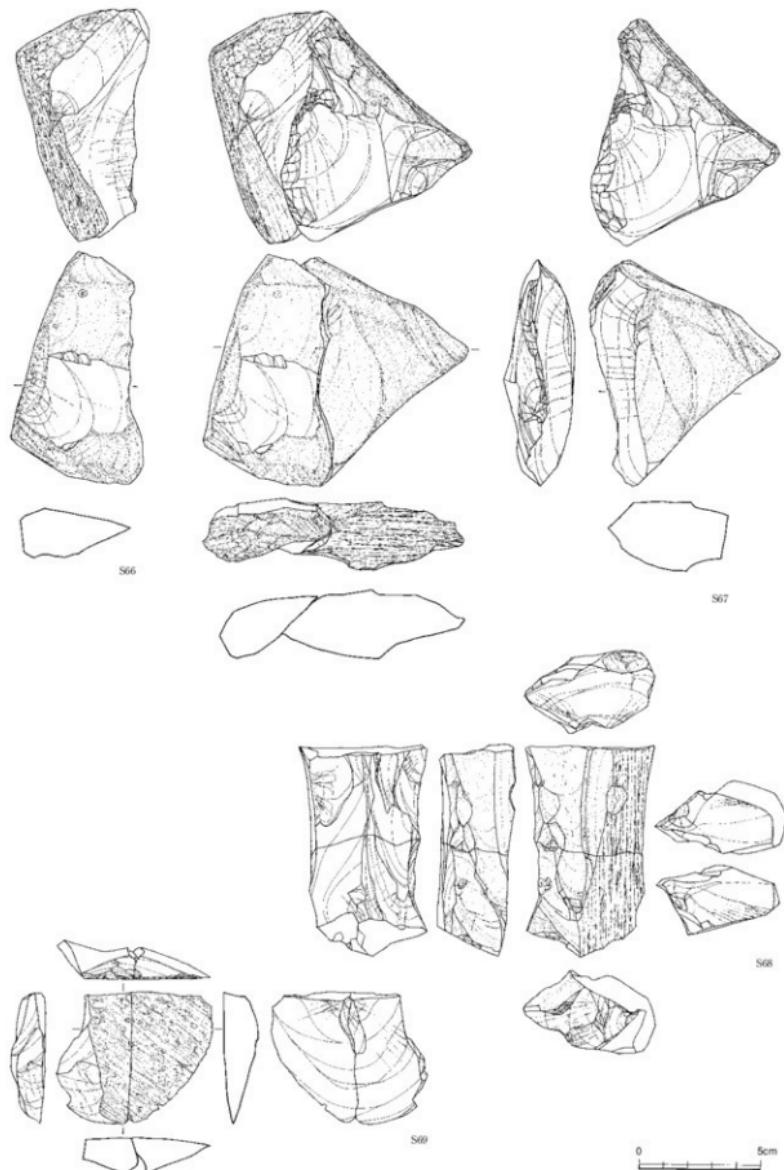
S63



S65

0 5cm

第27図 サヌカイト集中遺構105出土石器実測図（2）



第28図 サヌカイト集中遺構105出土石器実測図（3）

周辺から中央に向けての剥離痕が残る。裏面は自然面を残し、上部には周辺からの剥離痕がある。

S66・67、68は石核どうしの接合資料である。67裏面には66から剥離した際の打撃裂が認められる。接合状態では周縁部と裏面、表面の一部が自然面なので、原礫は台形を呈する扁平な板状である。66の正面には縦長剥片剥離痕、裏面には自然面を除去するような剥離痕が各一面ある。67の正面には66から分割した際の主要剥離面を打面にした剥離痕が認められる。S68は石核どうしの接合資料であり、接合面と上面は折れ面である。裏面は自然面を残し、表面だけに右側縁側からの剥離痕が集中する。

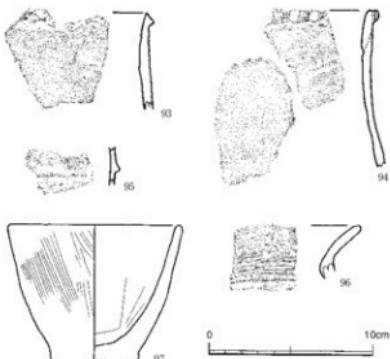
S69は剥片どうしの折れ面での接合資料である。背面には先行する剥離痕と自然面がある。

流路12・14（第15図） 流路12は北区と南区の間で確認した、北北西方向に流れる自然流路である。南区中ほどで北西方向に枝分かれする部分を確認した、埋土は砂・粗砂・小礫であり、遺物は数点が出土したのみある。最上層から弥生時代終末期の甕が出土した他、図示してないが古墳時代後期の土師器高環脚柱部1点が出土している。また流路の埋土を掘削したところ、南区北東端で北西方向に流れる流路14が確認でき、弥生土器の鉢1点が出土している。

南区包含層、流路の土器（第29図） 93～95は刻目突帯文土器である。93・94は口縁端部外面に突帯を貼り付けるものである。口頸部はごく軽く外反しながらやや内傾する。95は胴部突帯部と思われるが、通常の突帯文土器と比べると器壁がごく薄い。胴部突帯も細く繊細であるが、軽い刻目が認められる。胴部突帯より上に斜行する5条の沈線文が認められる。

96は流路12から出土した甕の口縁部片である。外面屈曲部に叩き痕が残り、叩き出し技法によって口縁部を成形する。ヨコナデ仕上げ。時期は弥生時代後期終末～庄内式である。

97は弥生時代前期と考えられる鉢である。体部外面ハケメ。内面のハケメは、外面に比べ工具幅が広い。底部と体部の接合は外傾接合である。

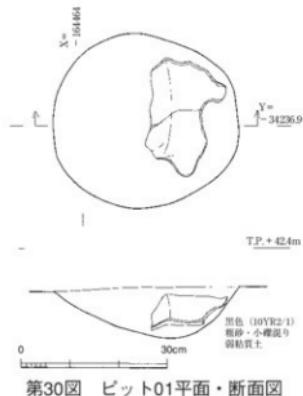


第29図 南区流路他の出土遺物実測図

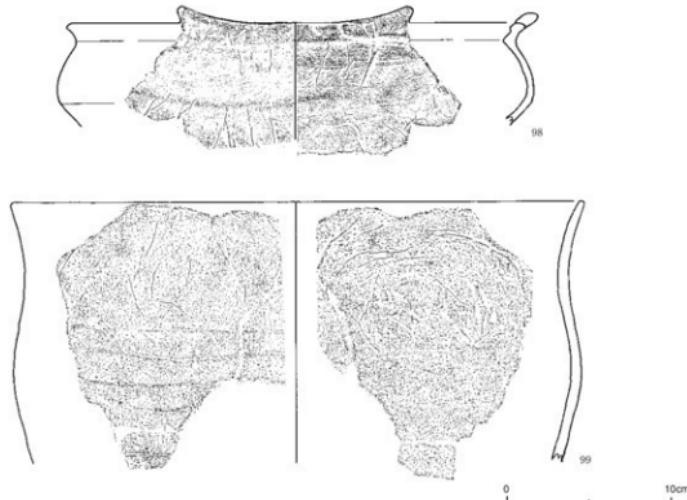
#### 第4節 3次調査の遺構と遺物

調査地は「太子南」交差点より北の道路拡幅範囲の内、南半の約42mである。調査区の幅は北端は4.3m、南端は5.9mであり、調査面積は240m<sup>2</sup>である。調査地は、1・2次調査とは異なり、西の地盤が高く、東に低くなる。遺構の検出された微高地は北北西にのびており、調査地は、1次調査と2次調査北区と同じ微高地の東側斜面であると考えられる。調査地の南部約25mの範囲でピットと土坑が疎らな状況で確認でき、それ以北での遺構は未確認である。また遺構が未確認な範囲では、遺物量も極端に少ない。

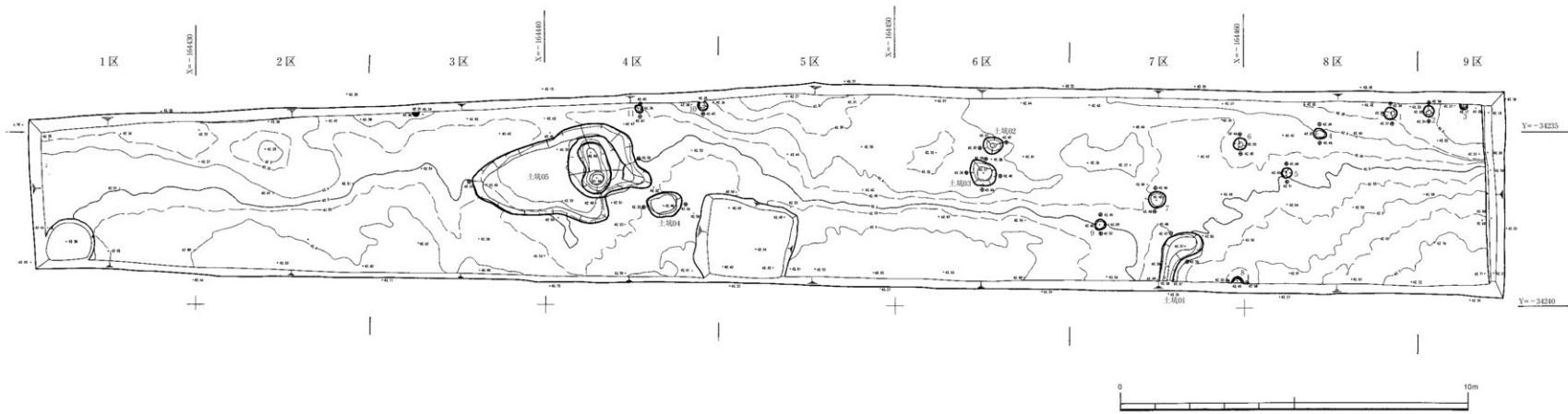
**ピット群（第32・33図）** 調査区の南12mの間で、微高地の裾で8基のピット（ピット01～07・09）が、並ぶような状況で検出された。最大のものはピット07で規模は直径50cmの円形、最小はピット03で直径24cmの円形である。その他のものは、直径30～40cm程度の円形、楕円形であり、いずれも浅い皿状の断面形を呈する。ピット03は、東半部が東壁にかかって検出した。本ピットの掘りこみ面は、地震によって地山より下位の砂が噴き上げた細かな砂層で形成された噴砂で、その後に縄文晩期後半の遺物包含層が形成されている。この噴砂は本調査区の



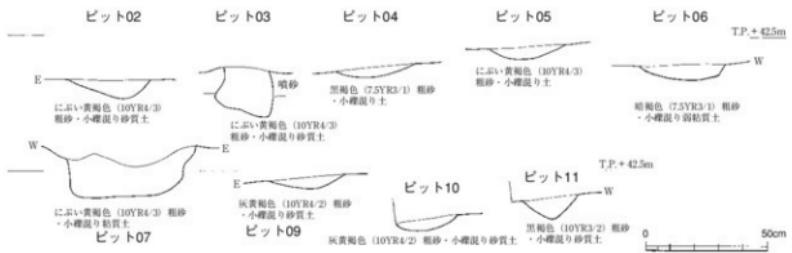
第30図 ピット01平面・断面図



第31図 ピット01出土遺物実測図



第32図 3次調査遺構平面図



第33図 調査区南部のピット断面図

東南隅で確認できたもので、繩文晚期後半以前に発生した地震痕跡である。

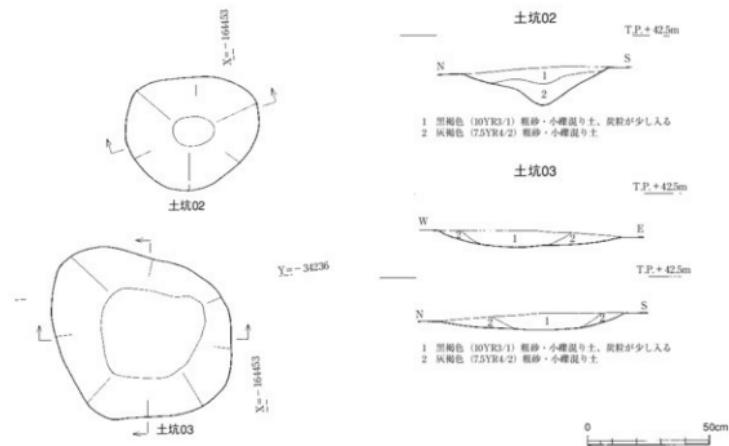
**ピット01（第30図）** 4層上面で確認したピットで、土器棺墓の底部が残存したものである可能性が強い。平面形態は楕円形で規模は長軸38cm、短軸36cm、断面形態は北に向かい緩やかに、南はやや急角度に立ち上がり、深さ11cmである。地山面に密着する状況で深鉢の口縁部が出土した。埋土は粗砂・小礫の混じる黒色弱粘質土であるが、包含層と類似した土質であったので、本来の遺構掘りこみ面を認識し得なかつとも考えられる。また鉢98は本ピットの直上で出土したものであり、本来は本ピットの遺物であった可能性を想定している。

**土器（第31図）** 98は肩部が大きく張り出す胴部から、口縁部がくの字に屈曲して短く立ち上がる浅鉢である。口縁端部は内側に玉縁状に肥厚させ、口唇部には翼状の突起を貼り付ける。翼状突起が両側にあるように見えるが、これは反転復元のためである。肩部には棱が認められる。内外面ともミガキ調整だが、肩部の棱線以下はケズリ痕がごくわずかに残る。篠原式新段階としてよからう。99は深鉢で、口頭部から胴部上半が遺存する。口唇部はごく一部が遺存するのみである。全体に緩やかに屈曲する器形で、口頭部は軽く外反する。内面および口頭部外面はナデ、胴部外面はケズリのようだが、器面が傷んでおりケズリは一部しか観察できない。一方、幅1.5cmほどの粘土接合痕は胴部外面では明瞭である。同じく篠原式新段階としてよからう。

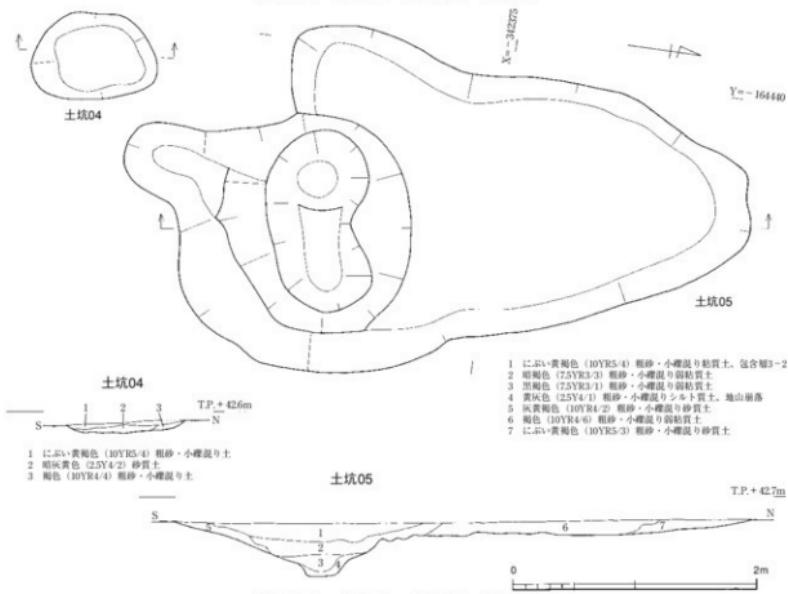
**その他の遺構（第34・35図）** 3～6区の間で4基の土坑を確認している。

土坑02と03は、6区の微高地裾部で隣接して確認した遺構である。土坑02は楕円形を呈し、平面規模は長軸56cm、短軸48cmで、断面はすり鉢状を呈し深さ15cmである。土坑03はいびつな矩形を呈し、平面規模は長軸75cm、短軸70cm程度で、断面は浅い皿状を呈し深さ7cmである。両者の埋土は共通する。いずれも2層に分けられ、上層は炭粒が入る黒褐色粗砂・小礫混り土で締まらないもの、下層は灰褐色粗砂・小礫混り土で第4層の土壤化した状況を示す。土坑04は、土坑05の南西に隣接する。楕円形を呈し、平面規模は長軸1.03m、短軸0.7mで、断面は浅い皿状を呈し深さ8cmである。いずれも性格は不明である。

土坑05は不整形で巨大な土坑である。平面の規模は長軸5.15m、短軸2.85m、断面は北半が浅い落込み状で深さ10cm、南半は急角度の土坑で深さ45cmである。南半埋土の最上層は包含層の第3-2層である。繩文土器細片とサヌカイト片が出土した。



第34図 土坑02・03平面・断面図



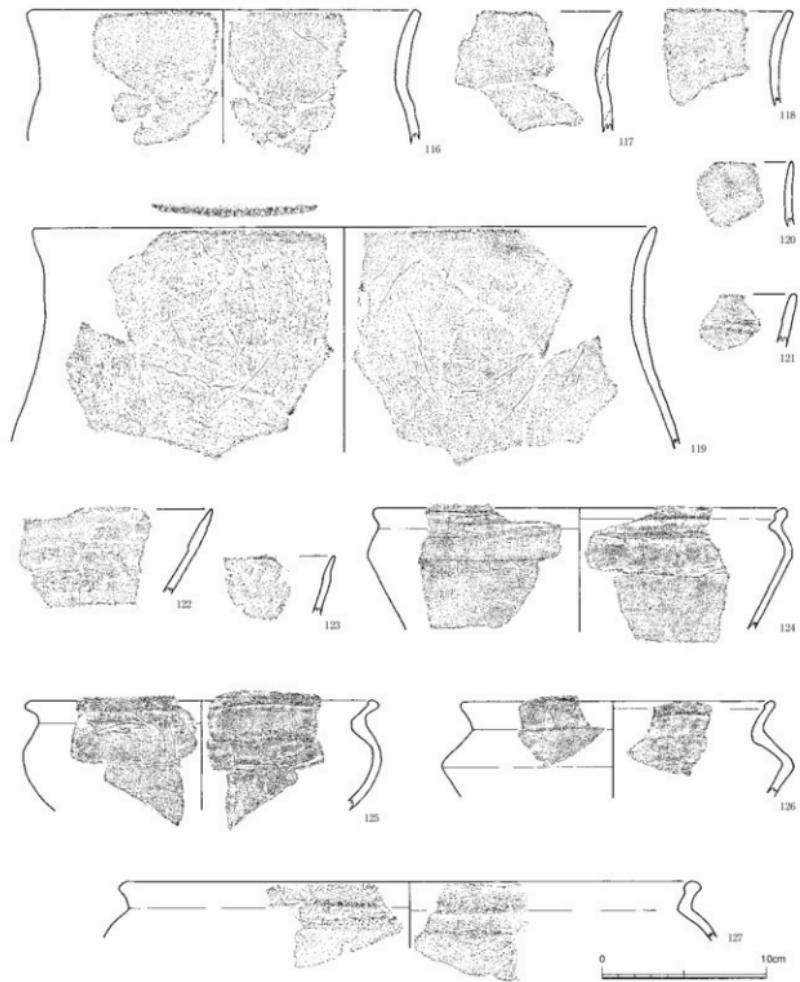
第35図 土坑04・05平面・断面図

なお土坑01とピット8は、いわゆる風倒木により生じた土坑であり、樹木が地形の低い方に向かって倒れた、あるいは人為的に倒された痕跡であろう。

包含層の土器（第36・37図） 100は深鉢口縁部かと思われるもの。小さな波状口縁で、太い沈線が口縁部と平行に走り、波頂下で上方に屈曲して円形文を描く。沈線文以下に細かな繩文が施



第36図 包含層出土遺物実測図（1）



第37図 包含層出土遺物実測図（2）

文される。縄文の燃りは判別できない。後期前葉中津式としておきたい。

101～107は深鉢とみられるものである。101は口頭部が軽く外反する深鉢で、口頭部内外面をナデ調整している。口唇部は軽く面取りされている。口唇部に疎らな軽い刻目があるかもしれない。篠原式新段階。102・103は口縁部片で、いずれも口縁部が軽く外反するものである。口唇部には刻目を施す。102の刻目は先割れ工具もしくは二枚貝によるものであろうか。104・105・107

は深鉢口縁部で刻目のないものである。106は砲弾形の深鉢である。口唇部に刻目は認められないが、口縁部が微妙に波打っており、小波頂もしくは小突起が付くのかも知れない。内外面とも器表が傷んでおり、外面では幅1.5cmほどの粘土接合痕が明瞭に観察される。

108~115は浅鉢とみられるものである。108は口頸部が外反するもので、深鉢ミニチュア土器かもしれない。109は浅鉢頸胴部である。口縁部を欠いているため確定的ではないが、内外面をミガキ調整しており、浅鉢としてよからう。110は球形の胴部から、口縁部がくの字に屈曲して短く立ち上がる浅鉢である。口縁端部は内側に玉縁状に肥厚させている。篠原式新段階としてよからう。111は屈曲する口縁部を有する小型の土器である。口縁部内面に2段の段状に作る。ここでは浅鉢に含めたが、繩文土器でない可能性もある。112~114は口縁部が頸部からくの字に屈曲して短く立ち上がる浅鉢である。口縁端部は内側に玉縁状に肥厚させる。112・113は肩部があまり張らないもので、内外面のミガキがよく残っている。114は肩部が強く張り明瞭な稜線があるので、器表が著しく傷んでいる。いずれも篠原式新段階であろう。115は底部から胴部下半が大きく開いており、浅鉢底部としてよいものである。

116~123は深鉢である。116~120は口頸部が軽く外反するもので、116・117は口頸部内外面をナデで、胴部外面をケズリで調整している。118~120も同様の調整と考えられるが、118・120は胴部が遺存しておらず、119は内外面器表が傷んでいて、部分的にケズリが観察されるのみである。119の口唇部にはごく軽い刻目が施文されている。120は薄手で丁寧な調整であり、浅鉢の可能性もある。これらは篠原式新段階としてよからう。

121~123は口縁部がほぼまっすぐ伸びるものである。121は外面をケズリ調整している。122は外面ケズリ、内面ナデのようである。123は口唇部がごく薄く作られ、浅鉢かもしれない。

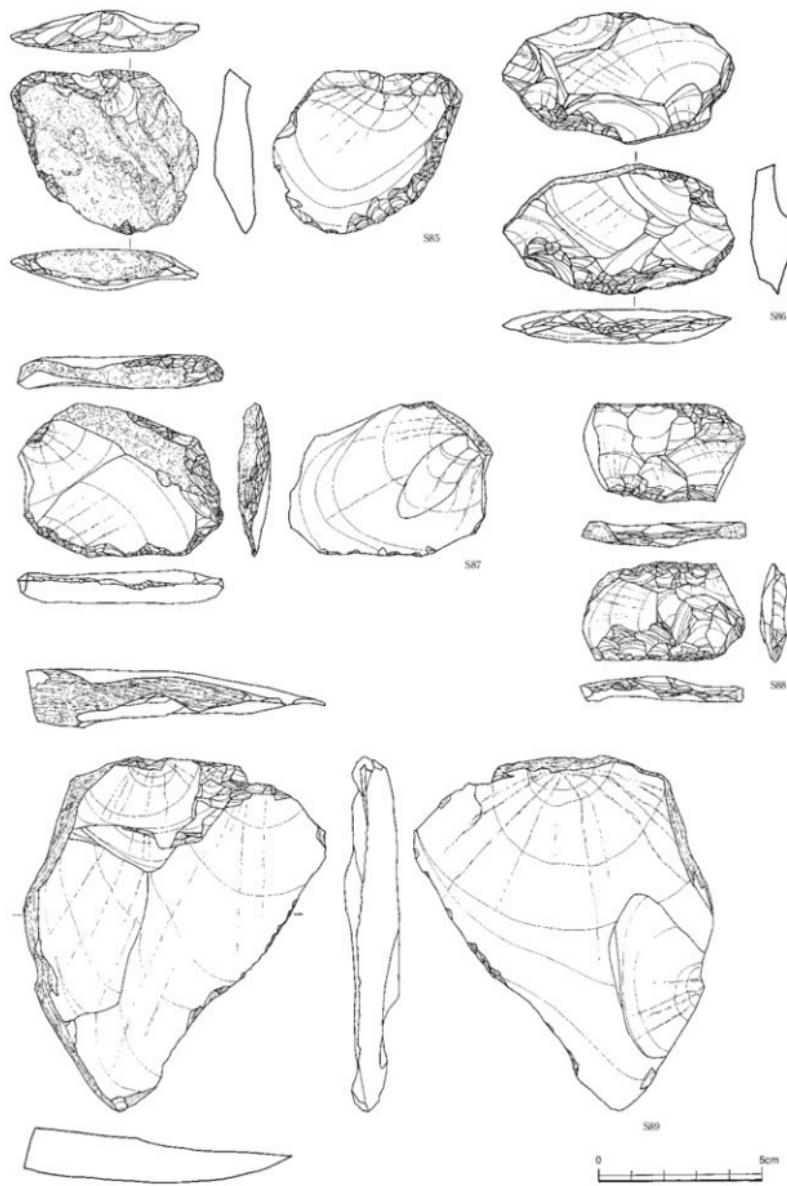
124~127は浅鉢である。いずれも肩の張る頸胴部を有し、頸部からくの字に屈曲して口縁部が短く立ち上がる。124は肩部がやや丸く、胴部がほぼまっすぐ底部に至るもので、口縁部はごく短く、口縁端部は内側に玉縁状に肥厚させている。内外面とも丁寧なミガキで仕上げる。125は肩部が丸く、胴部もやや丸くすぼんでいく。口縁端部は内側に小さな玉縁状に肥厚させる。内外面とも丁寧なミガキで仕上げる。126は肩部が明瞭な屈曲を有するもので、口縁部もやや長い。内外面とも丁寧なミガキまたはナデで仕上げる。127は復元口縁が34.5cmで大型品である。二次焼成を受けているのか器表が傷んでいる。これらの浅鉢は篠原式新段階としてよからう。

石器（第38~40図） サスカイト製の製品、剥片が多数、砂岩礫の凹石4点と敲石1点、石刀片1点が出土した。前者には石鎌、石錐、クサビ形石器、削器、使用痕ある剥片、石核、二次加工ある剥片がある。S72が土坑03、S77が土坑02から、それ以外は包含層から出土した。なお7区から石庵廐と考えられる破片（図版30下段右）が出土した。

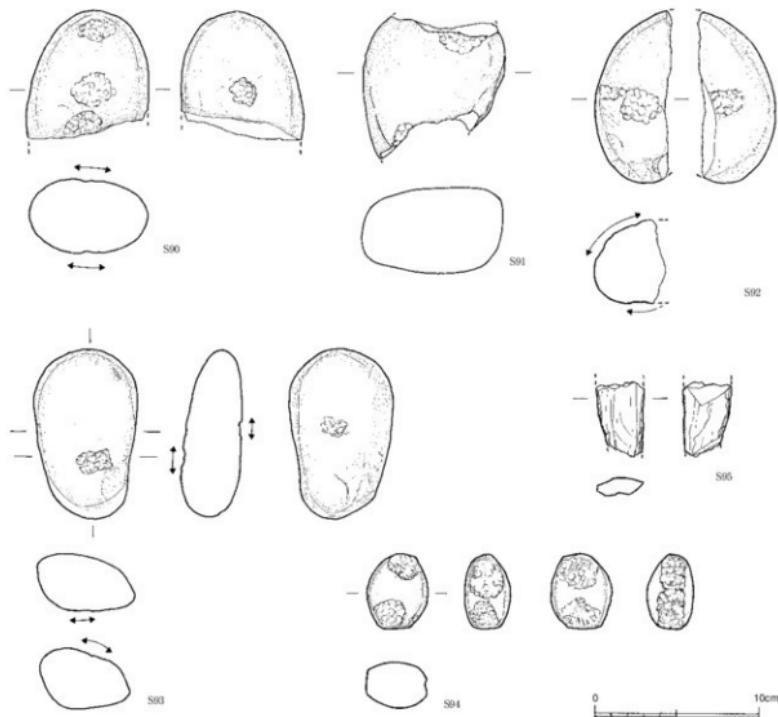
S70~77は石鎌。70・71は凹基式で、小型品である。2次調査で凹基式石鎌が小型・軽量であったとのと同様である。72~76は平基式で、72・73はいびつな二等辺三角形、74は五角形を呈する。75・76は側縁に丸味があり、幅広で短い鎌身のものである。76は自然面を残し、側縁が破損する。



第38図 包含層出土石器実測図（1）



第39図 包含層出土石器実測図（2）



第40図 包含層出土石器実測図（3）

厚く重量感がある。77の下半部は欠損する。

S78～82は石錐。2次調査と同様に二つの形態がある。78～80はつまみ部と錐部の区別が明瞭で、錐部が長く伸びるタイプ。78は完存するが、錐部に明瞭な使用痕は認められない。79・80は錐部が欠損する。79は欠損部から1cm程度、80は6mm程度までの側縁に若干の摩耗が認められる。81・82はつまみ部からわずかに突出する錐部を作り出すタイプ。両者は形態・規模が類似し、つまみ部の上側面に自然面を残すことも同じである。81は錐部先端3mm程度、82は4mm程度の側縁に若干の摩耗が認められる。

S83・84はクサビ形石器。相対する上下の側縁に細かな多くの階段状剥離、エッジの潰れが確認できる。83の側縁は自然面である。84は片面に自然面を残し、側縁は片面調整で形を整える。

S85～88は削器。剥片の一側縁（85・86）、二側縁（88）、四側縁（87）に刃部を形成する。自然面が残り、その部位は85が片面、86が片面から側面にかけて、87と88が側面である。なお、86は他よりも磨滅が進行し灰白色を呈する、87の背面図左は調査時の破損である。

S89は使用痕のある剥片。側面に自然面を残す半円形の剥片が素材である。末端に形成された

鋭く直線的な縁辺を刃部として使用しており、微細な剥離痕が認められる。

S90～93は砂岩製の凹石。90～92は、いずれも凹部分で破損しており、使用によって破損したので、廃棄されたと考えられる。90は主観的だが、中粒の砂岩である。楕円形疊の片方は欠損する。平面図左の上面中央部に径1.6cmと2.2cm程度の凹部2ヶ所と、先端近くに敲打痕があり、敲石としても使用されている。平面図右の上面中央部に径1.0cm程度の凹部がある。長さ7.9cm以上、幅7.5cm、高さ4.5cm、重さ0.38kg。91は中粒の砂岩である。楕円形疊の中央部のみ残存し、片面の平面図上方の割れ口中央部分に径2.5cm程度、平面図下方の割れ口左部分に2.0cm程度の凹部がある。長さ8.7cm以上、幅8.6cm、高さ5.2cm、重さ0.50kg。92は中粒の砂岩である。平面図左に径1.9cm程度の凹部とそこから周縁側にのびる敲打痕、平面図右に1.5～2.0cmの凹部がある。長さ10.5cm、幅5.5cm以上、高さ5.1cm、重さ0.3kg。93は1mm程度までの粒子からなる粗粒の砂岩である。平面図左に2.0～1.4cmの凹部と、平面図右の中央部に弱い敲打痕がある。長さ10.3cm、幅6.4cm、高さ3.7cm、重さ0.32kg。

S94は中粒砂岩製の敲石・磨石。側面を主に使用することで、平面形は六角形を呈する。平面図左では側面の上・左上・左下面に敲打痕、右上・右下・下面に粗い磨痕を伴う敲打痕がある。また平面図左の上・下端部に敲打痕、その裏面の上・下端部に粗い磨痕を伴う敲打痕がある。長さ4.6cm、幅3.7cm、高さ2.8cm、重さ0.08kg。

S95は灰緑色を呈する粘板岩製の石刀、あるいは石棒と考えられる。上下は欠損する。表面は剥離しているが、断面は薄い楕円形を呈すると考えられる。側縁に整形段階の敲打痕がある。研磨痕跡は確認できない。長さ4.6cm、幅3.0cm、重さ0.02kg。

## 第5節 出土剥片類の検討

### 1) はじめに

当調査地では、石器製作時に廃棄されたとみられるサスカイト剥片集中遺構が検出されている。調査は府道の拡幅整備事業に伴うもので、道路に沿って南北165mの間で調査を行っている。平面調査に比べると情報量は少ないが、出土した石器・剥片類や2次調査南区で検出したサスカイト集中遺構105の観察から調査区ごとの違いを明らかにすることで、2次調査南区を石器（素材剥片）製作空間と位置づけできるのではないかと考えた。

調査は1次から3次調査（2次調査区は南区と北区に分けられる）に分けて行っているが、地勢に沿って北端の3次調査区から1次・2次の順に記述する。

### 2) 各調査区の石器構成

石器と剥片類の出土総数は1884点を数え、各調査区での出土点数を表1に示した。各調査区は調査面積にばらつきがあるので、出土した点数を羅列しただけでは問題があるようおもえる。そこで分析対象の面積に比例した点数をもとに検討を行った。

後世の自然流路で包含層・遺構面ともに分断される2次調査区と、石器・剥片類をほとんど出土しなかった3次調査区北半部を除いた対象面積は全体の51%となる。この対象面積をもとに各調査区の面積比を求め、それに石器・剥片類の出土数を割り当てることで、面積比1に対して出土点数1となる仮定モデルができる。このモデルに割り当てた出土点数に対して実際の出土点数の比率を求めることで対象面積の違いから起きる問題は解決できると考えた。

3次調査区の石器類でみると1.6倍、2次調査北区が1.3倍で他はマイナス傾向であることがわかる。剥片類では、3次調査区の-1.0は実際には-1.01なのでほぼ1:1で、2次調査北区が1.3倍となる他はマイナス傾向となり、3次・2次調査北区は似通っているといえる。

表1 各調査区 剥片・石器類出土点数及び面積配分表

調査面積	1390.6m <sup>2</sup>	100%	石器出土総数	304点	剥片出土総数	1566
分析対象面積	(298.9m <sup>2</sup> )	(21.5%)	出土石器数	等分点数	配分比率	
3次調査区	42.3m <sup>2</sup>	14.2%	73 (24%)	44.6	1.6×	219 (14%) 220.8 -1.0×
1次調査区	43.8m <sup>2</sup>	14.7%	31 (10%)	46.2	-1.5×	211 (13%) 228.6 -1.1×
2次調査北区	105.1m <sup>2</sup>	35.2%	140 (46%)	110.5	1.3×	706 (45%) 549.7 1.3×
2次調査南区	107.7m <sup>2</sup>	36.0%	60 (20%)	110.8	-1.9×	430 (28%) 563.8 -1.3×

各調査区から出土した石器類の器種構成比を表2に示した。2次調査北区ではクサビ形石器と使用痕の有る剥片が突出している。クサビ形石器とした中には破碎したものを含み、両刃で刃器とした中にクサビ形石器の可能性があるものがある。使用痕の有る剥片は、使用に際して剥片の縁辺に微細な剥離痕生じたものであり、抉れがあるものや搔器的な使用が想定できるものが多く、その場限りで使用されているようである。

2次調査南区では、石核の出現率の高いことがわかるが、この現象は調査区内に設定した19区から21区、特に19区のサスカイト集中遺構105に起因したもので、クサビ形石器や使用痕の有る

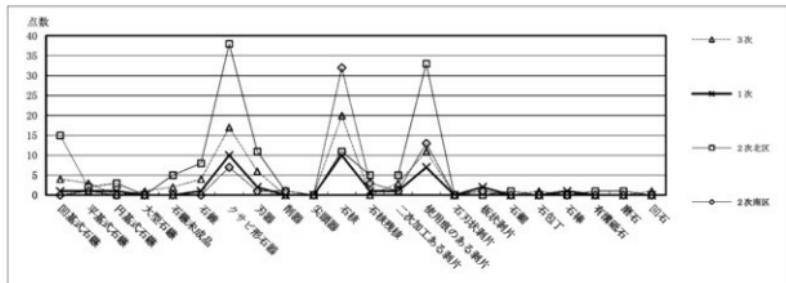
剥片も出土しているが、器種構成は貧弱なものである。石器・剥片類が調査面積に占める割合は1.9・1.3と低く、自然流路で分断された2次調査北区などは器種構成が豊富なことから日常的な生活空間を想定できるが、北区は非日常的な空間といえなくないだろか。

3次調査区はクサビ形石器と石核が突出し、使用痕のある剥片は2次調査南区と肩を並べる点数がある。1次調査区も点数的に違いがあるにしてもクサビ形石器と石核が突出するので、共通する空間的要素が強いといえる。このようにみると1次調査区の石器・剥片類の出土点数は、2次調査北区の約1/3から1/4と大きな開きがあり、中心的な空間の縁辺に位置すると解釈するのが妥当かもしれない。2次調査北区の北辺では土器棺墓が検出されており、1次調査区の包含層では石棒片が出土しているので、祭祀的な性格の空間であったとことも考えられる。

### 3) 剥片打面の分類からの検討

各調査区間の分析対象である縄文時代の包含層は基本的に3層に細分できるが、数次にわたる調査と酷似した土壤の性質から認識がまちまちなところがある。しかし層位毎に取り上げられた剥片数は豊富なので、剥片の打面の分類と背面を構成する剥離面数から概ね石器製作の段階は推測できるので、取り上げ順に集計することでその違いを比較できると考えた。

表2 各調査区出土石器構成表



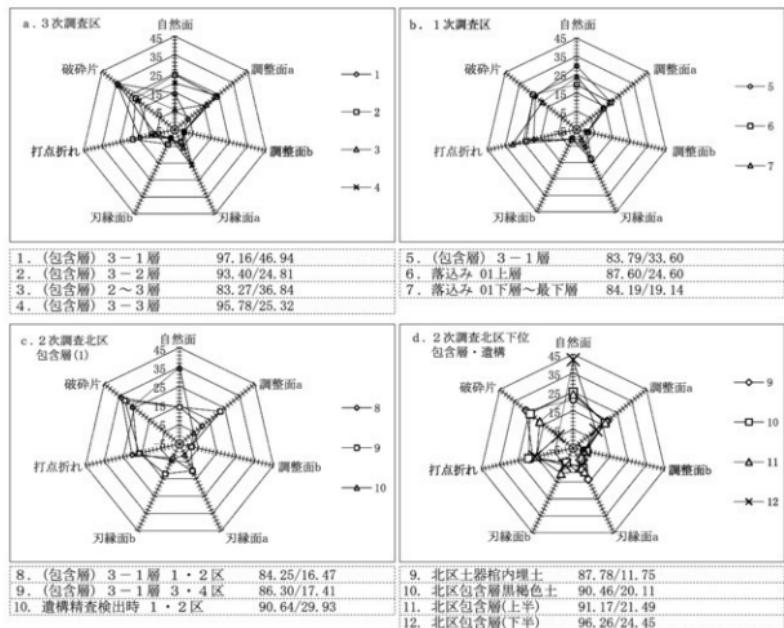
3次調査区 石器 73点 剥片 219点 総数 291点										
回基式石器	平基式石器	円基式石器	大型石器	石器未完成品	石錐	クサビ形石器	刃器	削器	尖頭器	石核
4	3	-	1	2	4	17	6	-	-	20
石核残根	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石刃状剥片	板状剥片	石錐	石包丁	石棒	有磨耗石	磨石	回石
-	3	11	-	-	-	1	-	-	-	1
1次調査区 石器 30点 剥片 211点 総数 241点										
回基式石器	平基式石器	円基式石器	大型石器	石器未完成品	石錐	クサビ形石器	刃器	削器	尖頭器	石核
1	1	1	-	-	1	10	2	-	-	10
石核残根	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石刃状剥片	板状剥片	石錐	石包丁	石棒	有磨耗石	磨石	回石
1	1	7	-	2	-	-	1	-	-	-
2次調査区北区 石器 140点 剥片 706点 総数 844点										
回基式石器	平基式石器	円基式石器	大型石器	石器未完成品	石錐	クサビ形石器	刃器	削器	尖頭器	石核
15	2	3	-	5	8	38	11	1	-	11
石核残根	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石刃状剥片	板状剥片	石錐	石包丁	石棒	有磨耗石	磨石	回石
5	5	33	-	-	1	-	-	1	-	-
2次調査区南区 石器 60点 剥片 430点 総数 490点										
回基式石器	平基式石器	円基式石器	大型石器	石器未完成品	石錐	クサビ形石器	刃器	削器	尖頭器	石核
-	1	-	-	-	-	7	1	1	-	32
石核残根	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石刃状剥片	板状剥片	石錐	石包丁	石棒	有磨耗石	磨石	回石
3	1	13	-	1	-	-	-	-	-	-

自然面とするのは、全面が自然面で原縛から剥離したものである。調整面は、打面を剥離面で構成するもので、複数の剥離面で構成するもの、一部に自然面を残すものを含むが、打面が面的なものをa類とし、点状をなすものをb類とした。打面が面状であるか点状であるかは、剥離作業で用いた道具や剥離技術の違いを反映していることを考えるからである。

刃縁面とするのは、打面が線状であって基本的には石器製作過程の刃縁部への調整を施した際に生じた剥片を想定しているが、石核などの打点に調整を施した際にも起きる現象なので一概に判別できるものではない。

打点折れは、打点部を欠損するが末端まで残すもので、観察項目の剥離角以外は計測しており、剥片長には打点折れの欠損値も含めたので全平均値に反映している。破碎片についても最終的な剥離面を計測しているので、剥片長の全平均値に反映している。前者は長さ：幅の関係で若干縦長傾向にあり、後者では横長になる傾向にある。打点折れの起きる原因について明確な答えを示せないが、破碎片については原縛の自然環境下における産状や、石器製作時に目に見えない亀裂が発生したことによるものであって、石器製作の各段階で石材の優劣の判断はできたと考えられる。

表3 1次・2次(北区)・3次調査区包含層



層位毎に取り上げられた剥片類の特徴を示す数値として剥片形状指数／剥片加重形状指数をあげている。剥片形状指数は計測された剥片の平均長÷平均幅×100で求められ、100を下回ると縦長傾向、100を上回ると横長傾向にあると判断するものである。剥片加重形状指数は、剥片形状指数に平均重量を掛けた平方に開いたものである。

剥片の打面についてみた結果を表3a～dに示した。全体としていえることは、調整面b類から刃縁面b類の出土点数が少ないことである。打面が線状であったり点状であったりするのは、石器製作の仕上げ段階に近いものが多く、法量的にも小さい。仕上げの最終段階で押圧剥離を行った場合、1cmを下回り5mm以下のものが多く派生する。調査時にこのような数mm単位の剥片を注視して取り上げることは困難であり、それが如実に現れたものといえる。

3次調査区（表3a）は、3-1層と3-2～3層で破片が約35%と高く、自然面は5～15%と低い。3-1層は調整面a類が5%と低く、3-3層では刃縁面a類が15%と突出している。

1次調査区（表3b）は、3次調査区に比べると振れ幅が小さく、特に注目されるのが落込み01上層である。剥片加重形状指数は24.60で、3次調査区3-2層の24.81に近似している。明確に分層できなかった下層の19.14と3次調査区の3-3層の25.32とは一致しないので、落込み01上層と3-2と3-3層は近似していることになる。しかし3-2層と3-3層の間層では36.84と高い数値を示している。落込み01下層と間層の数値だけをみると後述する2次調査南区のサヌカイト集中遺構105でみられる数値と似ており、3次調査区での石核出土量が比較的多いことに関連するのではないだろうか。

2次調査北区（表3c・d）は、包含層を2回に分けて掘削している。1～4区までの剥片加重形状指数が16.47～17.44と数値の小さい範囲にあり、3-1層と下位包含層上半と下半としたものは3次調査区の3-2・3層に対応するものとみられる。

#### 4) サヌカイト集中遺構105の分析

2次調査南区で最も注目されるサヌカイト集中遺構105の結果を表4に示した。サヌカイト集中遺構105は調査区内で任意に設定した19区に含まれるが、17～21区で破片がやや突出する程度で大きな変動なくほぼ重複するので、この表からはサヌカイト集中遺構105に目立った傾向はみられない。剥片形状指数では96.94で縦長傾向の剥片が多く、剥片加重形状指数も34.53と他に比べて大きな数値となっている。次に、サヌカイト集中遺構105だけを取り出して打面の分類でみると、上層で自然面が突出して調整面a類がそれに次ぐ傾向にあることがわかる。一方の下層では自然面、調整面a類は減少して刃縁面a類が上層より若干多くなる傾向がある。

出土時の状況は、上層で大きな剥片や石核が多く、接合資料も出土している。下層では、小さな剥片が多いため、土壤の固まりとして取り上げた後に水洗い選別したものである。

サヌカイト集中遺構105の観察項目の集計を表5に示した。上層は大振りの剥片が多いので、剥片の出土点数35点に対して総重量は1015.6gであった。下層は266点で総重量839.7gと大きなひらきがある。剥片形状指数は上層が116.51で横長傾向にあり、下層は93.62で縦長傾向である。剥

片加重形状指数は、上層が58.14、下層17.21と数値的にも大きな違いがある。

現象を素直に解釈すれば上層は石器製作の初期段階にあたる粗削段階の状況を呈し、下層は次段階の工程で派生した剥片類とみることができるのだが、このままでは、実際の作業工程に照らしても納得のいくものではない。石核の出土状況をみても上層で15点、下層で取り上げた中に5点含まれているが、出土状況がわからないので必ずしも下層に属するものであるかわからないところがある。

このような状況から推測されるのは、石材の粗削作業を行い、少し姿勢を変えた程度の範囲内で次の作業工程を行って、最後に粗削作業の剥片や石核をその上へ移動させたとは考えられないだろうか。下層の土壤の粘り気が強かったのも、上層の剥片をかぶせた際に土が含まれていたか、後日石核や大きな剥片を利用するため、意図して土をかぶせ埋納していたことも考えられる。そうした土壤が雨水よって篩い分けされ、下層に粘土分が堆積していたのではないだろうか。

表4 2次調査南区 包含層及びサヌカイト集中遺構105

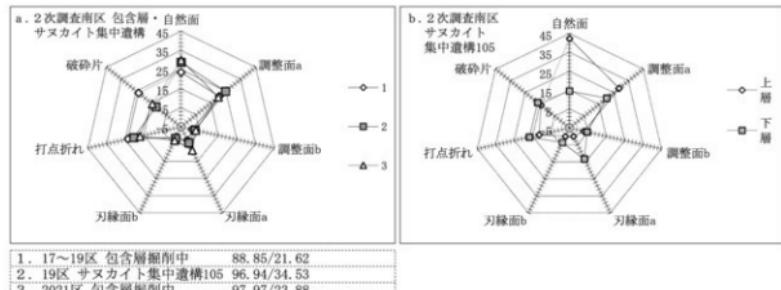


表5 サヌカイト集中遺構105集計表

サヌカイト集中遺構105上層		剥片形状指数:116.51/剥片加重形状指数:58.14					
[剥片素材]	剥片総数:35 サヌカイト:35(100%) 灰岩:0(0% 珍質を含む)	1- 35	剥離角(°)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
[その他素材]	なし	最大	135.0	10.3	8.0	4.0	100.3
[打面]	自然面:15(42.9%) 調整面:10(28.6%) 打点折れ:1(2.9%) 刃縁面:a:0(0%)	最小	7.0	1.1	2.2	0.4	1.9
[刃縁面]	刃縁面:b:0(0%) 打点折れ:4(11.4%) 砕片:5(14.2%)	平均	103.583	4.757	4.083	1.474	29.017
[背面]	全自然面:13(37.1%) 一部自然面:9(25.7%) 単一面:4(11.4%) 極度面:9(25.8%) 旧削離面あり:2(5.7%)	標準偏差	28.352	2.238	1.431	0.713	26.463
[石器組成]	石核:12 使用痕のある剥片:3 二次加工のある剥片:1	ケース数	24	35	35	35	35
		標本母平均 t 検定値	$\pm 0.258$	$\pm 0.165$	$\pm 0.082$	$\pm 3.05$	
		総量	166.5	142.9	51.6	1015.6	
サヌカイト集中遺構105下層		剥片形状指数:93.62/剥片加重形状指数:17.21					
[剥片素材]	剥片総数:266 サヌカイト:257(96.6%) 灰岩:9(3.4% 珍質を含む)	1- 266	剥離角(°)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
[その他素材]	なし	最大	156.0	7.3	8.0	2.5	90.3
[打面]	自然面:72(14.8%) 調整面:100(20.2%) 打点折れ:23(4.6%) 刃縁面:a:67(13.9%) 刃縁面:b:18(3.6%) 打点折れ:83(16.7%) 砕片:82(16.5%)	最小	5.0	0.3	0.4	0.1	0.1
[背面]	全自然面:28(9.4%) 一部自然面:24(9.0%) 単一面:69(25.9%) 極度面:143(53.8%) 旧削離面あり:2(2.8%)	平均	91.669	1.994	2.130	0.499	3.165
[石器組成]	石核:5 使用痕のある剥片:8 二次加工のある剥片:1	標準偏差	38.144	1.134	1.156	0.358	7.951
		ケース数	160	266	266	266	266
		標本母平均 t 検定値	$\pm 0.047$	$\pm 0.048$	$\pm 0.015$	$\pm 0.329$	
		総量	530.4	566.6	132.8	839.7	

## 第4章　まとめ

今回の調査で、明らかになったことは以下のようなものである。

1) 立地について ミヤケ北遺跡は、現状では梅川右岸の段丘上に立地する。しかしこの段丘は、通常の更新世段丘とは異なる土質で、第3章第1節層序で報告したようにルーズな砂、粗砂、小礫で構成される。このことは、太子町教育委員会による周辺での複数の試掘調査でも、基盤はやはりルーズな砂、粗砂、小礫で構成されるという結果と合致する<sup>(1)</sup>。段丘全体が同じ状況とすれば、地理学で「完新世段丘」<sup>(2)</sup>と呼称されるものと考える。そして今回の縄文遺構群は、それら砂、粗砂、小礫の表面が土壤化した部分で検出できたものである。

この完新世段丘の形成時期を知るがかりは、2次調査の流路12にあり、その埋土最上層から古墳時代後期の土師器片が出土したことである。流路12の埋土は、段丘上の微低地への突発的な土石流ではなく、ラミナを形成する部分が確認できるなど通常の自然河川の堆積状況を示している。つまり少なくとも古墳時代後期までは、河川の流れる通常の沖積平野の状況であって、段丘が形成されるのはそれ以降の時期と考えられるのである。

高橋学氏は、完新世段丘には二面があり、弥生時代中期初頭に段丘化した「Ⅰ面」と、古代末～中世初頭に段丘化した「Ⅱ面」と呼称している。それに従えば、ミヤケ北遺跡のる段丘は、完新世段丘Ⅱ面ということになるのだが、地理学からの教示を得たわけではないので、ここでは断定をさせておきたい。少なくとも、ミヤケ北遺跡が存在した縄文晩期集落は、今見るように段丘上に立地したのではないことは注意しておかねばならない。

2) 遺跡の広がりと時期について ミヤケ北遺跡は、北北西にのびる二条の埋没微高地上に存在する集落である。1次と2次調査の北区北部15mのあたりが居住域の中心地と考えられる。2次調査の南区南端でも同じ時期の居住域が確認できる。3次調査の状況からは、それよりも北部にはのびないであろうと考えられた。

遺跡の継続時期については、土器片のすべてを検討した結果、上限は篠原式（滋賀里Ⅲ b式）で、それ以前の滋賀里Ⅱ、Ⅲa式を含まない。また下限は長原式である（大野薫氏より教示）。以上から、遺跡の継続時期は、篠原式から長原式である。

遺跡の広がりと時期を総合し、調査次ごとの遺物の時期を見ると、以下のとおりである。

- ・ 1次調査：落込み01の埋没後に、ピット群と土坑などの遺構が掘り込まれる。前者には突帯文土器は異形品（第7図1）1点のみであり、後者には長原式までが含まれる。
- ・ 2次調査：包含層およびピット・土坑などの遺構に突帯文土器が含まれる。北区は1次調査と一連の遺構であり、南区は流路で分離されてはいるが同じ時期の遺構と考えられる。
- ・ 3次調査：遺構、遺物とともに、突帯文土器はみられない。

以上の事から巨視的には、3次調査・1次調査の落込み01埋没段階（篠原式（滋賀里Ⅲ b式））

⇒ 1・2次調査の各種遺構（滋賀里IV式～長原式）へと変遷したようである。

3) 石器について 今回の調査では、多数のサスカイト製の製品と剥片が出土し、石核も含まれていた。土器が出土する所では、それ以上の点数のサスカイトが出土する状況であり、2次調査南区のサスカイト集中遺構105で密集する以外は、分布の粗密はない。

①サスカイト製品としては、石鏃、石錐、クサビ形石器、削器がある。また一定程度の大きさの剥片や石核の場合は、エッジ部分に刃こぼれや擦った使用痕跡が認められる資料が多い。ただし2次調査南区サスカイト集中遺構105は例外で、剥片や石核に使用痕のあるものは少ない。

②石錐には、縄文時代では一般的な小さく薄いもの以外に、大きく厚く重い資料が目立つ。通常の石錐を最大長2cm程度、最大厚2～3mm程度とすれば、それを上回る資料が多い。2次調査北区の遺構密集部で出土した石錐（第22図）では、完形品あるいは破損していても大きさの推定できる石錐23点の内、18点が大きい石錐になる。

③サスカイト自然面から推定できる採取地<sup>(3)</sup>について。自然面が爪状打撃痕や海綿状クレーテーで覆われる亜円礫～円礫が主体で、これらは噴出源（春日山付近）から少し離れたエリアで採取されたと考えられる。また自然面が水磨した資料も少数あり、これらは付近の河川で採取されたようである。一方、噴出源付近の露頭で採取できる角礫～亜角礫は、ごくわずかである。

④サスカイト製の打製石器以外としては、砂岩の転石をそのままに利用した敲石、凹石、磨石がある。これらは隣接する梅川や石川の河原で採取可能であったと考えられる。しかし磨いて整形する磨製石斧などは皆無である。

4) 条里地割について 現地は大阪府下でも条里地割が良好に残る地域であり、その開発年代がいつなのかは、重要なテーマである。しかし、ミヤケ北遺跡では現代耕作に関わる土層を除去すれば、縄文時代晩期中頃～後半の遺物包含層と遺構面、その上面の微低地に形成された弥生時代～古墳時代の自然流路が現れる。凹凸のあった地形が、古墳時代後期には平坦化して、それ以降には沖積作用をほとんど受けない安定したエリアになったことが調査でわかった。ミヤケ北遺跡では、おそらく古代～中世のいざれかで形成されたであろう条里地割は、第1層の中しか認識しえず、その開発年代については全く確認することが出来なかった。

#### 註

- 1) 太子南交差点の南西隅のガソリンスタンド、同北西隅のコンビニエンスストア、交差点から東140mのガソリンスタンド建設に先立って実施した試掘調査成果による。太子町教育委員会の池田貴則氏、鍋島隆宏氏から教示を得た。
- 2) 高橋 学「地形環境分析からみた条里遺構年代決定の問題点」『条里制研究』第6号 条里制研究会 1990年
- 3) 上峯篤史のご教示による。上峯篤史「縄文時代晩期の石材利用－二上山北麓産サスカイトの細分をもとに－」（第11回関西縄文文化研究会ポスターセッション）2010。

表6 繩文土器観察表 1

遺物 No.	拂 印 印 No.	図 版 版 No.	実 測 測 No.	登 録 録 No.	地 区 名	遺構 層位	器種	法 量			色調	胎土	備考
								口径	器高	底径			
1	7	11a	27	1-9	3区	落込み01上層	深鉢				内：10YR5/3にぶい黄褐色 外：2.5Y6/2灰黃 断：2.5Y5/2灰灰黃	長石、石英、雲母、角閃石(少々)、(河内)	突帯文
2	7	13a	45	1-12	4区	落込み01上層	深鉢				内：10YR5/2灰黃褐色 外：10YR7/3にぶい黄褐色 2.5Y5/1黃褐色 断：10YR5/2灰黃褐色	長石、石英、雲母、(非河内)	口唇部に刻目
3	7	10a	21	1-26	1.2区	落込み01	深鉢				内：2.5Y4/1黃灰 外：10YR6/3にぶい黄褐色 10YR4/1褐色 断：10YR6/3にぶい黄褐色	長石、石英、雲母(多)	
4	7	10a	22	1-26	1.2区	落込み01	深鉢	(25.0)	残 11.1		内：10YR3/2黒褐色 2.5Y3/1黒褐色 外：10YR5/2灰黃褐色 10YR2/1黑褐色 断：10YR5/3にぶい黄褐色	長石、石英、チャート(非河内)	類似形態にD字 連續刻文、口 唇部に縫合の刺 文
5	7	13a	29	1-9	3区	落込み01上層	深鉢	(29.0)	残 8.1		内：7.5YR5/3にぶい黒褐色 外：2.5Y6/2灰黃 2.5Y3/1黒褐色 断：7.5YR5/3にぶい黒褐色	精良、長石、石英、雲母、角閃石(河内)	小さな波状口縁
6	7	10a	18	1-20	1.2区	落込み01上層	深鉢	(14.8)	残 4.9		内：10YR8/2灰白 2.5Y5/1黃灰 外：10YR7/3にぶい黄褐色 10YR5/2灰黃褐色 断：10YR5/2灰黃褐色	長石、石英、雲母(非河内)	
7	7	13a	46	1-12	4区	落込み01上層	浅鉢				内・外：2.5Y5/1黃灰 断：2.5Y6/2灰黃	精良、長石、石英、雲母	
8	7	10a	15	1-20	1.2区	落込み01上層	深鉢				内：2.5Y4/1黃灰 外：2.5Y5/1黃灰 断：10YR6/2灰黃褐色	精良、長石、石英、雲母	
9	7	10b	12	1-17	2区	落込み01下層	浅鉢				内：2.5Y4/2暗灰黃 5Y3/1オーブ黒褐色 外：2.5Y4/1黒褐色 10YR7/3にぶい黄褐色 断：10YR5/2灰黃褐色	精良、長石、石英、雲母	
10	7	13a	47	1-12	4区	落込み01上層	浅鉢				内・外：10YR5/2灰黃褐色 10YR5/1褐色 断：10YR5/3にぶい黄褐色	精良、長石、石英、雲母、角閃石(河内)	
11	7	11b	42	1-12	4区	落込み01上層	浅鉢				内：2.5Y4/1黃灰 外・断：2.5Y5/2暗灰黃	長石、石英、雲母	
12	7	11b	43	1-12	4区	落込み01上層	深鉢				内：10YR6/2灰黃褐色 外：10YR5/2灰黃褐色 断：10YR5/1褐色	長石、石英、雲母	6と同一個体か?
13	7	10a	14	1-18	4区	落込み01下層	深鉢				内：2.5Y6/2灰黃褐色 2.5Y4/1黃灰 外：7.5YR7/6堆 10YR5/2灰黃褐色 断：10YR5/3にぶい黄褐色	長石、石英、雲母	
14	7	11b	40	1-12	4区	落込み01上層	深鉢				内：2.5Y5/1黃灰 外：2.5Y4/1黃灰 断：10YR6/3にぶい黄褐色	長石、石英	
15	7	11a	39	1-12	4区	落込み01上層	深鉢?				内：10YR4/2灰黃褐色 外：10YR5/3にぶい黄褐色 断：10YR5/2灰黃褐色	長石、石英、雲母	

表6 繩文土器観察表 2

遺物 No.	排 出 版 No.	図 版 No.	実 測 No.	登 録 No.	地 区 名	遺構 層位	器種	法 量			色調	胎土	備考
								口径	器高	底径			
16	7	13a	54	1-19	3.4区	落込み01上層	深鉢				内：2.5Y3/1黒褐 外：10Y4/1黒褐、 10Y5/2灰黄褐 断：10Y6/2灰黄褐	長石、石英、雲母	
17	7	11b	41	1-12	4区	落込み01上層	浅鉢？				内：10Y4/2灰黄褐 外：10Y5/2灰黄褐 断：10Y6/2灰黄褐	精良。長石、石英、雲母	
18	7	10b	16	1-20	1.2区	落込み01上層	深鉢？	(13.0)	残 3.8		内：10Y6/2灰黄褐、 10Y4/2灰黄褐 外：2.5Y5/2灰黄褐 断：10Y6/2灰黄褐	長石、石英、雲母	
19	7	10b	17	1-20	1.2区	落込み01上層	浅鉢				内：2.5Y4/1黄褐 外：2.5Y3/1黒褐、 10Y4/2灰黄褐 断：10Y6/2灰黄褐	長石、石英、雲母	
20	7	11a	37	1-12	4区	落込み01上層	深鉢				内：10Y7/3にぶい黄褐 外：10Y6/3にぶい黄褐 断：10Y7/2にぶい黄褐	長石、石英、雲母(井河内)	
21	7	13a	48	1-12	4区	落込み01上層	深鉢				内・外：7.5Y5/6明褐、 7.5Y5/3にぶい褐 断：5YR6/6橙	長石、石英、雲母(井河内)	
22	7	10b	10	1-14	3区	落込み01上層	浅鉢	(15.4)	残 1.9		内：2.5Y4/2暗灰黄 外：2.5Y4/2灰灰黄 断：2.5Y5/2暗灰黄	長石、石英、雲母	
23	8	10b	13	1-17	2区	落込み01下層	浅鉢	(14.6)	残 2.65		内：10Y6/2灰黄褐 外：10Y6/4にぶい黄褐、 10Y4/2灰黄褐 断：10Y5/2灰黄褐	長石、石英、雲母(井河内)	
24	8	11b	53	1-19	3.4区	落込み01上層	浅鉢				内・外：10Y5/2灰黄褐 断：10Y5/2灰黄褐、 7.5Y7/4にぶい橙	精良。長石、石英、雲母、角閃石(河内)	
25	8	11b	44	1-12	4区	落込み01上層	浅鉢				内：2.5Y4/1黄褐 外：10Y5/2灰黄褐 断：10Y6/2灰黄褐	長石、石英、雲母、角閃石(河内)	外面に沈藻文
26	8	10a	19	1-20	1.2区	落込み01上層	浅鉢	(21.0)	残 6.7		内：10Y5/3にぶい黄褐 外：10Y6/2暗灰黄褐、 10Y3/2暗褐 断：7.5Y5/4にぶい褐	長石、石英、雲母、チャート(井河内)	口縁部に刻目
27	8	11b	28	1-9	3区	落込み01上層	浅鉢				内：2.5Y4/1黄褐 外：10Y7/3にぶい黄褐、 2.5Y6/1暗灰 断：2.5Y7/3灰黄、 2.5Y6/2暗灰	精良。長石、石英、チャート(井河内)	
28	8	12a	55	1-19	3.4区	落込み01上層	浅鉢				内：10Y5/2灰黄褐 外：2.5Y4/1黄褐、 2.5Y6/2灰黄 断：2.5Y5/2暗灰黄	精良。長石、石英、雲母	口縁部に赤色顔料
29	8	12a	49	1-12	4区	落込み01上層	浅鉢				内：2.5Y5/2暗灰黄 外：2.5Y4/1黄褐 断：10Y6/4にぶい黄褐	精良。長石、石英、雲母、角閃石(河内)	
30	8	12a	50	1-12	4区	落込み01上層	浅鉢				内：2.5Y5/2暗灰黄 外：2.5Y6/2灰黄 断：2.5Y5/2暗灰黄	精良。長石、石英、雲母	
31	8	12a	30	1-9	3区	落込み01上層	浅鉢				内・外・断：10Y5/2灰黄褐	精良。長石、石英、雲母	瓶胴部界に明瞭な段

表6 繩文土器觀察表 3

遺物 No.	拂 印 印 No.	図 版 No.	実 測 No.	登 録 No.	地 区 名	遺構 層位	器種	法 量			色調	胎土	備考
								口径	器高	底径			
32	8	12a	51	1-8	1区	落込み01上層	浅鉢	(26.7)	浅 9.5		内：2.5YR6/3にぶい黄褐色 外：10YR6/3にぶい黄褐色 断：7.5YR6/4にぶい黄褐色 7.5YR6/1褐色灰	精良、石英、雲母、チャート(非河内)	
33	8	11a	38	1-12	4区	落込み01上層	底部				内：2.5YR4/1黄色 10YR4/2灰黃褐色 外：10YR5/3にぶい黄褐色 断：7.5YR5/4にぶい黄褐色 7.5YR5/1褐色灰	長石、石英、角閃石(河内)	丸底
34	8	11a	36	1-12	4区	落込み01上層	底部		浅 3.0		内：10YR6/2灰黃褐色 外：10YR6/3にぶい黄褐色 断：10YR5/2灰黃褐色	長石、石英、チャート(非河内)	丸底
35	8	11a	26	1-9	3区	落込み01上層	浅鉢底部		浅 3.1	(5.2)	内・外：2.5YR6/1黄色 7.5YR6/1褐色 断：7.5YR6/4にぶい黄褐色 2.5YR6/6明赤褐色	精良、石英、雲母	
36	8	11a	25	1-9	3区	落込み01上層	底部		浅 4.35	4.2	内：10YR4/2灰黃褐色 外：7.5YR6/4にぶい黄褐色 断：10YR4/2灰黃褐色	長石、石英、雲母、角閃石(河内)	小さな回み底
37	8	10b	11	1-16	3区	落込み01下層	底部		浅 2.0	(7.4)	内：10YR5/2灰黃褐色 外：7.5YR6/6橙褐色 断：10YR5/2灰黃褐色	長石、石英、雲母、角閃石(河内)	
38	11	13b	24	1-32	6区	土坑04	底部		浅 1.35		内：10YR6/2灰黃褐色 外：10YR7/3にぶい黄褐色 断：10YR6/1灰黃褐色	長石、石英、雲母、チャート(非河内)	丸底
39	11	13b	23	1-29	1区	土坑02最下層	深鉢				内：2.5Y5/2暗灰黃褐色 外：10YR5/3にぶい黄褐色 断：10YR5/2灰黃褐色	長石、石英、雲母(河内)	突帯文
40	11	13b	9	1-7	1区	落込み02	深鉢				内：7.5YR6/6橙褐色 7.5YR6/1褐色灰 外：7.5YR6/6橙褐色 10YR5/2灰黃褐色 断：10YR5/4にぶい黄褐色	長石、石英	突帯文
41	12	13b	8	1-3	3.4区	包含層	深鉢				内・外：10YR7/3にぶい黄褐色 断：2.5Y7/2灰黃	長石、石英、雲母、チャート	突帯文
42	12	13b	2	1-3	3.4区	包含層	深鉢				内：2.5Y4/1黄褐色 外：2.5Y4/1黄褐色 2.5Y6/2暗灰黃褐色 断：10YR5/3にぶい黄褐色	長石、石英、雲母、角閃石(河内)	突帯文
43	12	13b	4	1-3	3.4区	包含層	深鉢				内：10YR8/3浅黃褐色 外：10YR8/3暗黃褐色 10YR7/2にぶい黄褐色 断：2.5Y7/2灰黃	長石、石英、チャート(非河内)	突帯文、口唇部刻目
44	12	13a	33	1-5	3.4区	包含層	深鉢？				内・外：2.5Y5/2暗灰黃褐色 断：10YR6/2灰黃褐色	長石、石英、雲母(河内)	口唇部刻目
45	12	11b	32	1-5	3.4区	包含層	深鉢				内：10YR6/4にぶい黄褐色 2.5Y5/2暗灰黃褐色 外：2.5Y5/2暗灰黃褐色 断：10YR6/4にぶい黄褐色 2.5Y5/2暗灰黃	長石、石英	口唇部刻目
46	12	13b	6	1-3	3.4区	包含層	深鉢				内：10YR5/2灰黃褐色 外・断：10YR6/4にぶい黄褐色	長石、石英、雲母	口唇部刻目

表6 繩文土器観察表 4

遺物 No.	拂 団 版 No.	団 版 No.	実 測 No.	登 録 No.	地区 名	遺構 層位	器種	法 量			色調	胎土	備考
								口径	器高	底径			
47	12	12a	34	1-5	3.4区	包含層	深鉢				内：2.5Y6/2灰黄 外：10Y7/3にぶい黄橙 10Y8/4/2灰黄 断：2.5Y6/2灰黄	長石、石英、雲母	彌制界面にD字 連続網突文、胎部に段位の連続 網突
48	12	14a	5	1-3	3.4区	包含層	深鉢				内：10Y8/4/2灰黄 外：10Y8/6/2灰黄 10Y8/3/2灰 断：10Y8/5/3にぶい黄橙 10Y8/2/1黑	長石、石英、雲母、角閃石(河内)	彌制界面にC字 連続網突文
49	12	11b	31	1-5	3.4区	包含層	深鉢				内：2.5Y8/3浅黄 2.5Y6/1灰 外：10Y7/4/3にぶい黄橙 10Y8/5/1灰 断：2.5Y8/3灰黄	長石、石英、雲母	口唇部に横長削 目
50	12	12a	35	1-5	3.4区	包含層	深鉢				内：SYR8/6橙 7.5Y8/3にぶい橙 外：7.5Y8/4にぶい橙 10Y8/6/2灰黄 断：7.5Y6/4にぶい橙	長石、石英、チャート	内面二枚貝条板
51	12	14a	7	1-3	3.4区	包含層	深鉢	(7.5)	残 3.9		内：2.5Y6/2灰黄 2.5Y4/1灰 外：10Y8/6/3にぶい黄橙 10Y8/5/2灰黄 断：2.5Y6/2灰黄	長石、石英、粗粒纖	ミニチュア
52	12	13b	3	1-3	3.4区	包含層	深鉢	(9.6)	残 3.15		内：10Y8/8/2灰白 10Y8/5/1灰 外：10Y8/6/3にぶい黄橙 断：10Y8/5/2灰黄	長石、石英、雲母	ミニチュア
53	12	14a	1	1-3	3.4区	包含層	深鉢	(9.6)	残 4.15		内：2.5Y4/1灰黄 外：10Y8/6/3にぶい黄橙 5Y8/6/橙 断：10Y8/5/1黑灰	長石、石英、雲母	丸底
54	16	15	47	2-128	北区 1区	土器程01	深鉢	36.0	43.4		内：10Y8/5/2灰黄 2.5Y4/1灰 外：2.5Y6/2灰黄 2.5Y3/2黑 断：10Y8/5/2灰黄	長石、石英、雲母(微量)、チャート	突唇文。尖り底
55	20	16a	36	2-113	北区 7区	土质04	深鉢	(30.0)	残 5.8		内：2.5Y7/3浅黄 2.5Y5/2灰黄 外：2.5Y4/1灰 断：2.5Y5/2灰黄 2.5Y3/1黑	長石、石英、チャート	突唇文
56	21	16a	23	2-53	北区 1.2.4区	包含層	深鉢				内：10Y8/7/3にぶい黄橙 外：10Y8/6/2灰黄 断：10Y8/7/4にぶい黄橙	精良。長石、石英、雲母	
57	21	16b	20	2-47	北区 2区	包含層	深鉢				内：7.5Y4/3橙 外：7.5Y4/3橙 断：7.5Y8/3にぶい橙	精良。長石、石英、雲母、角閃石(河内)	
58	21	16b	1	2-4	北区 1.2区	包含層	深鉢				内：2.5Y5/3黄 外：7.5Y8/4/4 断：2.5Y5/3黄	長石、石英、雲母、角閃石(河内)	
59	21	16b	21	2-47	北区 2区	包含層	深鉢				内：10Y8/7/3にぶい黄橙 外：10Y8/4/1灰 断：10Y8/5/2灰黄	長石、石英、雲母、クサリ纖(非河内)	
60	21	16a	37	2-14	北区 3区	包含層	深鉢				内：10Y8/6/1灰 外：7.5Y8/4/2灰 断：10Y8/7/2にぶい黄橙	精良。長石、石英、雲母	
61	21	16a	38	2-115	北区 4区	包含層	深鉢				内：10Y8/5/1灰 外：7.5Y8/4/2灰 断：10Y8/5/1黑	長石、石英、雲母、角閃石(河内)	

表6 繩文土器観察表 5

遺物 No.	拂 國 No.	図 版 No.	実 測 No.	登 録 No.	地 区 名	遺構 層位	器種	法 量			色調	胎土	備考
								口径	器高	底径			
62	21	16b	24	2-55	北区 1区	包含層	深鉢				内：10YR8/3浅黄褐 外：10YR8/3浅黄褐 断：10YR8/3浅黄褐	長石、石英、雲母、チャート	内外面に赤色顔料
63	21	16b	13	2-47	北区 2区	包含層	深鉢				内：10YR5/2灰黄褐 外：10YR7/4にぶい黄褐 断：10YR6/2灰黄褐	長石、石英、チャート、粗流羅含む	
64	21	17a	10	2-33	北区 2区	包含層	深鉢				内：10YR6/3にぶい黄褐 外：7.5YR6/6橙 断：10YR6/3にぶい黄褐	長石、石英、雲母	
65	21	16b	25	2-60	北区 2区	包含層	深鉢				内：10YR6/3にぶい黄褐 外：2.5Y4/1灰灰 断：10YR6/3にぶい黄褐	長石、石英、雲母	
66	21	16a	42	2-11	北区 2区	包含層	深鉢	(27.4)	縦 8.35		内：10YR4/1褐色 外：SY3/1オーブ黒 断：10YR7/3にぶい黄褐 断：10YR5/1褐色	長石、石英、チャート	口唇部にまばらな刻目
67	21	16a	5	2-12	北区 1.2区	包含層	浅鉢				内：10YR7/4にぶい黄褐 外：10YR6/6灰黄褐 断：10YR6/4にぶい黄褐	長石、石英、雲母	
68	21	17a	2	2-12	北区 1.2区	包含層	深鉢				内：10YR4/1褐色 外：10YR6/3にぶい黄褐 断：10YR6/2灰黄褐	長石、石英、雲母	突帯文
69	21	17a	3	2-12	北区 1.2区	包含層	深鉢				内：2.5Y7/2灰黄 外：10YR5/2灰黄褐 断：10YR6/3にぶい黄褐	長石、石英、チャート、砂粒多	突帯文
70	21	17a	7	2-14	北区 3.4区	包含層	深鉢				内：10YR5/3にぶい黄褐 外：10YR5/3にぶい黄褐 断：7.5Y4/1灰	長石、石英、雲母、角閃石(河内)	突帯文
71	21	17a	6	2-14	北区 3.4区	包含層	深鉢				内：10YR7/3にぶい黄褐 外：10YR7/4にぶい黄褐 断：10YR5/1褐色	長石、石英、雲母	突帯文
72	21	17a	26	2-66	北区 10区	包含層	甕				内：10YR4/2灰黄褐 外：N2/0黒 断：2.5Y4/2暗灰黄	長石、石英、雲母、角閃石(河内)	突帯文
73	21	17b	14	2-47	北区 2区	包含層	深鉢				内：10YR7/2にぶい黄褐 外：10YR6/2灰黄褐 10YR4/1褐色 断：10YR5/1褐色	長石、石英、雲母、チャート	突帯文
74	21	17b	8	2-22	北区 11.12区	包含層	深鉢				内：10YR4/2灰黄褐 外：10YR5/3にぶい黄褐 断：10YR4/2灰黄褐	長石、石英、雲母、角閃石(河内)	突帯文
75	21	17b	15	2-47	北区 2区	包含層	深鉢				内：2.5Y5/1黄灰 外：10YR5/2灰黄褐 断：2.5Y5/2暗灰黄	長石、石英、雲母、角閃石(河内)	突帯文
76	21	17b	18	2-47	北区 2区	包含層	深鉢				内：5YR6/4にぶい橙 外：7.5YR6/3にぶい鵝 断：7.5Y4/1灰	長石、石英、雲母	突帯文
77	21	17b	22	2-53	北区 1.2.4区	包含層	深鉢				内：2.5Y7/2灰黄 外：7.5YR7/4にぶい鵝 断：2.5Y6/2灰黄	長石、石英、チャート	突帯文

表6 繩文土器観察表 6

遺物 No.	排 出 年 代 No.	図 版 No.	実 測 No.	登 録 No.	地 区 名	遺構 層位	器種	法 量			色調	胎土	備考
								口径	器高	底径			
78	21	17b	16	2-47	北区 2区	包含層	深鉢				内：10YR7/4にぶい黄褐色 外：10YR6/3にぶい黄褐色 断：10YR4/1暗灰	長石、石英、チャート	突帯文
79	21	17b	19	2-47	北区 2区	包含層	深鉢				内：10YR4/2灰黄褐色 外：10YR5/4にぶい黄褐色 断：2.5Y4/1暗灰	長石、石英、雲母、角閃石(河内)	突帯文
80	21	17b	4	2-12	北区 1.2区	包含層	深鉢				内：7.5YR6/6橙 外：7.5YR6/6橙 断：7.5YR5/3にぶい橙	長石、石英、チャート	胸部突帯
81	21	18a	11	2-40	北区 8区	包含層	底部		残 2.8	4.8	内：2.5Y4/1黄灰 外：2.5Y6/2灰黄 7.5YR5/4にぶい橙 断：2.5Y5/2暗灰黄 7.5YR5/4にぶい橙	長石、石英、粗粒纏合む	
82	21	18a	39	2-2	北区 9~14区	包含層	底部		残 2.5	(7.2)	内：10YR4/2灰黄褐色 外：10YR7/3にぶい黄褐色 7.5YR5/4にぶい黄褐色 7.5YR3/6明褐色 10YR4/3にぶい黄褐色	長石、石英、雲母	
83	21	18a	9	2-33	北区 2区	包含層	浅鉢底部		残 2.4	(8.2)	内：10YR5/2灰黄褐色 10YR3/4にぶい黄褐色 外：SYR5/4にぶい赤褐色 断：10YR5/2灰黄褐色	長石、石英、雲母、チャート	
84	21	18a	17	2-47	北区 2区	包含層	底部		残 2.6	(8.0)	内：7.5YR7/4にぶい橙 外：7.5YR5/4にぶい橙 10YR6/3にぶい黄褐色 断：10YR3/17にぶい橙 7.5YR6/4にぶい橙	長石、石英、雲母、クリア繩	
85	21	18a	40	2-47	北区 2区	包含層	底部		残 2.4	(10.6)	内：2.5Y7/3浅黄 SY4/1灰 外：2.5Y7/3浅黄 断：2.5Y6/2浅黄	長石、石英、雲母、結晶片岩	
86	21	18a	12	2-40	北区 8区	包含層	底部		残 5.5	(7.8)	内：10YR7/3にぶい黄褐色 外：2.5YR6/6橙 10YR7/3にぶい黄褐色 断：2.5Y4/1黄灰	長石、石英、雲母、チャート	
87	25	18b	30	2-99	南区 19区	サヌカイト集積 遺構105	深鉢				内：SYR6/6橙 10YR5/2灰黄褐色 外：2.5Y5/1黄灰 7.5YR6/4にぶい橙 断：10YR5/2灰黄褐色	長石、石英、雲母、クリア繩	突帯文
88	25	18b	32	2-99	南区 19区	サヌカイト集積 遺構105	深鉢				内：SY5/1灰 2.5Y7/3浅黄 外：10YR7/6明黄色 断：SY5/1灰	長石、石英、雲母、角閃石(河内)	突帯文
89	25	18b	31	2-99	南区 19区	サヌカイト集積 遺構105	深鉢				内：10YR5/3にぶい黄褐色 外：10YR3/3明褐色 断：2.5Y5/2暗灰黄	長石、石英、雲母、角閃石(河内)	胸部突帯の可能性あり
90	25	18b	34	2-129	南区 19区	サヌカイト集積 遺構105	深鉢				内：10YR5/4にぶい黄褐色 2.5Y5/1黄灰 外：10YR6/3にぶい黄褐色 断：10YR5/3にぶい黄褐色	長石、石英、雲母	突帯文
91	25	18b	33	2-99	南区 19区	サヌカイト集積 遺構105	浅鉢				内：10YR6/2灰黄褐色 外：10YR5/2灰黄褐色 断：10YR5/2灰黄褐色	長石、石英、雲母	
92	25	18b	35	2-93	南区 19区	サヌカイト集積 遺構105	底部		残 2.4	(4.6)	内：10YR7/2にぶい黄褐色 外：SYR5/6明赤褐色 断：SYR5/6明赤褐色	長石、石英	

表6 繩文土器観察表 7

遺物 No.	拂 國 版 版 No.	回 國 版 版 No.	実 測 面 No.	登 録 No.	地 區 名	遺構 層位	器種	法 量			色調	胎土	備考
								口径	器高	底径			
93	29	19a	29	2-97	南区 18区	包含層	深鉢				内：2.5Y8/2灰白 2.5Y5/1黄灰 外：10YR7/3C/5ない黄褐 10YR6/4C/5ない黄褐 断：7.5Y3/1オリーブ黒	長石、石英、雲母	突帯文
94	29	19a	27	2-85	南区 18区	流路12	深鉢				内：2.5Y5/1黄灰 外：10YR7/4C/5ない黄褐 2.5Y6/1黄灰 断：2.5Y4/1黄灰	長石、石英、雲母	突帯文
95	29	19a	48	2-091	南区 21区	包含層	深鉢				内：2.5Y3/1黒褐 外：10YR5/4C/5ない黄褐 断：2.5Y3/1黒褐	長石、石英、雲母、角閃石(河内)	側面突帯、軽い刻目あり。底部に斜行沈線文あり
96	29	19e	28	2-88	南区 17区	流路12最上層	寄生鉢				内：5Y86/6橙 10YR7/4にぶい黄褐 N2/0黒 外：5Y86/6橙 断：7.5Y86/6橙	長石、石英、クサリ織	
97	29	19b	41	2-119	南区 15区	流路14	寄生鉢	(10.4)	残 8.5	5.2	内：10YR7/3にぶい黄褐 外：10YR7/3にぶい黄褐 N3/0灰 断：2.5Y7/2灰黄 2.5Y4/1灰灰	長石、石英、雲母(河内)	
98	31	25a	12	3-29	8区	ピット01	浅鉢	(26.9)	残 6.4		内：10YR4/1褐色 10YR6/3C/5ない黄褐 外：10YR4/1褐色 断：10YR5/2灰黄黒	精良、長石、石英、雲母、角閃石(河内)	
99	31	25b	27	3-63	8区	ピット01	深鉢	(35.0)	残 15.9		内：10YR7/3C/5ない黄褐 10YR5/2褐色 外：10YR7/2C/5ない黄褐 10YR4/1褐色 断：10YR7/3C/5ない黄褐 10YR5/2褐色	長石、石英、雲母、チャート	
100	36	26a	10	3-26	5区南半	包含層2	深鉢？				内：10YR5/2灰黄褐 10YR7/3C/5ない黄褐 外：2.5Y8/4にぶい橙 10YR6/3C/5ない黄褐 断：10YR6/3C/5ない黄褐	底部に縄文あり 長石、石英、チャート、クサリ織	
101	36	26b	4	3-3	5~9区 東側構	包含層	深鉢	(30.8)	残 7.5		内：10YR6/2灰黄褐 10YR3/2黒褐 外：10YR6/2灰黄褐 断：2.5Y6/2灰黄 2.5Y4/1灰灰	長石、石英、チャート	
102	36	26a	1	3-1	9区 東西方向構	包含層	深鉢				内：10YR7/4にぶい黄褐 10YR5/4灰黄褐 外：10YR7/4C/5ない黄褐 N3/0灰灰 断：10YR7/3C/5ない黄褐 2.5Y5/3褐色	長石、石英、雲母、角閃石	口唇部に刻目。 口唇原体は貝又は先割れのもの
103	36	26a	3	3-3	5~9区 東側構	包含層	深鉢				内：7.5Y3/1オリーブ黒 7.5Y3/1オリーブ黒 2.5Y5/2灰灰 断：7.5Y3/1オリーブ黒 2.5Y5/2暗黄	長石、石英、雲母	口唇部刻目
104	36	26a	7	3-19	7.8区	包含層	浅鉢				内：5Y6/1灰 外：2.5Y7/2灰黄 断：2.5Y6/2灰黄	長石、石英、雲母	
105	36	26a	5	3-13	8区	包含層	深鉢				内：2.5Y3/1黒褐 外：10YR3/3暗褐 断：10YR5/3にぶい黄褐	長石、石英、雲母、角閃石(河内)	
106	36	26b	28	3-65	8区	包含層	深鉢	(33.0)	残 14.8		内：2.5Y4/1黄灰 外：断：2.5Y4/1黄灰 10YR7/4にぶい黄褐	胎土接合痕明瞭 長石、石英、チャート	

表6 繩文土器観察表 8

遺物 No.	拂 団 版 No.	団 版 No.	実 測 No.	登 録 No.	地 区 名	遺構 層位	器種	法 量			色調	胎土	備考
								口径	器高	底径			
107	36	26a	8	3-19	7.8区	包含層	深鉢				内：2.5Y3/1黒褐色 外：2.5Y3/1黒褐色 断：2.5Y5/2灰灰黃	長石、石英、雲母	
108	36	26a	20	3-62	不明	包含層	浅鉢？				内：10YR4/1褐色 外：10YR6/2灰黃褐色 10YR3/2灰褐色 断：10YR4/1褐色	長石、石英、雲母	
109	36	26b	21	3-65	8区	包含層	浅鉢				内：10YR5/2灰黃褐色 外：10YR5/3にぶい黄褐色 10YR4/2灰褐色 断：7.5YB6/6橙 7.5YB5/3にぶい褐色	精良。長石、石英、雲母	
110	36	27a	26	3-36	8区 西半	包含層2	浅鉢	(22.0)	残 4.6		内・外：10YR4/1褐色 断：10YR6/3にぶい黄褐色 10YR7/4にぶい黄褐色	長石、石英、雲母	
111	36	27a	2	3-2	9区 東側溝	包含層	浅鉢？	(11.4)	残 3.8		内：10YR7/4にぶい黄褐色 5YR6/6橙 外：10YR7/4にぶい黄褐色 5YR6/6橙 断：5YR5/6明赤褐色	長石、石英、雲母	
112	36	27a	30	3-27	4区	包含層2	浅鉢	(28.6)	残 4.5		内：2.5Y3/1黒褐色 外：10YR6/3にぶい黄褐色 10YR4/1褐色 断：10YR5/2灰黃褐色	精良。長石、石英、雲母、角閃石(河内)	
113	36	27a	19	3-49	7区	包含層	浅鉢				内：10YR3/2黒褐色 外：10YR3/2黒褐色 断：10YR6/3にぶい黄褐色	精良。長石、石英、雲母	
114	36	27a	29	3-27	4区	包含層2	浅鉢	(34.0)	残 6.75		内：7.5YB6/6橙・5Y5/1灰 外：7.5YB7/6橙 断：7.5YB7/6橙 2.5Y6/3にぶい黄	長石、石英	表面剥離
115	36	27a	6	3-14	7区	包含層	浅鉢底 部		残 2.4	(6.0)	内：7.5YB6/6橙 7.5YB5/2灰褐色 外：7.5YB5/4にぶい橙 7.5YB5/3にぶい橙 断：7.5YB4/3褐色	長石、石英	
116	37	27b	14	3-36	8区 西半	包含層2	深鉢	(23.4)	残 8.2		内：10YR6/2灰黃褐色 外：10YR6/3にぶい黄褐色 断：10YR7/3にぶい黄褐色	長石、石英、雲母、チャート	
117	37	27b	15	3-45	4区 東半	包含層2.3	深鉢				内：10YR4/2灰黃褐色 10YR4/1褐色 断：10YR6/2灰黃褐色	長石、雲母、チャート	
118	37	27b	18	3-46	4.5区	包含層	深鉢				内：10YR6/2灰黃褐色 10YR4/1褐色 外：10YR5/2灰黃褐色 断：10YR7/3にぶい黄褐色	長石、石英、チャート	
119	37	28a	22	3-27	4区	包含層2	深鉢	(38.0)	残 13.65		内・外・断：10YR4/4褐色	長石、石英、雲母、角閃石(河内)	口唇部剥離
120	37	27b	9	3-23	9区	包含層2.3	深鉢				内：7.5Y5/4にぶい褐色 外：7.5Y4/3褐色 7.5Y2/1黒褐色 断：10YR4/2灰黃褐色	長石、石英、雲母、角閃石(河内)	
121	37	27b	16	3-45	4区 東半	包含層2.3	深鉢				内：10YR7/2にぶい黄褐色 10YR6/1褐色 外：10YR7/3にぶい黄褐色 10YR6/2灰黃褐色 断：10YR6/3にぶい黄褐色	長石、石英、雲母	

表6 繩文土器觀察表 9

遺物 No.	拂 國 No.	國 版 No.	実 測 No.	登 録 No.	地 区 名	遺構 層位	器種	法 量			色調	胎 土	備 考
								口径	器高	底径			
122	37	27b	17	3-45	4区 東半	包含層2.3	深鉢				内：7.5Y4/3褐色 5Y2/1黒 外：7.5Y4/3褐色 5Y2/1黒 断：10YR3/2黒褐色	長石、石英、雲母、角閃石(河内)	
123	37	27b	13	3-36	8区 西半	包含層2	深鉢				内：7.5YR6/4にぶい橙 7.5YR6/6橙 外：10YR4/1橙 断：10YR5/2にぶい橙	長石、石英、雲母	
124	37	28b	24	3-36	8区 西半	包含層2	浅鉢	(25.25 )	残 7.2		内・外：10YR6/2灰黃褐色 断：10YR6/3にぶい黃褐色	精良。長石、石英、雲母	
125	37	28b	23	3-36	8区 西半	包含層2	浅鉢	(20.8)	残 6.7		内：5Y3/1オリーブ黒・ 10YR5/3にぶい黃褐色 外・断：2.5Y4/1黄灰・ 10YR6/3にぶい黃褐色	長石、石英、雲母、角閃石(河内)	上下の接合、不確美
126	37	28b	25	3-36	8区 西半	包含層2	浅鉢	(19.0)	残 5.9		内・外：10YR5/3にぶい黃褐色 断：10YR4/1褐灰	長石、石英、雲母、角閃石(河内)	
127	37	28b	11	3-24	8区	包含層2	浅鉢	(34.5)	残 3.8		内：2.5Y6/2灰黃 5Y4/1灰 外：10YR7/4にぶい黃褐色 10YR5/2灰黃褐色 断：2.5Y6/2灰黃	長石、石英、チャート	二次焼成？

## 報告書抄録

ふりがな	みやけ北いせき							
書名	ミヤケ北遺跡							
副書名	主要地方道柏原駒ヶ谷千早赤阪線交差点改良工事に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	2011-8							
編集著者名	山田隆一、大野 薫、館 邦典							
編集機関	大阪府教育委員会							
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前二丁目 Tel 06-6941-0351(代表)							
発行年月日	2012年3月30日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
みやけ北いせき ミヤケ北遺跡	おおさかふみみなみかまちぐんたいし ちょうたいし 大阪府南河内郡太子町 太子	27381	97	34° 30' 59"	135° 37' 38"	20090608～ 20090630 20100602～ 20100715 20110105～ 20110131	77m <sup>2</sup> 270m <sup>2</sup> 240m <sup>2</sup>	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ミヤケ北遺跡	集落跡	縄文晩期	土器棺墓 ピット群 ほか	縄文土器、石器ほか	
要 約	本遺跡は、北北西にのびる二条の埋没微高地に立地する縄文晩期の集落遺跡である。遺構は、住居と考えられるピット群や土器棺、石器製作跡であるサヌカイト集中部等がある。遺物は、縄文土器と打製石器の他、凹石や敲石、有溝砥石、磨石等が出土した。				

大阪府埋蔵文化財調査報告2011-8
<b>ミヤケ北遺跡</b>
主要地方道柏原駒ヶ谷千早赤阪線交差点改良工事に伴う発掘調査
発行 大阪府教育委員会
〒540-8571 大阪市中央区大手前二丁目
Tel 06-6941-0351 (代表)
発行日 平成24年3月30日
印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所
〒537-0002 大阪市東成区深江南二丁目六番八号
Tel 06-6976-8761 (代表)

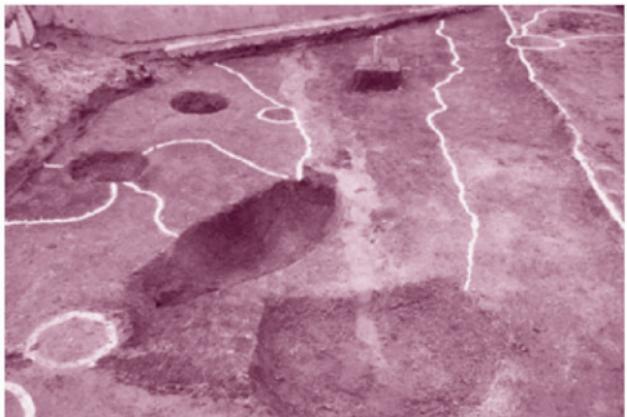
# 図 版



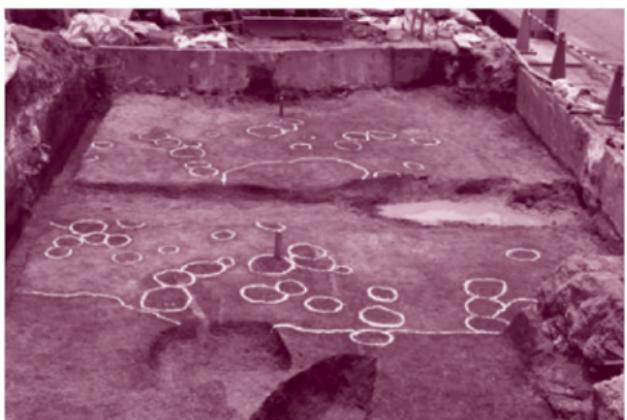
ミヤケ北遺跡と二上山（南西から、▲は土器館の位置）



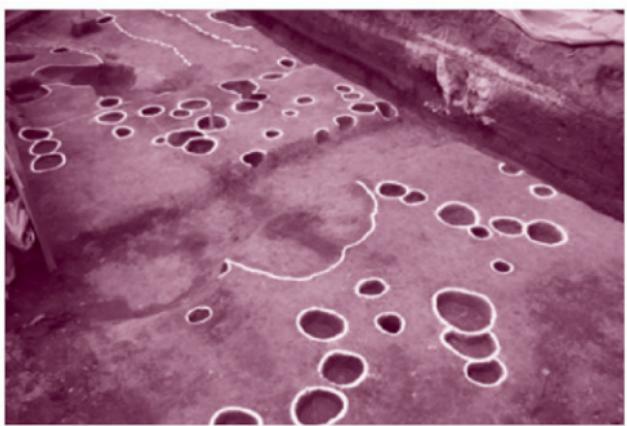
a. 遺構完掘状況（北から）



b. 落込み01掘削状況（南から、中央は噴砂）



c. ピット集中部検出状況（北から）



a. ピット集中部完掘状況（南西から）



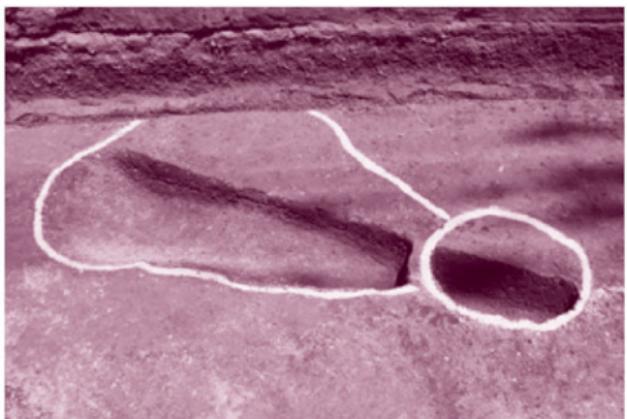
b. ピット集中部東壁断面（北西から）



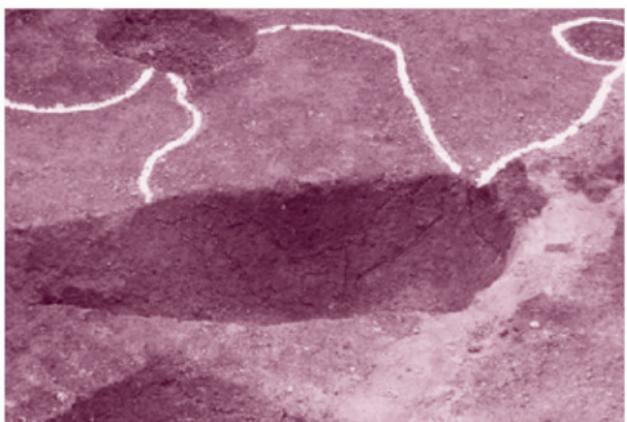
c. ピット集中部中央土坑04断面（東から）



a. 落込み02掘削状況（南西から）



b. 土坑01・02掘削状況（北西から）



c. 土坑05断面（南東から）



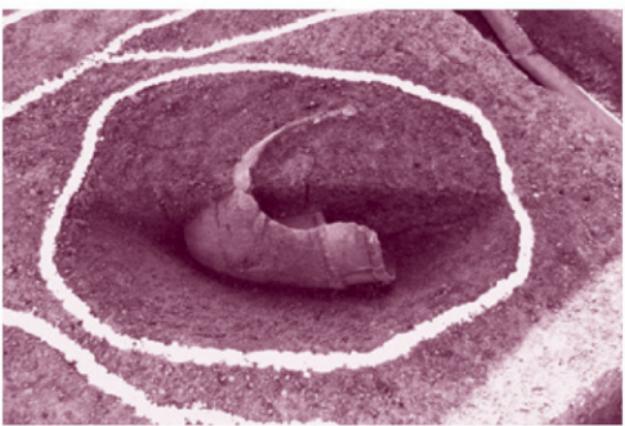
a. 北区遺構完掘状況（北から）



b. 北区北半遺構完掘状況（南西から）



c. 北区北東部遺構検出状況（北西から）



a. 土器棺01掘削状況（南東から）



b. 土器棺01掘削状況（南から）



c. 土坑02掘削状況（南西から）



a. 北区流路12掘削状況（南南西から）



b. 南区南半掘削状況（南南東から）



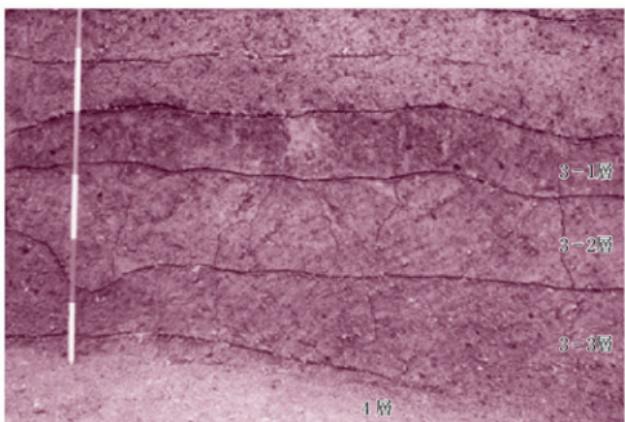
c. 南区南半掘削状況（北北東から）



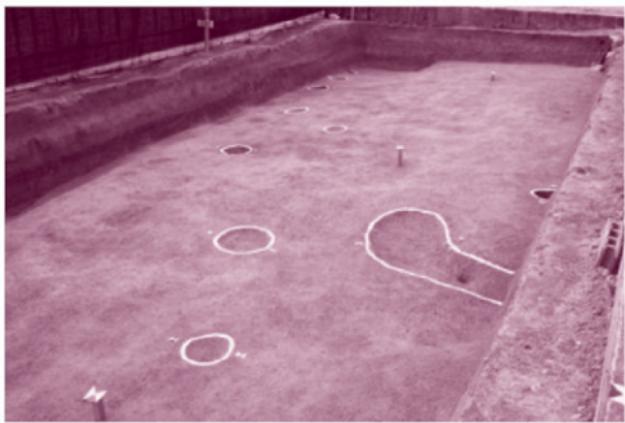
a. 遺構完掘状況（北から）



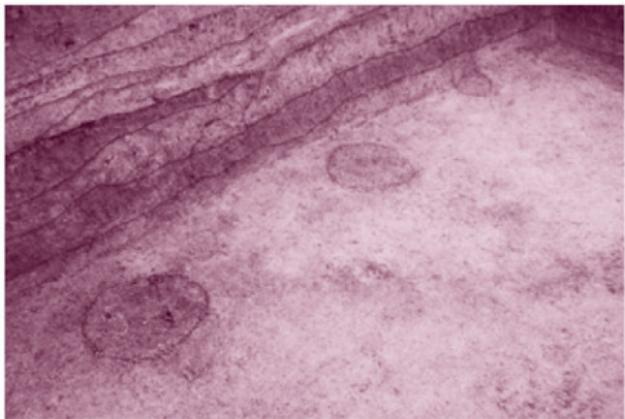
b. 東壁土層断面（北北西から）



c. 東壁土層断面、第3-1~3層（西から）



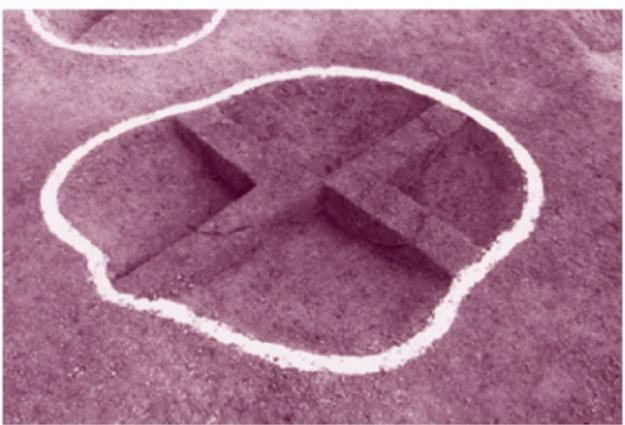
a. 南端ピット群掘削状況（北西から）



b. 南端ピット群検出状況、左端ピット01（北西から）



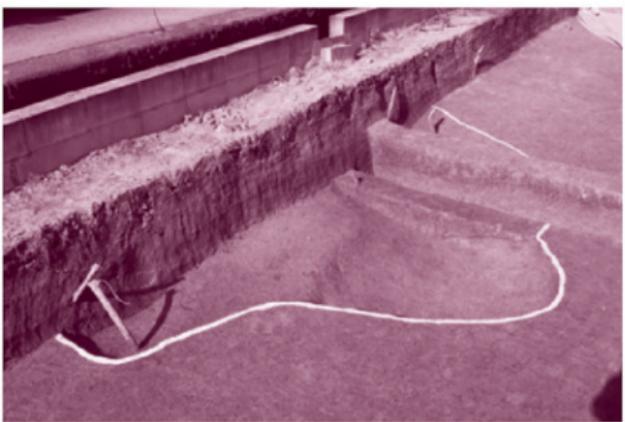
c. ピット01深鉢出土状況（北西から）



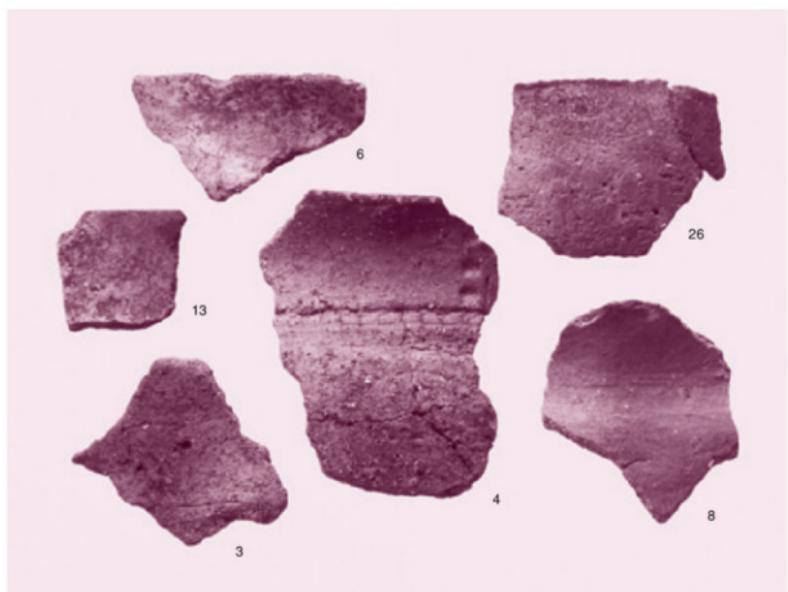
a. 土坑03掘削状況（北西から）



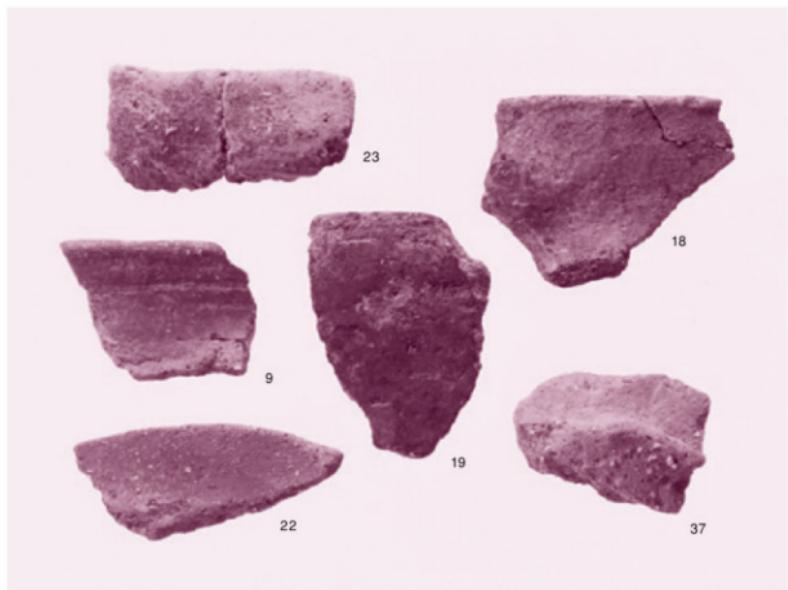
b. 土坑05掘削状況（北東から）



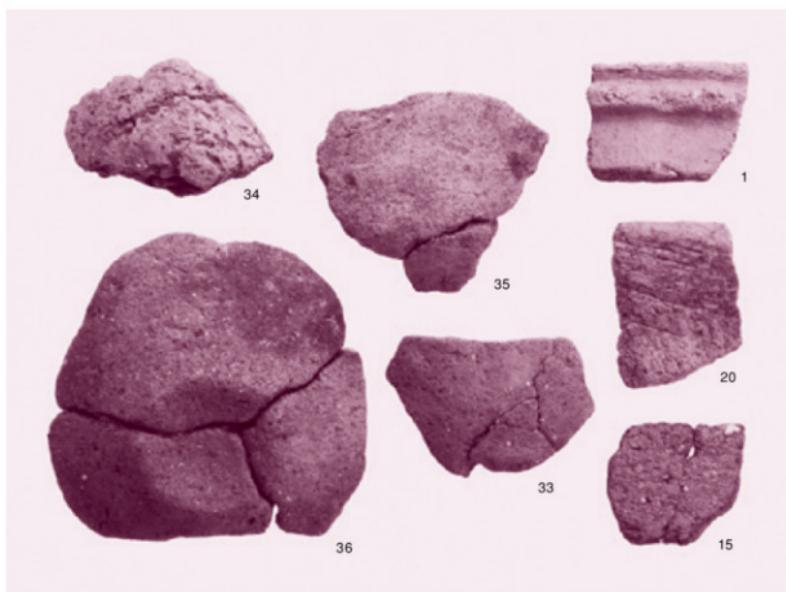
c. 土坑01掘削状況（南東から）



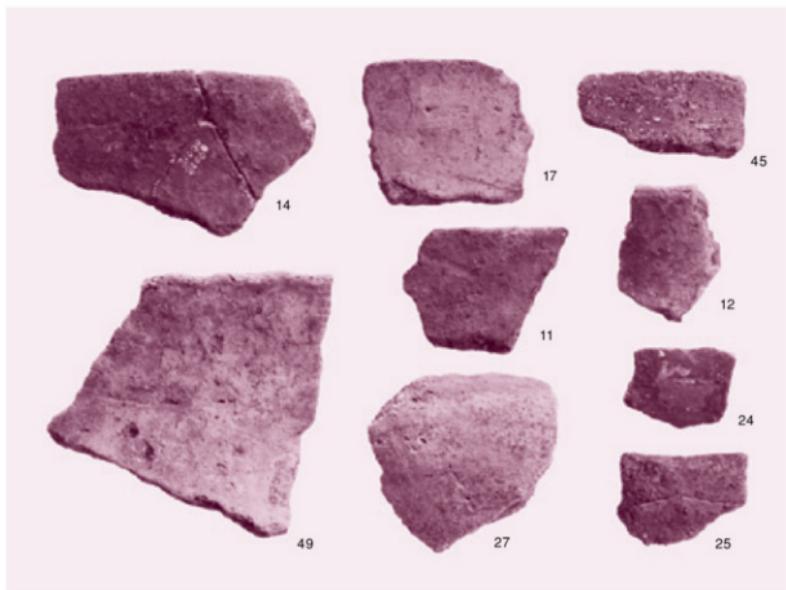
a. 落込み01出土 繩文土器



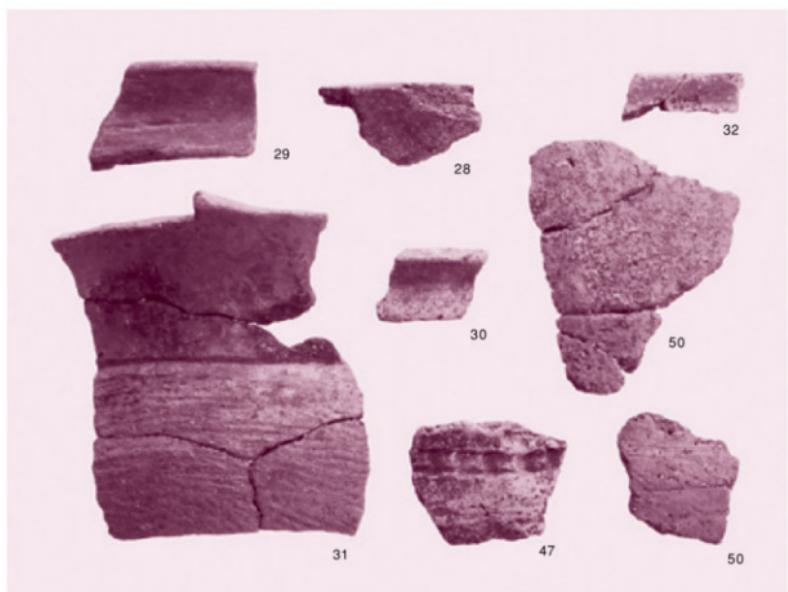
b. 落込み01出土 繩文土器



a. 落込み01出土 繩文土器



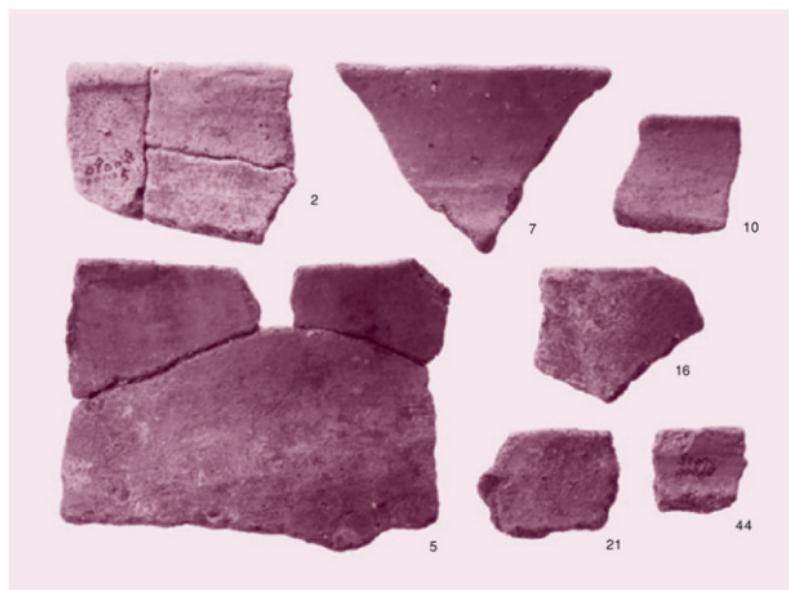
b. 落込み01・包含層出土 繩文土器（包含層45・49）



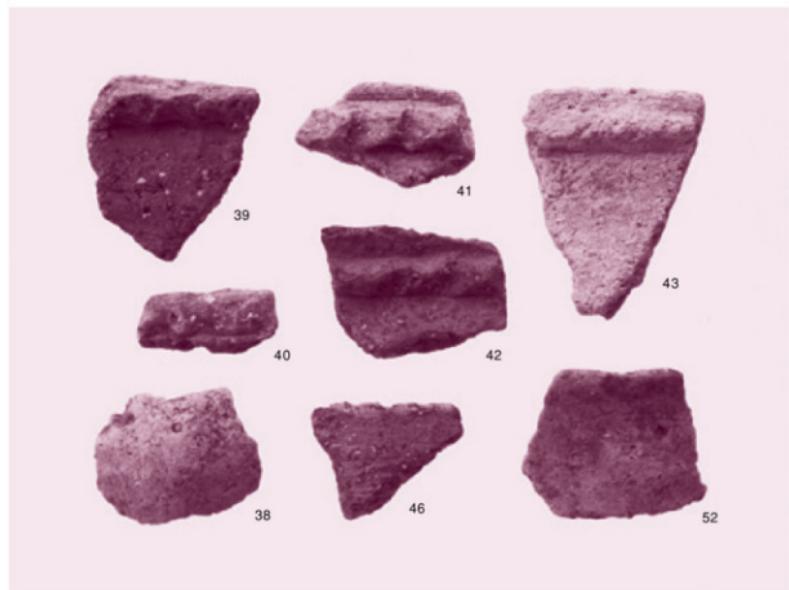
a. 落込み01・包含層出土 繩文土器（外面、包含層47・50）



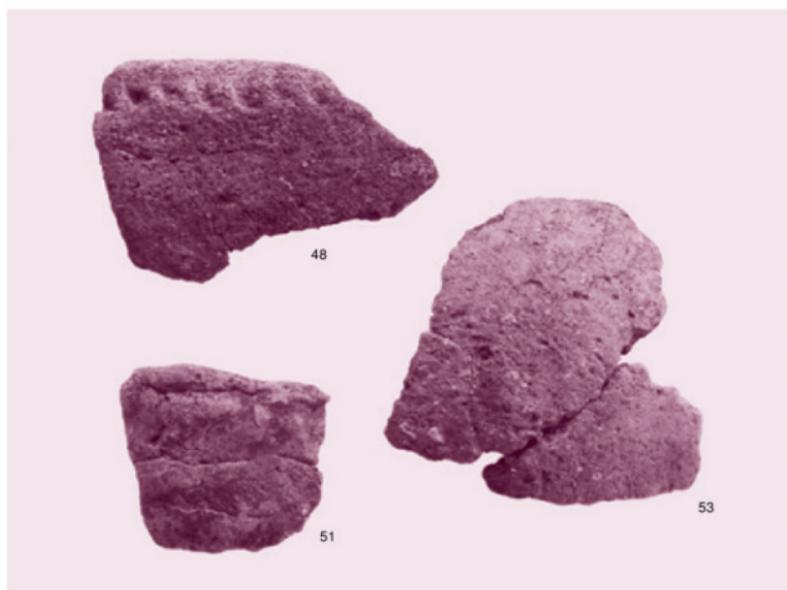
b. 落込み01・包含層出土 繩文土器（内面）



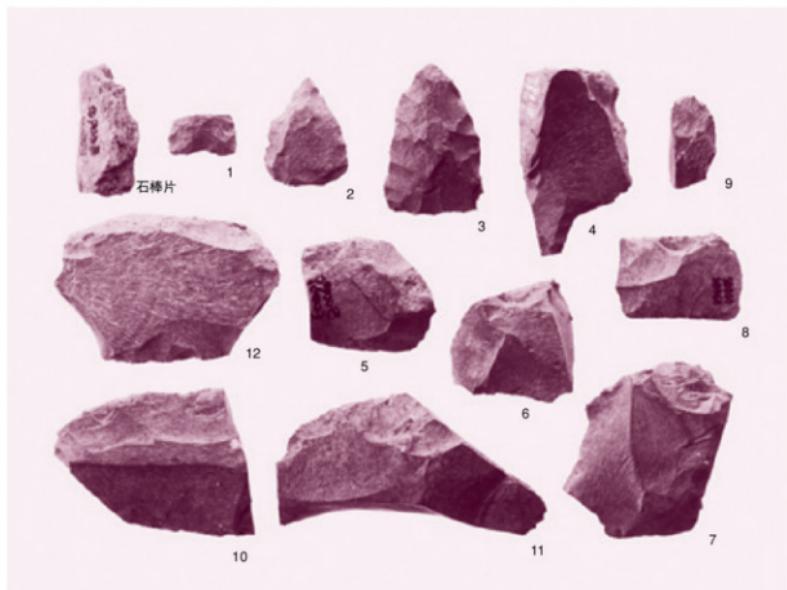
a. 落込み01・包含層出土 繩文土器（包含層44）



b. 造構出土 繩文土器（38~40）・包含層出土 繩文土器（41~43、46、52）



a. 包含層出土 繩文土器



b. 落込み 01・包含層出土 石器



54

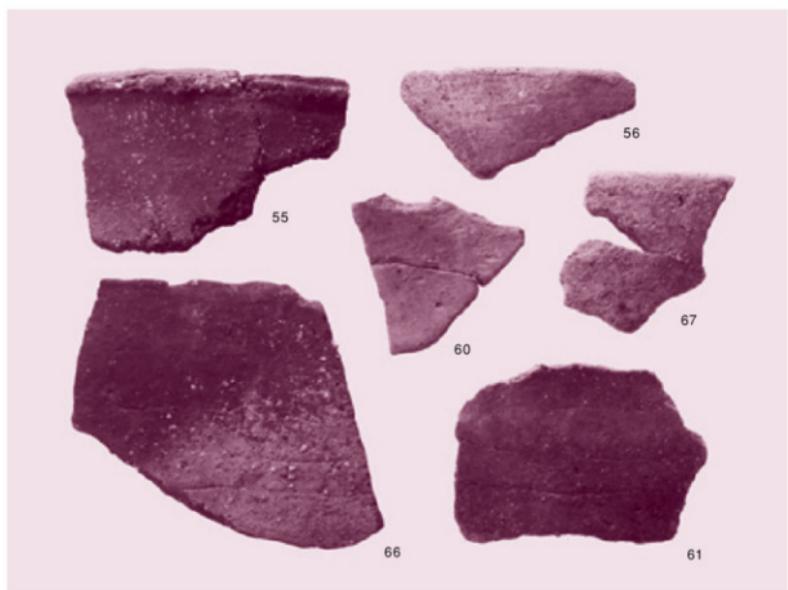
a. 土器棺



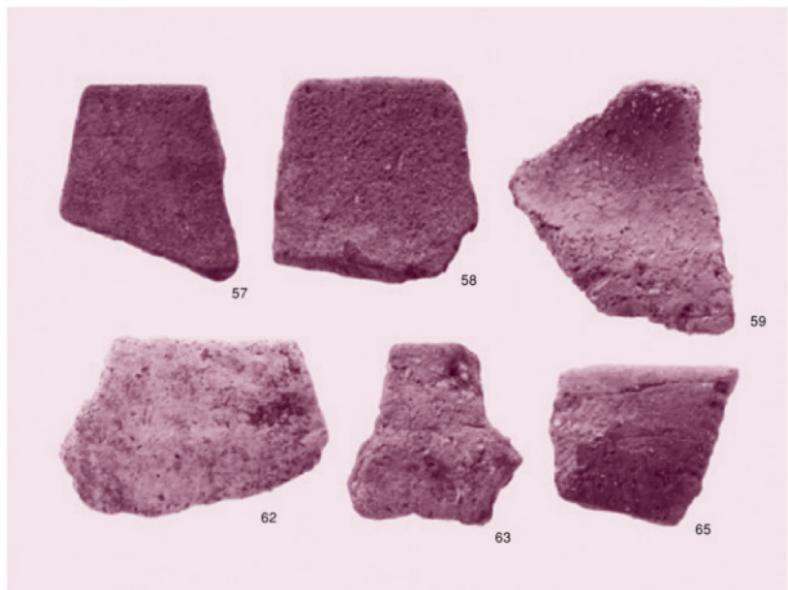
b. 土器棺底部



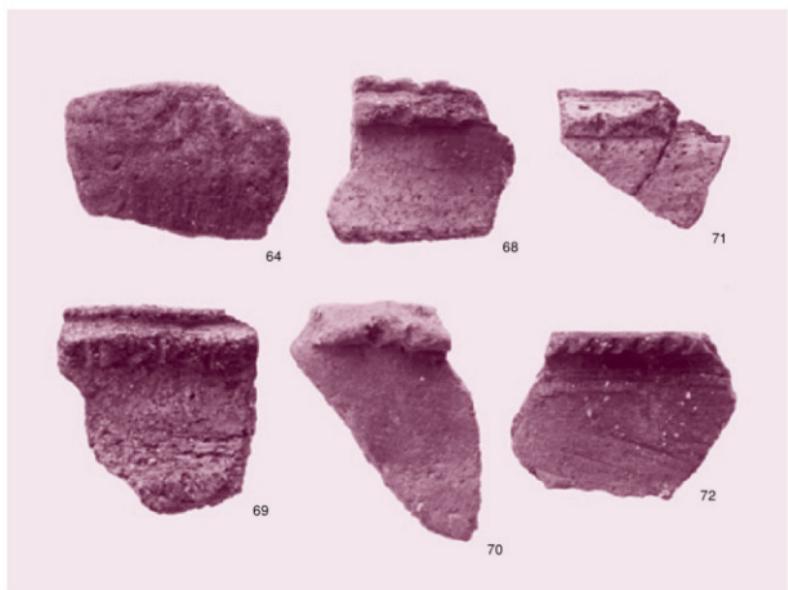
c. 土器棺口緣部



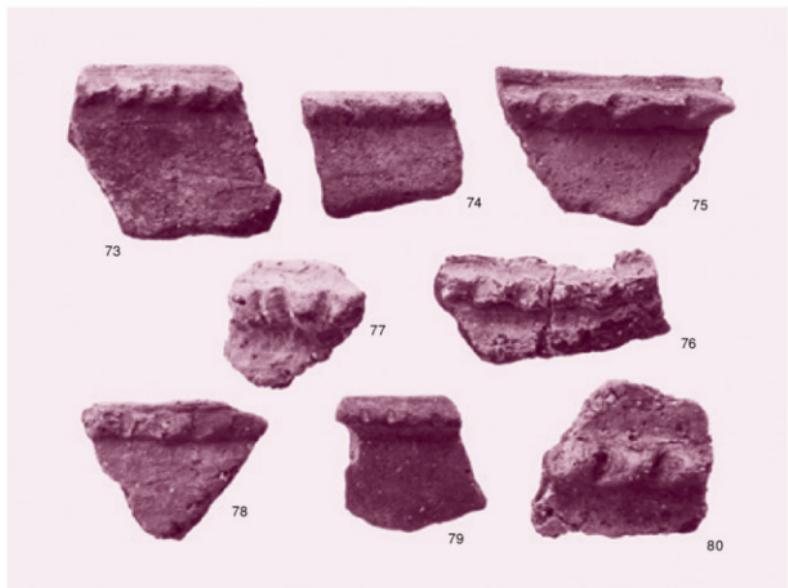
a. 北区土坑04出土 繩文土器 (55) · 包含層出土 繩文土器



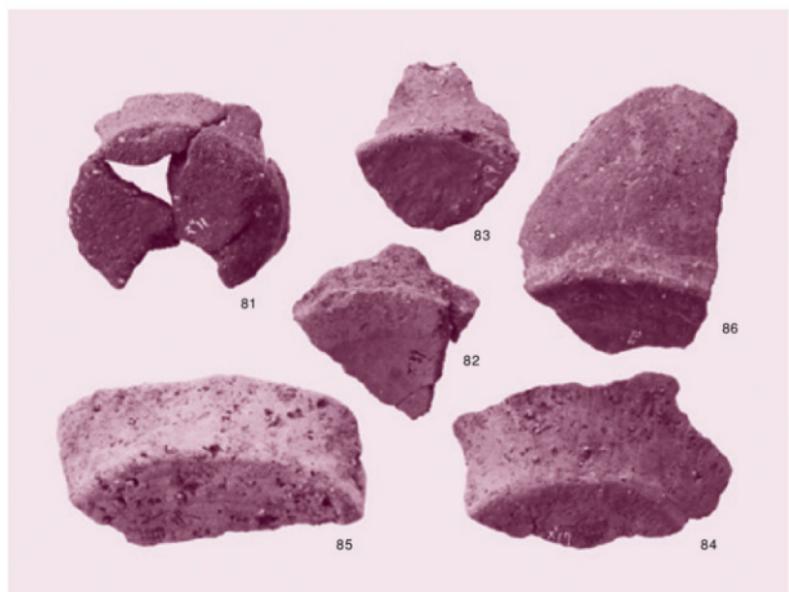
b. 北区包含層出土 繩文土器



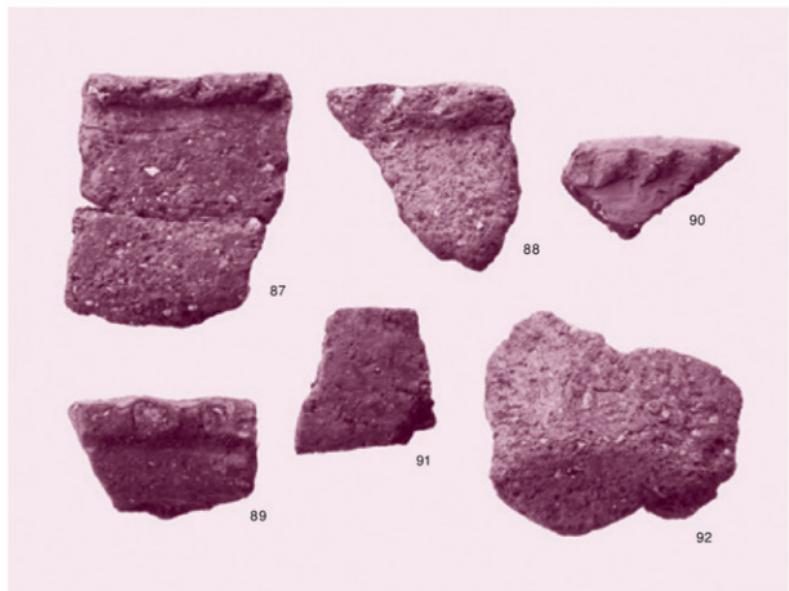
a. 北区包含層出土 繩文土器



b. 北区包含層出土 繩文土器



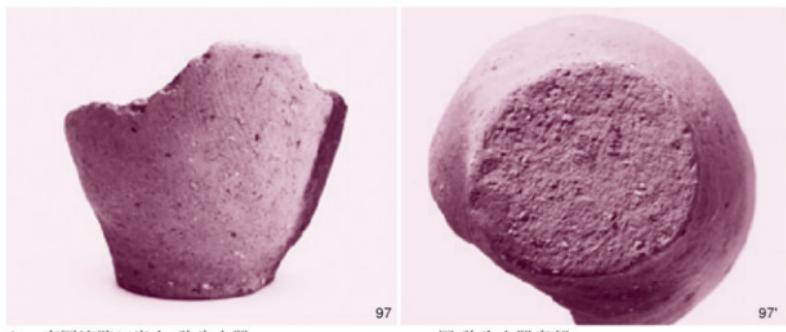
a. 北区包含層出土 繩文土器



b. 南区サスカイト集中遺構105出土 繩文土器

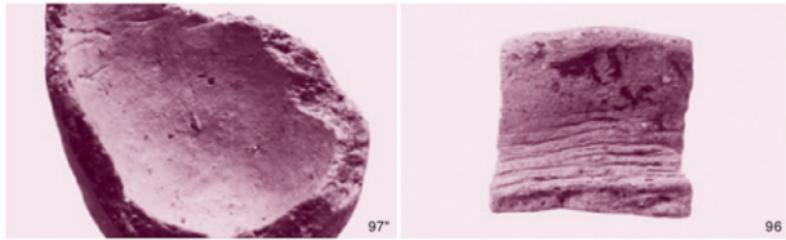


a. 南区流路12出土 繩文土器



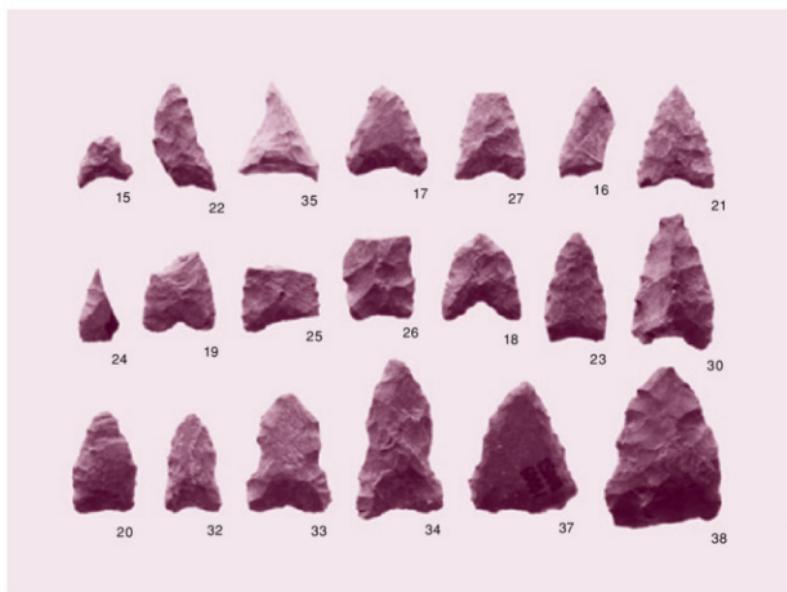
b. 南区流路14出土 弥生土器

c. 同 弥生土器底部

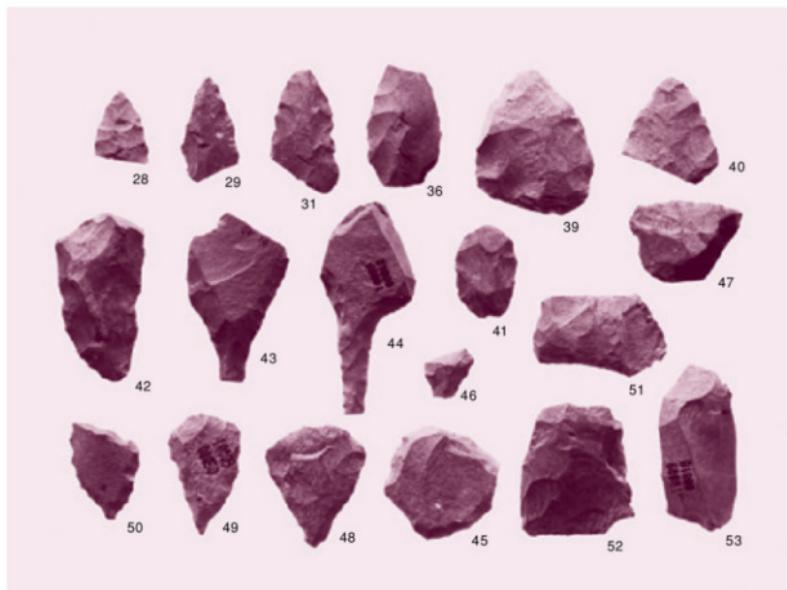


d. 同 弥生土器内面

e. 南区流路12出土 弥生土器



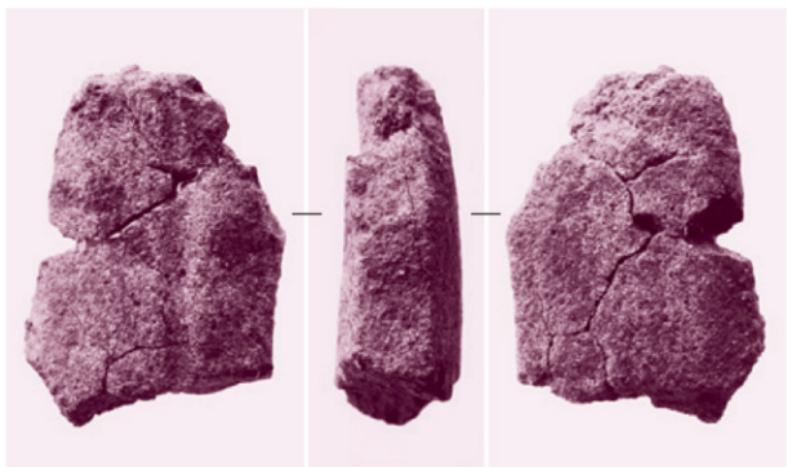
a. 北区包含層出土 石鏃



b. 北区包含層出土 石鏃他

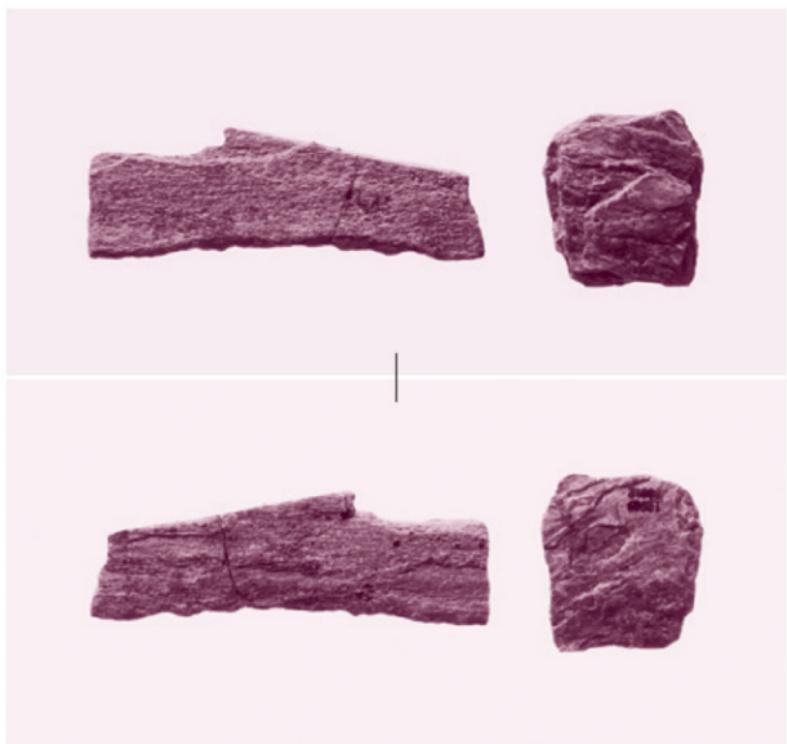


a. 側溝出土 有溝砥石

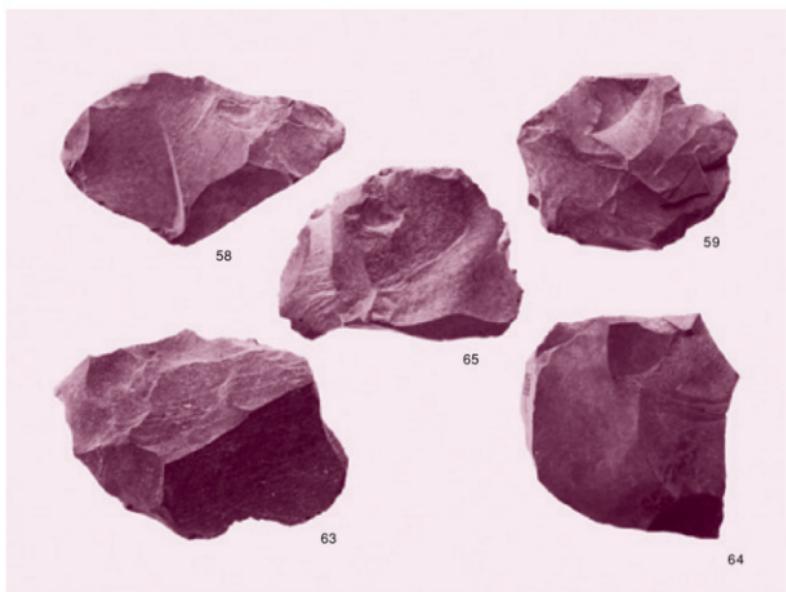




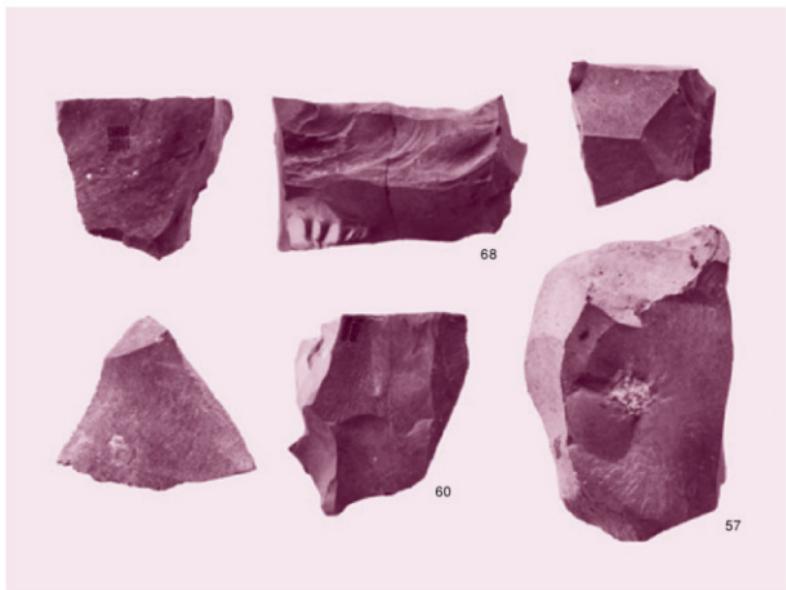
a. 北区土坑02出土 磨石



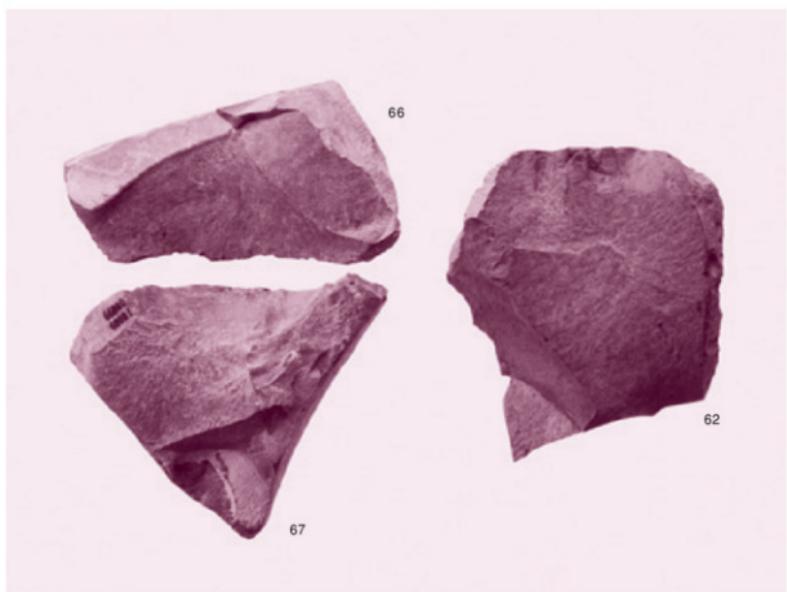
b. 北区出土 石锯·粘板岩片



a. 南区サスカイト集中遺構105出土 石核



b. 南区サスカイト集中遺構105出土 石核他



a. 南区サスカイト集中遺構105出土 石核

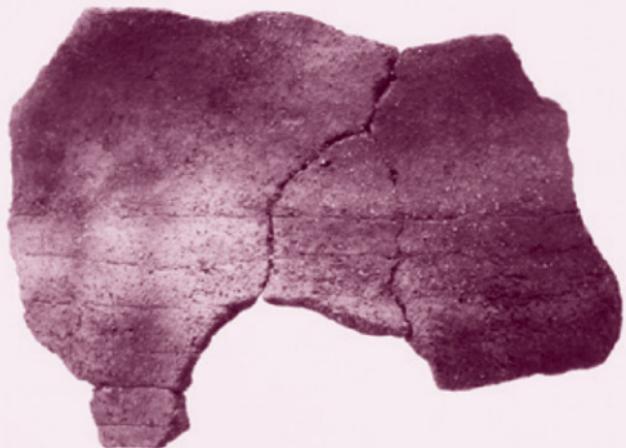


b. 南区サスカイト集中遺構105出土 刮片他



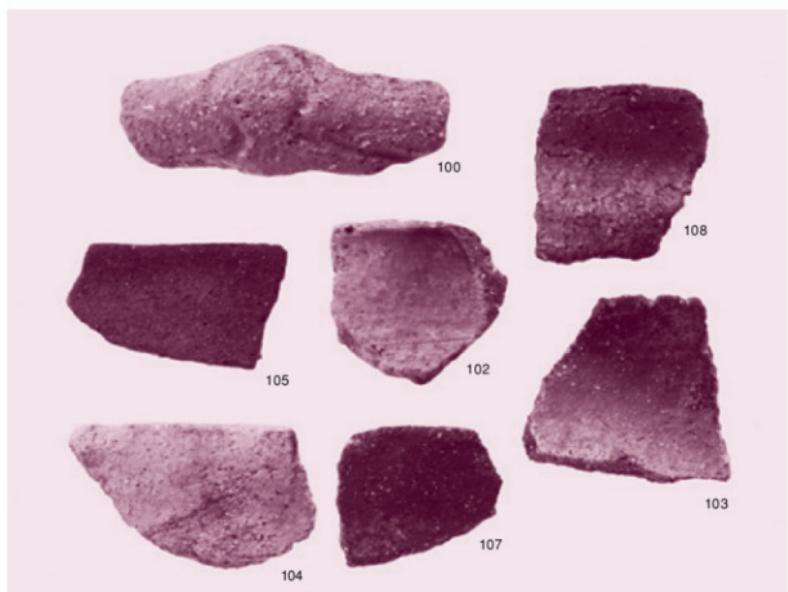
98

a. ピット01出土 繩文土器

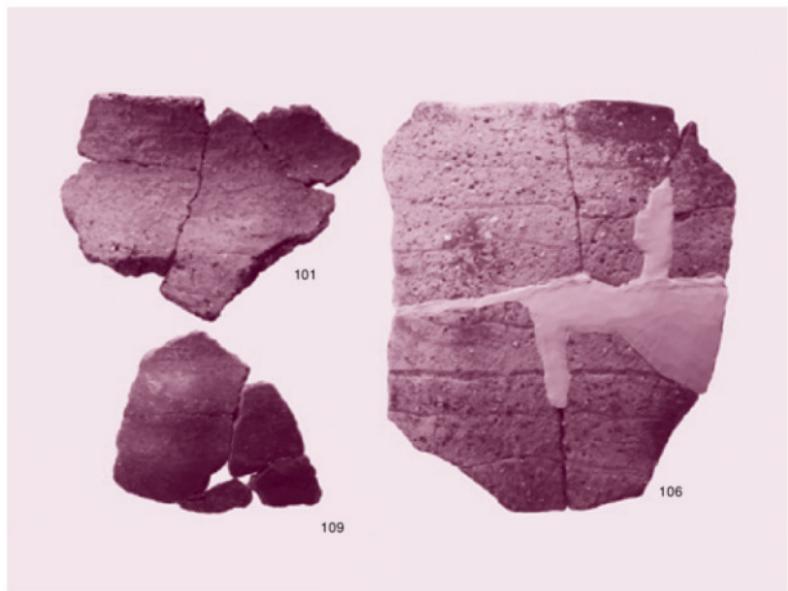


99

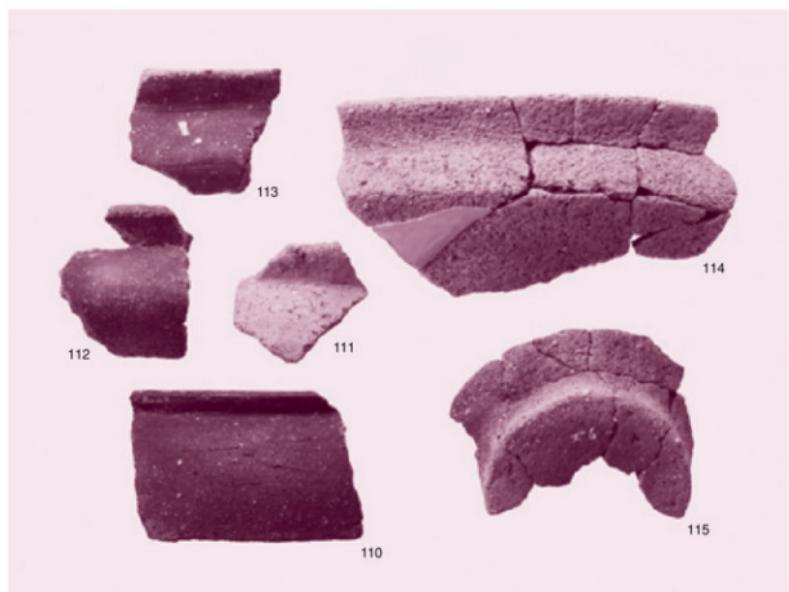
b. ピット01出土 繩文土器



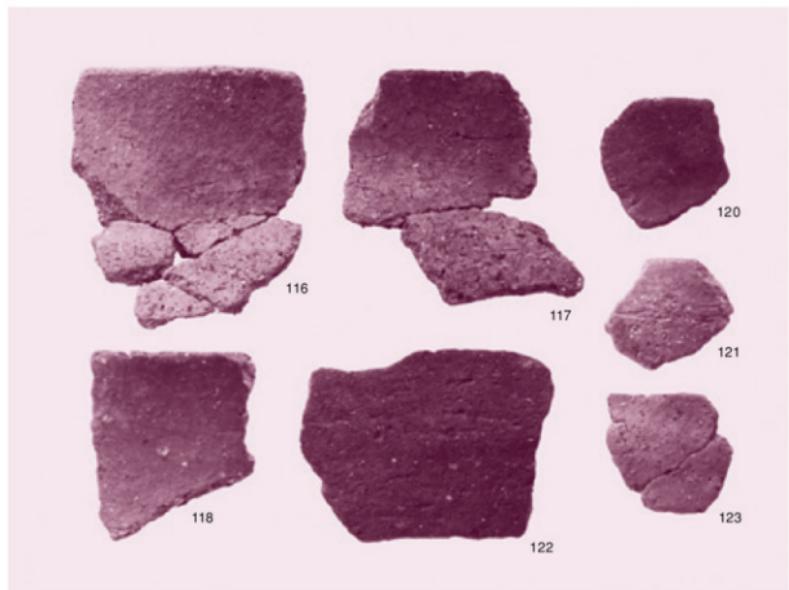
a. 包含層出土 繩文土器



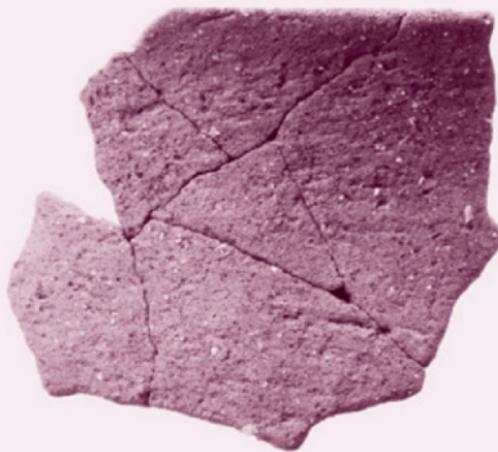
b. 包含層出土 繩文土器



a. 包含層出土 繩文土器

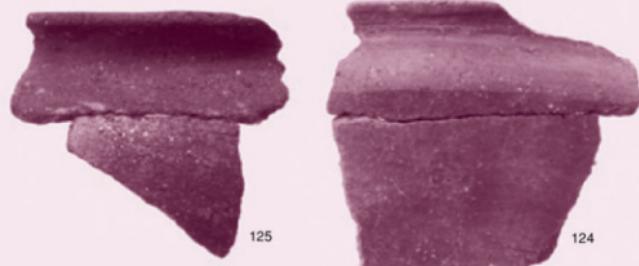


b. 包含層出土 繩文土器



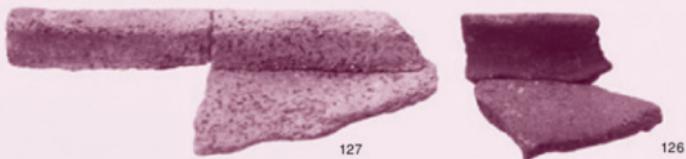
119

a. 包含層出土 繩文土器



125

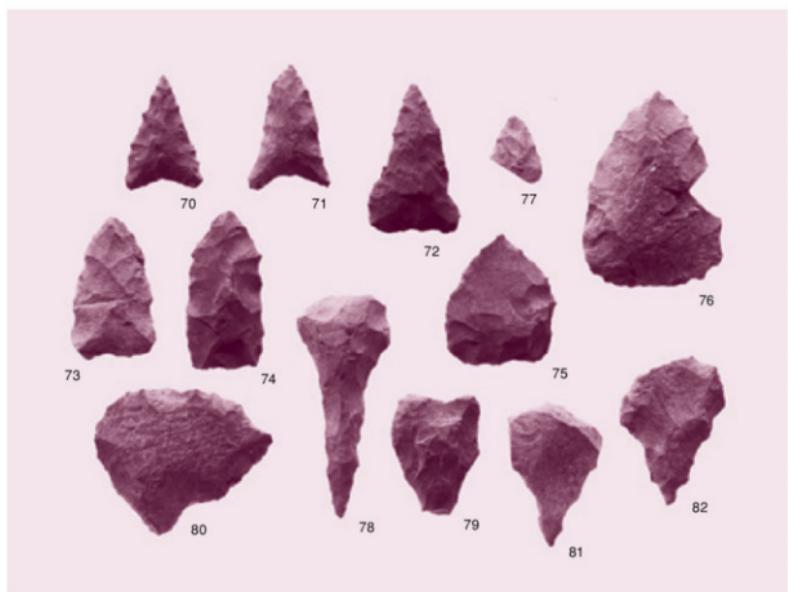
124



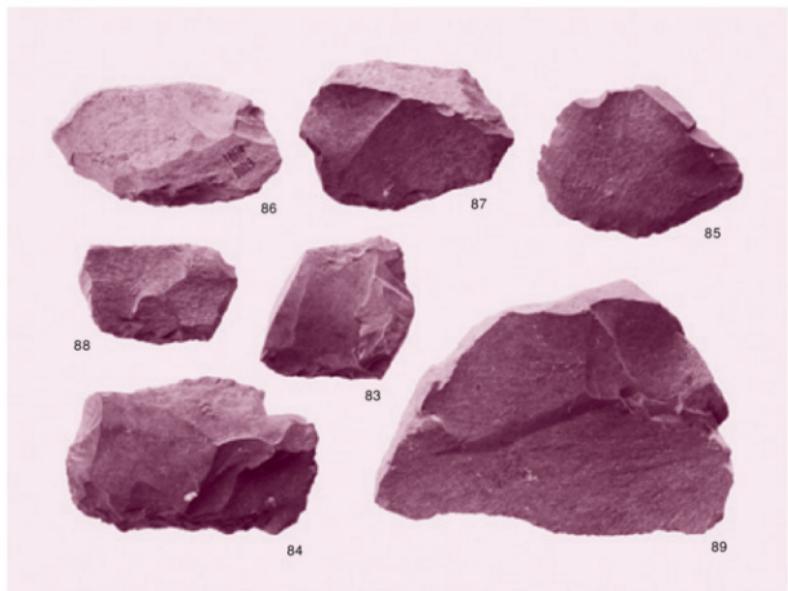
127

126

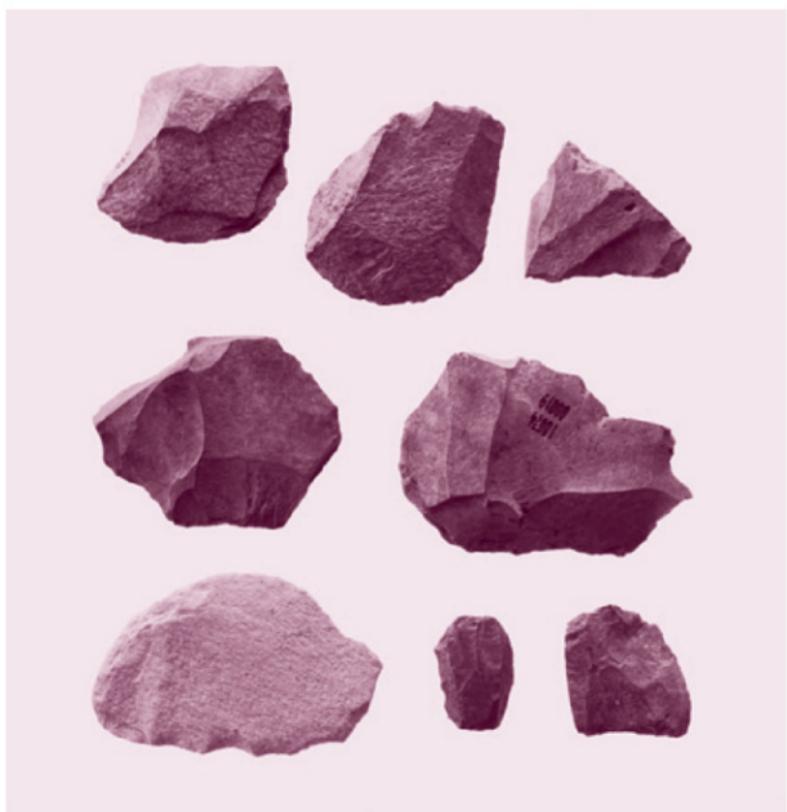
b. 包含層出土 繩文土器



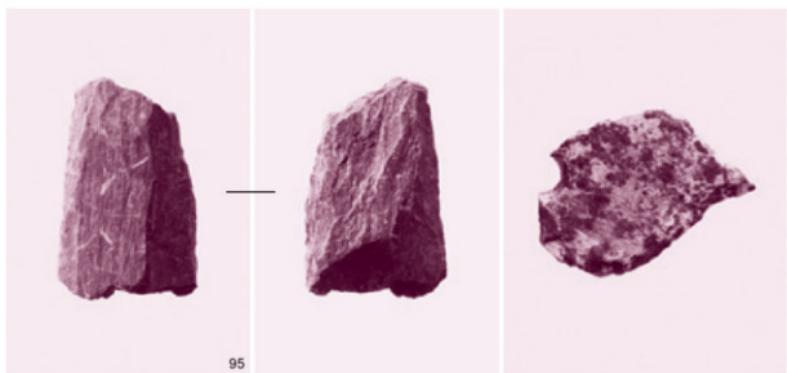
a. 包含層出土 石鏃・石錐



b. 包含層出土 刮削器

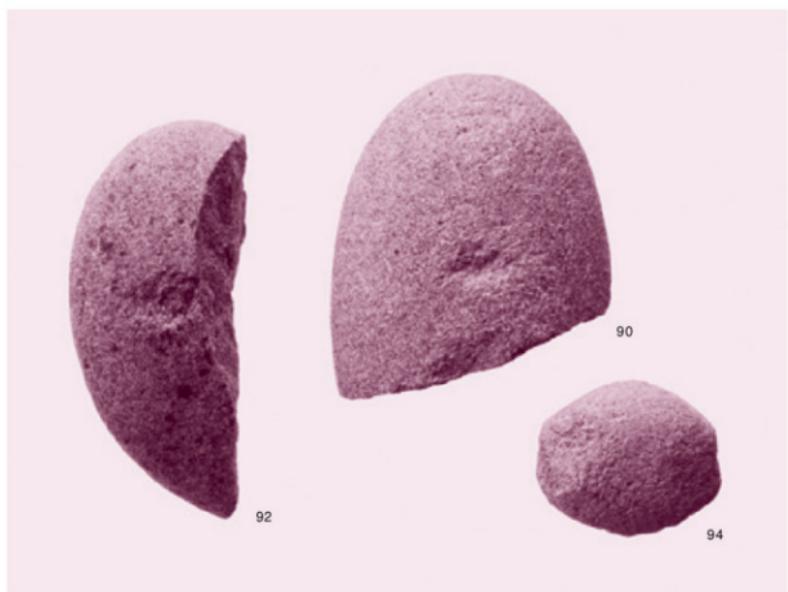


a. 包含層出土 削器・クサビ形石器



b. 包含層出土 石刀

c. 包含層出土 磨製石庖丁



a. 包含層出土 蔽石・凹石



b. 包含層出土 凹石